



RITSUMEIKAN
UNIVERSITY



ASIA-JAPAN
RESEARCH INSTITUTE
RITSUMEIKAN UNIVERSITY
アジア・日本研究所

日中韓詞学論文集

花間集から近藤元粹まで

日中韓詞學論文集：從花間集到近藤元粹

靳春雨 編

立命館大学アジア・日本研究所
立命馆大学亚洲・日本研究所

AJI BOOKS

日中韓詞学論文集
花間集から近藤元粹まで

靳 春雨 編

Asia-Japan Research Institute
Ritsumeikan University

ISBN 978-4-910550-04-6 (Online)

ISBN 978-4-910550-05-3 (Print)

日中韓詞学論文集
花間集から近藤元粹まで

**Ci Poetry in Japan, China and Korea:
Studies on Huajianji to Kondo Gensui**

AJI Editorial Office
OIC Research Office,
Ritsumeikan University Osaka Ibaraki Campus (OIC)
2-150 Iwakura-cho, Ibaraki,
Osaka 567-8570 JAPAN
Email: aji-eb@st.ritsumei.ac.jp

Copyright © 2023 Asia-Japan Research Institute, Ritsumeikan University

目次

序	
小杉 泰	iv
まえがき	
斬 春雨	vi
執筆者紹介	xiv
近藤南州の手記「詩餘」	
萩原 正樹	1
论花间词人的越地想象与书写	
汪 超	17
朝鮮前期元好問『遺山樂府』의 受容에 대하여: 金時習의 예를 중심으로	
魯 耀翰	29
文學史系譜的的建立: 《詞律》中周邦彥、方千里、吳文英三家詞的內在理路	
李 日康	60
和刻本元好問詩詞集的刊行及其在日本的受容探析	
斬 春雨	94

序

AJI Books シリーズの中の1冊として本書が上梓されることは、刊行者である立命館大学アジア・日本研究所にとって大変喜ばしいことです。編者のDr. 靳春雨と共同執筆者の皆さまにも、お慶びを申し上げます。

このシリーズは、これまで主として英語で刊行をおこなってきました。国際的な研究成果の発信、あるいは研究活動のグローバルな告知という、英語でおこなうことが昨今では、当たり前になっています。確かに、事実上の国際共通語となっている英語を使うことは便利ではありますが、「グローバル」ということは、インターネットの実態を見るまでもなく、実際には多言語ということでもあります。アジア・日本研究所では、日本語とアジア諸言語についても、機会があればいつでも、おおいに活用したいと思っています。

その意味で、日中韓の3言語を用いた研究集会と、それを基にした本書が3言語で刊行されることは、研究所の趣旨にも合致しており、とても嬉しいことです。2020年に開催された「日中韓詞学文化交流研究会」では、日本、中国大陸と台湾・香港、韓国から素晴らしい先生方にご参加いただき、非常に興味深い研究報告と討議がおこなわれました。

アジア・日本研究所は、アジアと日本に関わる研究をおこなう研究機関として、2015年12月に設立されました。研究所としては、まだ新しい部類に入ります。「アジア・日本研究」とは何かというと、英語ではAsia-Japan Researchというふうに、アジアと日本をダッシュで結んでいます。Asia and Japanではないわけです。これは、日本がアジアの一部であることを前提にアジア研究をすることを意味しています。

アジアと日本に関わるさまざまなテーマを研究するため、いろいろな分野を横断する学際的な研究を重視しています。本書のテーマのように、文学、人文学、人文科学のもっとも重要な部分を扱う研究もあります。本書では、中国の宋代(960~1279年)の代表的な文学である詞を中心とした研究をおこない、「詞」を通じた日中韓の文化交流

について貴重な知見を明らかにしています。

アジア・日本研究所には、もう1つ重要な要素として、若手研究者の育成、つまり新しい世代の研究者が研究を発展させていくのをサポートするという使命があります。本書の編者である Dr. 靳春雨も、そのような若手研究者の1人として、研究所の若手育成プログラムを活用して、活発な研究活動と研究成果の発信をおこなっています。

アジア・日本研究の発展のために、あらためて、研究所の活動や AJI Books シリーズへのご支援とご鞭撻を読者の皆さまにお願いしたいと思います。

立命館大学アジア・日本研究所長

小杉 泰

まえがき

この『日中韓詞学論文集—花間集から近藤元粹まで』は、2020年度に、立命館大学アジア・日本研究所の「AJI 研究高度化推進プログラム」の「国際研究集会企画・開催補助」において、「日中韓詞学文化交流研究会」という申請題目で採択された研究会の成果です。研究会の準備にあたり、同研究所長の小杉泰先生より貴重なご意見とご教示を賜り、加えて11月29日研究集会の当日に開幕の辞をいただいたことに、深甚なる敬意と感謝を表する次第です。

漢字に基づいて構築されてきた東アジアの文明、いわゆる漢字文化圏の存在は、世界の発展に不可欠なものであったと言えます。また漢字文化圏における文化交流、特に知識人が大きな役割を果たす文学における文化交流の重要性は看過できません。他方で、経済の高度発展や先端科学技術が追求される今日、人間の根本としての精神的な余裕がなくなり、周囲の環境への感知や優れた文学作品に対する素朴な感性が益々薄くなってきたと痛感しています。そのため、今回の研究会を機に、よく知られる「詩」以外に、「詞」を連結点として日本・中国大陸・台湾・香港・韓国の知識人たちと文化交流を行ったことが伝達できれば、成功に繋がる一歩となると期待されます。

主たる成果としては、日本・中国大陸・台湾・香港・韓国からの5名の講演者が発表を行いました。いずれも講演内容は日中韓の文学史における連結点としての詞です。具体的には、下記の通りです。

萩原正樹先生は「近藤南州の手記『詩余』」において、明治時代の儒学者と漢詩人である近藤元粹（1850-1922、号は南州）の詞及び関連資料を論じました。大雅堂定亮編『増補詞学金粉』（青木嵩山堂、1897）に「詩余 近藤南州手記」が掲載されています。この論文では、中国の詩人の詩集を大量に校訂し、注や評語を附して出版した近藤元粹が、詞学についても造詣が深かったことが論じられています。論文に引く「詩余」も、近藤元粹の詞に関する知識を知るに十分な内容です。

汪超先生は「花間詩人の越地想像と書写」において、地理学の観点から、『花間集』の詞人たちの江南の「越地」に対する描写とそれらの作品間の関連性を論じました。花間派の作者の多くは越地で地元

ついて書いておらず、その創作は虚構と想像に彩られています。この想像力は、作詞家の空間認識や地理的認識を反映するだけでなく、テキストの制作や派生に関する興味深い問題をいくつも明らかにしています。この論文は2021年度の中国詞学研究会年会の優秀論文特等賞を受賞しました。

魯耀翰先生は「朝鮮前期元好問『遺山楽府』の受容：金時習を中心に」において、朝鮮前期における元好問『遺山楽府』の刊行事実とその享受様相について、金時習の事例を中心に検討し、金時習『関東日録』収録の五篇の詞作品は、元好問『遺山楽府』の目次順に従って一種の和韻の形式で作成したことを明らかにしました。また、金時習が元好問の詞の詞体や主題などを参考しつつも、それを転化して自分の詞領域を構築したことを論じました。

李日康先生は「文学史系譜の構築：『詞律』における周邦彦、方千里、呉文英三家詞の内的関連」において、三家の詞作品を手がかりとして、『詞律』の本質的な繋がりを探っています。このような関連性は具体的には、特有の形式が備わる体例、評注と編次に表現されています。三家詞の相互校正と比較という基準のもと、『詞律』の著者である万樹はそこから原理的な模範を抽出し、意識的にそれを深化、伝播させたのです。これは、詞譜を編集することで時代の悪弊を正すという万樹の実践であると同時に、文学史における彼の詞学観念と独自の知識体系を構成するものです。

靳春雨は「和刻本元好問詩詞集の刊行及び日本における受容について」において、元好問が編著した『中州集』の元代から清代までの各版本を紹介しました。室町後期の臨済宗僧惟高妙安（1480—1568）が抄物『詩学大成抄』で言及した『中州集』は、台湾国家図書館所蔵延祐乙卯刊元建安広勤書堂修補本です。また日本では、菊池溪琴編『遺山先生詩抄』、竹添井井編『元遺山先生詩選』等の和刻本が刊行されました。さらに、近藤元粹が校訂した『箋註宋元明詩選』を通じて、日本における元好問とその作品の受容状況を検討しました。

この研究会での発表によって、詞学における研究方法を参考にするだけでなく、日本漢詩人の作品集と和刻本、中国の詩人の作品が収録されている朝鮮本等の貴重な書誌情報を相互に共有し、今後の研究に

向けて重要な基礎資料を共有することができました。特に日本と韓国所蔵の詞籍文献を分析することで、当時の日中韓の文人がよく利用した詞籍文献と文壇における詞学の受容過程を明らかにし、詞籍文献の伝播という視点から日本と中国と韓国との詞学における文化交流について検討することができました。

最後に、企画から開催まで貴重なご助言を賜った小杉泰所長、ご協力いただいた発表者の萩原正樹先生、魯耀翰先生、汪超先生、台湾国立彰化師範大学国文系助教詹千慧先生、李日康先生、また特別な助言者である立命館大学文学部特任教授芳村弘道先生、東海学園大学人文学部教授松尾肇子先生、立命館大学中国文学・思想の大学院生宮本紗代さん、詹斐雯さん、鄭玲玉さん、アジア・日本研究所編集制作室の岡本多平氏に、あらためて心から深甚なる謝意を捧げる次第です。

編者
斬 春雨

前言

2020年度，笔者以“日中韩词学文化交流研究会”为申请课题得到立命馆大学亚洲·日本研究所“AJI研究高度化推进项目：国际研究集会企画·开办补助”的经费资助。在研究会筹备阶段曾得到同研究所小杉泰所长的珍贵意见和悉心指导，并于11月29日研究会当日邀请小杉所长致开幕词，在此深表谢意。

以汉字为基础建立起来的东亚文明，也即汉字文化圈是世界发展中不可或缺的存在。汉字文化圈中的文化交流，尤其是知识分子发挥重要作用的文学方面的文化交流更不应轻视。在经济高度发展和追求先端技术的今天，笔者深感作为人之根本的精神上的充裕和从容正在逐渐消失，并且对周围环境的感知和欣赏优秀文学作品的朴素的感性也日益淡漠。因此，以此次研究会为契机，除熟知的“诗”外，以“词”为纽带能够促进中（台湾、香港）日韩文人间的文化交流的话，也可谓迈向成功的一小步。

本次研究会的主要成果为，由来自中国大陆、台湾、香港、日本、韩国的五位学者进行发表演讲，内容均涉及中日韩文学史中的共同点词。具体论文内容如下：

萩原正树老师在《近藤南州的手记〈诗余〉》一文中，论述了明治时期的儒学者和汉诗人近藤元粹（1850—1922，号南州）的词及相关资料。大雅堂定亮编《增补词学金粉》（青木嵩山堂，1897）中载《诗余 近藤南州手记》。文中还论及近藤元粹曾大量校订中国诗人的诗集，并附批注和评语，除此之外，还可得知近藤元粹在词方面也有很深的造诣。论文中所引《诗余 近藤南州手记》是了解近藤元粹的词学的重要资料。

汪超老师在《花间词人的越地想象与书写》一文中，从地理学的角度论述了《花间集》的词人对江南越地的书写及其作品间的关联性。花间词人并非在越地书写越地，其创作带着虚设与想象。此种想象不但体现出词人们的空间感受、地理认知，也展现出颇多有意思的文本生产、衍生问题。此论文在2021年度获得中国词学研究会年会优秀论文特等奖。

鲁耀翰老师在《朝鲜前期元好问〈遗山乐府〉的受容：以金时习为中心》一文中，探讨了朝鲜前期元好问的《遗山乐府》的刊刻和接受情

况，并以金时习的事例为主进行了讨论。金时习的《关东日录》中所收词作品五篇，是按照元好问《遗山乐府》的目录顺序填写的和韵词。此文中还提到金时习在参考元好问词的词体和主题的同时，并对此进行演绎从而建构了自己的词之领域。

李日康老师在《文学史系谱的建立：〈词律〉中周邦彦、方千里、吴文英三家词的内在理路》一文中，以周方吴三家所作例词为线索，探索《词律》中存有一内在理路，这种内在理路具体表现为具备特定形式的体例、评注和排版。在周方吴三家例词互勘比照的典范底下，万树从中抽取其原理范式，并有意识地予以深化、宣扬。既作为以编谱事业来救正时弊的实践，也构成万树独特的知识系谱，标志他用以回应文学史的词学观。

靳春雨在《和刻本元好问诗词集的刊行及其在日本的受容探析》一文中，介绍了元好问编著的《中州集》的自元代至清代的各种版本。并探讨了室町后期的临济宗僧惟高妙安（1480—1568）在抄物《诗学大成抄》中所言及的《中州集》，应是台湾“国家图书馆”所藏延祐乙卯刊元建安广勤堂修补本。在日本有菊池溪琴编《遗山先生诗抄》，竹添井井编《元遗山先生诗选》等和刻本刊行。并通过近藤元粹校订《笺注宋元明诗选》探讨了元好问及作品的受容情况。

通过此次研究发表，不仅提供了词学方面可供参考的研究方法，而且共享了日本汉诗人的作品集与和刻本，以及收录中国诗人作品的朝鲜本等珍贵的书籍信息，也为今后的研究提供了重要的基础资料。特别是通过中日韩所藏词籍文献的分析，明确了中日韩文人常用词籍和文坛对词学的接受过程，并且以词籍文献的传播为视点，对中日韩的词学文化交流进行了探讨。

最后，自筹备至开办对本次研究会提供珍贵意见的小杉泰所长，以及发表者：萩原正树老师、汪超老师、鲁耀翰老师、台湾国立彰化师范大学国文系助教詹千慧老师、李日康老师，特邀发言人立命馆大学文学部特任教授芳村弘道老师，东海学园大学人文学部教授松尾肇子老师，以及立命馆大学中国文学思想专业的博士研究生宫本纱代同学、詹斐斐同学、郑玲玉同学，还有亚洲·日本研究所編集制作室的冈本多平先生再次致以诚挚的谢意。

编者
靳春雨

머리말

2020년도 리쓰메이칸대학 아시아·일본연구소「AJI 연구고도화추진 프로그램(研究高度化推進プログラム)」의「국제연구집회기획·개최보조(國際研究集會企畫·開催補助)」에서「일중한사학문화교류연구회(日中韓詞學文化交流研究會)」라고 하는 신청 제목으로 채택되었다. 연구집회의 준비에 있어 동(同) 연구소 소장 고스기 야스시(小杉泰) 선생님께서부터 귀중한 의견과 교시를 받고, 이에 더하여 11월 29일 연구집회 당일에 개회사를 해 주신 데 대해 심심한 경의(敬意)과 감사를 표한다.

한 자를 바탕으로 구축된 동아시아 문명, 이른바 한자문화권의 존재는 세계의 발전에 불가결한 것이라 할 수 있다. 또한 한자문화권에서의 문화교류, 특히 지식인이 큰 역할을 하였던 문학에서의 문화교류의 중요성은 간과할 수 없다. 또한 경제고도발전, 첨단과학기술이 추구되는 오늘날, 인간의 근본으로서의 정신적 여유가 없어서, 주위 환경에 대한 감지나 빼어난 문학작품에 대한 소박한 감성이 점점 멀어져 왔음을 통감하고 있다. 그 때문에 이번 연구를 계기로 잘 알려져 있는 ‘시(詩)’ 이외에 ‘사(詞)’를 연결점으로 일본·중국·대만·홍콩·한국의 지식인들과 문화교류를 했던 것을 전달할 수 있다면 성공으로 가는 한 걸음이 되리라 생각된다.

주요 성과로서는 일본·중국·대만·홍콩·한국에서 5명의 강연자가 발표를 했는데, 강연 내용은 모두 한중일 문학사에서의 연결점으로서의 사(詞)이다. 구체적으로는 아래와 같다.

하기와라 마사키(萩原正樹) 선생님은「近藤南州の手記『詩餘』」【곤도 난슈(近藤南州)의 수기(手記)「시여(詩餘)」】에서, 메이지 시대의 유학자이자 한시인(漢詩人)인 곤도 겐스이(近藤元粹, 1850~1922, 호는 南州)의 사(詞)와 관련 자료를 논하였다. 다이가도 사다스케(大雅堂定亮) 편『증보사학금분(增補詞學金粉)』(青木嵩山堂, 1897)에「詩餘 近藤南州手記(시여 곤도남슈 수기)」가 게재되어 있다. 중국시인의 시집을 대량으로 교정하고 주(注)와 평어(評語)를 부기하여 출판한 곤도 겐스이가 사학(詞學)에 대해서도 조예가 깊었던 사실을 논하였다. 논문에서 인용한 ‘시여(詩餘)’도 사(詞)에 관한 곤도 겐스이의 지식을 알기에 충분한 내용이다.

왕 차오(汪超) 선생님은 「花間詞人的越地想象与书写」【화간(花間) 시인의 월지(越地) 상상과 서사(書寫)】에서, 지리학의 각도에서 『화간집(花間集)』 사인(詞人) 들의 강남(江南) 「월지(越地)」에 대한 묘사와 그들 작품 간의 관련성을 논하였다. 화간파(花間派) 작자의 대부분은 월지(越地)에서 그 지방에 대해 쓰고 있지 않고, 그 창작은 허구와 상상으로 채색되어 있다. 이 상상력은 작사가(作詞家)의 공간 인식과 지리적 인식을 반영할 뿐만 아니라 텍스트의 제작과 파생에 관한 흥미 깊은 여러 문제를 밝히고 있다. 이 논문은 2021년도 중국사학연구회(中國詞學研究會) 연회(年會)의 우수논문특등상을 수상하였다.

노요한(魯耀翰) 선생님은 「朝鮮前期元好問『遺山樂府』の受容：金時習を中心に」【조선전기 원호문 『유산악부』의 수용：김시습을 중심으로】에서 조선전기 원호문 『유산악부』의 간행 사실과 그 향유 양상에 대해 김시습의 예를 중심으로 검토하여, 김시습 「관동일록(關東日錄)」에 수록된 5편의 사(詞) 작품은 원호문 『유산악부』의 편차에 따라 일종의 화운(和韻)의 형식으로 지은 것임을 밝혔다. 또한 김시습은 원호문 사의 사체(詞體)와 소재 등을 참고하여 사(詞)를 지으면서도 이를 점화(點化)하여 자신만의 사 세계를 구축해 나갔음을 논하였다.

리 앳홍(李日康) 선생님은 「文學史系譜の建立：『詞律』中周邦彥、方千里、吳文英三家詞の內在理路」【문학사 계보의 구축：『사율(詞律)』의 주방언(周邦彥)·방천리(方千里)·오문영(吳文英) 삼가사(三家詞)의 내적 관련】에서, 삼사(三家)의 사(詞) 작품을 실마리로 하여 『사율(詞律)』의 본질적인 관련을 탐구하였다. 이러한 관련성은 구체적으로는 특유의 형식이 구비된 체례(體例), 평주(評注)와 편차에 표현되어 있다. 삼가사(三家詞)의 상호 교정과 비교라고 하는 기준 하에 만수(萬樹)는 거기에서 원리적인 모범을 추출하고, 의식적으로 그것을 심화·전파했던 것이다. 이는 사보(詞譜)를 편집함으로써 시대의 악패를 바로잡는다고 하는 만수의 실천인 동시에 문학사에서의 그의 사학(詞學) 관념과 독자적 지식체계를 구성하는 것이기도 하였다.

진 춘위(靳春雨)는 「和刻本元好問詩詞集的刊行及其在日本の受容

探析」【화각본(和刻本) 원호문 시사집(詩詞集)의 간행과 일본에서의 수용에 대하여】에서, 원호문(元好問)이 편저(編著)한 『중주집(中州集)』의 원대(元代)에서 청대(清代)까지의 각 판본을 소개하였다. 무로마치(室町) 후기의 임제종(臨濟宗) 승려 이코 묘안(惟高妙安, 1480~1568)이 초물(抄物) 『시학대성초(詩學大成抄)』에서 언급한 『중주집』은 타이완 국가도서관 소장 연우을묘간(延祐乙卯刊) 원건안광근서당(元建安廣勤書堂) 수보본(修補本)이다. 또한 일본에서는 기쿠치 게이킨(菊池溪琴)편 『유산선생시초(遺山先生詩抄)』, 다케조에 세이세이(竹添井井)편 『원유산선생시선(元遺山先生詩選)』 등의 화각본(和刻本)이 간행되었다. 또한 곤도 겐스이(近藤元粹)가 교정(校訂)한 『전주송원명시선(箋註宋元明詩選)』을 통해 일본에서의 원호문과 그 작품의 수용상황을 검토하였다.

이 연구회에서의 발표에 의해 사학(詞學)에서의 연구 방법을 참고할 뿐만 아니라, 일본 한시인의 작품집과 화각본, 중국시인의 작품이 수록되어 있는 조선본 등의 귀중한 서지정보를 상호 공유하고, 앞으로의 연구에서 중요한 기초자료를 공유할 수 있었다. 특히 일본과 한국에 소장된 사적(詞籍) 문헌을 분석함으로써 당시 한중일의 문인들이 자주 이용했던 사적 문헌과 문단에서의 사학(詞學) 수용과정을 밝혀, 사적 문헌의 전파라고 하는 시점에서 한국·중국·일본의 사학(詞學)에서의 문화교류에 대해 검토할 수 있었다.

마지막으로 기획에서 개최까지 귀중한 조언을 해 주신 고스기 야스시(小杉泰) 소장님, 하기와라 마사키(萩原正樹) 선생님, 노 요한(魯耀翰) 선생님, 왕차오(汪超) 선생님, 타이완 국립彰化사범대학(國立彰化師範大學) 국문과 조교 잔첸후이(詹千慧) 선생님, 리얏홍(李日康) 선생님, 요시무라 히로미치(芳村弘道) 선생님, 도카이가쿠인대학(東海學園大學) 인문학부 교수 마쓰오 하쓰코(松尾肇子) 선생님, 리스메이칸대학 중국문학·사상 대학원생 미야모토 사요(宮本紗代) 씨, 잔페이원(詹斐雯) 씨, 정링위(鄭玲玉) 씨, 아시아·일본연구소 편집제작실의 오카모토 다헤이(岡本多平) 씨에게 거듭 심심한 감사의 마음을 전한다.

편자
진춘위
노요한 번역

執筆者紹介



萩原 正樹 (Masaki Hagiwara)

立命館大学文学部中国文学・思想専攻教授。主に唐宋詞の研究、具体的には詞牌・詞體と詞譜、詞論等について研究を行っている。主な著書と論文に、『宋代の詞論—張炎『詞源』—』(共著、中国書店、2004)、『森川竹礫『詞律大成』本文と解題』(風間書房、2016)、『『詞譜』及び森川竹礫に関する研究』(中国芸文研究会、2017)、「『欽定詞譜』内府刻本二種の異同について」(『學林』46・47、2008)、「国内所藏稀見『詩余圖譜』三種考」(『風絮』9、2013)等がある。

立命館大学文学部中国文学思想专业教授。主要研究唐宋词，具体为：词牌、词体和词谱、词论等。主要著作有：《宋代的词论—张炎〈词源〉—》(共著，中国书店，2004)；《森川竹礫〈词律大成〉本文与解題》(风间书房，2016)；《〈词谱〉及森川竹礫研究》(中国艺文研究会，2017)。主要论文有：《〈钦定词谱〉内府刻本二种之异同》(《學林》46、47，2008)；《国内所藏稀見〈詩余圖譜〉三種考》(《風絮》9，2013)等。

리쓰메이칸대학 (立命館大學) 문학부 중국문학·사상전공 교수. 주로 당송사 (唐宋詞) 연구, 구체적으로는 사패 (詞牌)·사체 (詞體) 와 사보 (詞譜), 사론 (詞論) 등에 대해 연구하고 있다. 주요 저서와 논문 에 『송대의 사론 (詞論)—장염 (張炎) 『사원 (詞源)』—』 (공저, 中国書店, 2004), 『모리카와 지쿠케이 (森川竹礫) 『사율대성 (詞律大成)』 본문과 해제』 (風間書房, 2016), 『『사보 (詞譜)』 와 모리카와 지쿠케이 (森川竹礫) 에 관한 연구』 (中國藝文研究会, 2017), 「『흠정사보 (欽定詞譜)』 내부각본 (内府刻本) 2 종의 이동 (異同) 에 대하여」 (『學林』 46·47, 2008), 「일본 국내 소장 희견 (稀見) 『시여도보 (詩餘圖譜)』 3 종 (種) 고 (考)」 (『風絮』 9, 2013) 등이 있다.



汪超 (Chao Wang)

武汉大学文学院准教授。主に詞学、宋代文学と文献等について研究を行っている。主な著書と論文に、『明詞傳播述論』(中華書局、2017)、「北宋士人の師承と文学」(中華書局、近刊)、「柳永詞のテキスト重複及びその傳播効果についての試論」(『文学遺産』3、2022)、「路岐での回顧—内藤湖南の漢詩における清人と遊清」(萩原正樹編『日中韓文人交流と相互理解—明治大正期の詩詞を通して』、あるむ、2020)等がある。

武汉大学文学院副教授。主要研究词学、宋代文学和文献等。主要著作有：《明词传播述论》(中华书局，2017)；《北宋士人师承与文学》(中华书局，近刊)。主要论文有：《试论柳永词的文本重复及其传播效果》(《文学遗产》3，2022)；《路岐的回望：内藤湖南汉诗中的清人与游清》(萩原正树编《日中韩文人交流与相互理解—明治大正时期的诗词》，あるむ，2020)等。

우한대학(武漢大學) 문학원 부교수. 주로 사학(詞學), 송대 문학과 문헌 등에 대해 연구하고 있다. 주요 저서와 논문에 『명사전과술론(明詞傳播述論)』(中華書局, 2017), 『북송(北宋) 사인(士人)의 사승(師承) 과 문학』(中華書局, 近刊), 「유영(柳永) 사(詞)의 텍스트 중복 및 그 전과 효과에 대한 시론」(『文學遺産』3, 2022), 「노기의 회망(回望): 나이토 고난(内藤湖南)의 한시 중의 청인(清人)과 유청(遊清)」(萩原正樹編『日中韓文人交流と相互理解—明治大正期の詩詞を通して』, あるむ, 2020) 등이 있다.



魯 耀 翰 (Johann Noh)

高麗大学校漢字漢文研究所研究教授。主に文献学、韓国漢文学等について研究を行っている。主な論文に、「安平大君『匪懈堂選半山精華』の編纂と注解方法」(『漢文学論集』59、2021)、「竜飛御天歌の典據と注解の文献学的研究」(『語文研究』49-1、2021)、「金允植(号：雲養)と日本人官僚・文文学者の詩文唱和について—『雲養集』所収『東槎謾吟』と『芝城山館納涼唱和集・轻妙唱和集』を中心に」(『立命館アジア・日本研究學術年報』創刊号、2020)、「白川静先生の興研究と『杜律虞注』の興説について」(『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要』10、2017)等がある。

高麗大学汉字汉文研究所研究教授。主要研究文献学、韩国汉文学等。主要论文有：《安平大君〈匪懈堂选半山精华〉的编纂与注解方法》(《汉文学论集》59, 2021)；《龙飞御天歌的典据与注解的文献学研究》(《语文研究》49-1, 2021)；《金允植(号：云养)与日本官僚、文文学者的诗文唱和—以〈云养集〉所收〈东槎漫吟〉和〈芝城山馆纳凉唱和集·轻妙唱和集〉为中心》(《立命館アジア・日本研究學術年報》创刊号, 2020)；《白川静先生的兴研究与〈杜律虞注〉之兴说》(《立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要》10, 2017)等。

고려대학교 한자한문연구소 연구교수. 주로 문헌학, 한국한문학에 대해 연구하고 있다. 주요 논문에 「안평대군 『비해당선반산정화』 편찬과 주해 방법」(『한문학논집』59, 2021), 「『용비어천가』의 전거과 주해의 문헌학적 연구」(『어문연구』49-1, 2021), 「김윤식과 일본인 관료·문인학자의 시문창화에 대하여: 『운양집』 수록 『동사만음』과 『지성산관남량창화집·경묘창화집』을 중심으로」(『立命館アジア・日本研究學術年報』創刊号, 2020), 「시라카와 선생의 흥(興) 연구와 『두울우주』의 흥설(興說)」(『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要』10, 2017) 등이 있다.



李 日康 (Yat Hong Lee)

香港理工大学中国語文教学センター講師。主に明清文学、詞学、文学及び文化理論、香港文学、小説及び散文創作等について研究を行っている。主な論文に、「樂章から詞壇まで—清初の朝野における詞学交流、兼ねて『詞律』成書の現実的契機を論じる」(『学林』66、2018)、「時代の暗流—清初詞壇における「尊体」運動の影響及び『詞律』の位置づけについて」(『詞学』48、近刊)等がある。

香港理工大学中国語文教学中心講師。主要研究明清文学、词学、文学及文化理论、香港文学、小说及散文创作等。主要论文有：《从乐章到词坛—清初朝野间的词学互动、兼论〈词律〉成书的现实契机》(《学林》66, 2018)；《时流暗涌—清初词坛尊体策略的张力及〈词律〉定位蠡测》(《词学》48, 近刊)等。

홍콩이공대학 (香港理工大學) 중국어문교학중심 (中國語文教學中心)강사. 주로 명청문학, 사학 (詞學) · 문학 및 문화이론, 홍콩문학 · 소설 및 산문창작 등을 연구하고 있다. 주요 논문에 「악장 (樂章)에서 사단 (詞壇) 까지—청초 (清初) 조야 (朝野) 간의 사학 (詞學) 교류와, 겸하여 『사율 (詞律)』 성서 (成書) 의 현실적 계기를 논함」(『學林』66, 2018)、「시류 (時流) 의 암용 (暗湧)—청초 (清初) 사단 (詞壇) 의 ‘존체 (尊體)’ 책략의 장력과 『詞律』 정위 (定位) 에 대한 규건」(『詞學』48, 近刊) 등이 있다.



靳 春雨 (Chunyu Jin)

立命館大学アジア・日本研究所専門研究員。主に詞学、詞籍、和刻本漢籍等について研究を行っている。主な論文に、「宋代詞学の史資料研究と日中韓・漢字文化圏の交流」(『立命館アジア・日本研究学術年報』2、2021)、「立命館大学図書館西園寺文庫所蔵『詞綜』研究」(『東亞漢籍研究』14、2020)、「山口剛と詞—「槐南朱批『梧桐雨』」と『荷塘印影』を手がかりとして」(『學林』70、2020)等がある。

立命館大学亚洲・日本研究所专门研究员。主要研究词学、词籍、和刻本汉籍等。主要论文有：《宋代词学的史料研究与日中韩·汉字文化圈的交流》(《立命館アジア・日本研究学術年報》2, 2021);《立命館大学图书馆西园寺文库所蔵〈词綜〉研究》(《东亚汉籍研究》14, 2020);《山口刚与词—以〈槐南朱批《梧桐雨》〉和〈荷塘印影〉为例》(《學林》70, 2020)等。

리쓰메이칸대학 (立命館大學) 아시아·일본연구소 (アジア·日本研究所) 전문연구원. 주로 사학 (詞學), 사적 (詞籍), 화각본 (和刻本) 한적 (漢籍) 등에 대해 연구하고 있다. 주요 논문에 「송대 사학 (詞學) 역사자료연구와 한중일·한자문화권의 교류」(『立命館アジア·日本研究学術年報』2, 2021), 「리쓰메이칸대학 도서관 사이온지 문고 (西園寺文庫) 소장 『사총 (詞綜)』 연구」(『東亞漢籍研究』14, 2020), 「야마구치 다케시 (山口剛) 와 사 (詞)—「가이난 (槐南) 주비 (朱批) 『오동우 (梧桐雨)』」와 『하당인영 (荷塘印影)』을 실마리로」(『學林』70, 2020) 등이 있다.

近藤南州の手記「詩餘」

萩原正樹

以下に紹介する資料は、近藤元粹（號南州）による「詩餘」と題する文章である。

本資料は、大雅堂定亮編『増補詩學金粉』（書名は封面に據る。青木嵩山堂、明治30年11月12日刊）に「詩餘 近藤南州手記」として掲載されているもので、本文部分約五葉と詞譜部分三十二葉からなっており、筆者前稿（「小泉盜泉と詞」注⑳）に記したように、明治期に中國文學史以外の書で、詞について論じるまとまった文章としては最も早いものである。

大雅堂定亮（1839-1910）は京都の畫僧で、號は金玉山房、京都雙林寺住職の大雅堂清亮の子。著書には他に『標註十八史略校本』（林吉兵衛他、1892）がある。『増補詩學金粉』は、もと『（絶律典例）詩學金粉』として明治17年12月に刊行された書物の増補版であるが、兩書を比較してみると、増補されているのは「詩餘 近藤南州手記」の部分だけであり、他の部分はまったく同一の内容である。兩書ともに、首卷に詩論や對句法、絶句・律詩等の平仄圖式を置き、その後「春之部」「夏之部」「秋之部」「冬之部」「雜之部」の五部に分けて、平仄や韻ごとの熟語、對句や作例などを配する構成で、「凡例」に「此編專ばら初心の人を導くを以て要とすと雖ども、凡そ詩を學ぶ人熟讀玩味するも妨なしとす」（原文は漢字片假名交じりの文であるが、以下の引用においては、すべて片假名を平假名にし、また句讀點を追加・變更するなど、読みやすさを考慮して適宜表記を改めた）と記されているように、初心者や中級者向けの作詩の參考書として編まれたものであった。

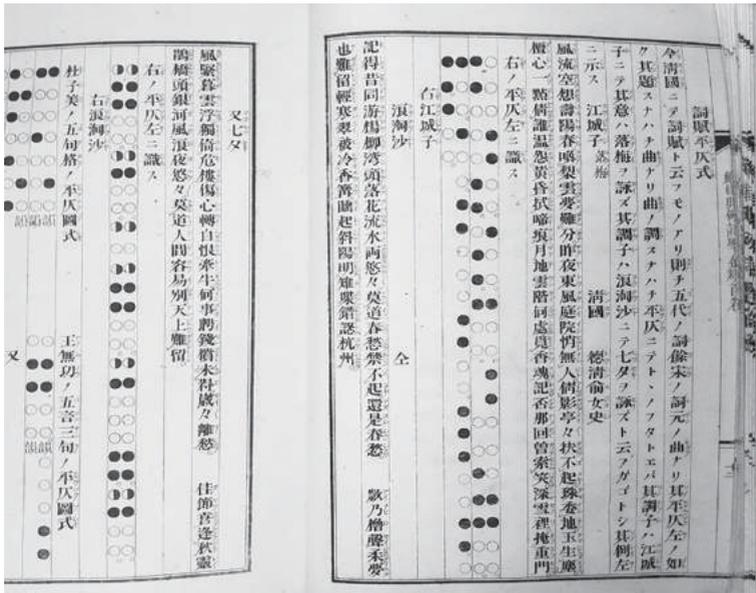
ただ注目すべきなのは、明治17年刊の『（絶律典例）詩學金粉』において既に詞についての言及が見えることである。首卷の「七言律平仄圖式」に續いて、以下のような文と、作例、平仄式が掲げられている。

詞賦平仄式

今清國にて詞賦と云ふものあり、則ち五代の詞餘、宋の詞、

元の曲なり。其平仄左の如く、其題すなはち曲なり。曲の調すなはち平仄にてととのふ。たとえば其調子は江城子にて其意は落梅を詠ず、其調子は浪淘沙にて七夕を詠ずと云ふがごとし。其例左に示す。

この文に續いて、清・俞繡孫の「江城子」一首と「浪淘沙」二首が引かれ、それぞれ平仄式が圖示されている（圖1参照）。



(圖1)『絶律典例』詩學金粉』詞賦平仄式

「詞賦」という語は、通常は詩や賦など廣く韻文を指して言う言葉であるが、ここでは「詞」「曲」と同義で用いられているのであろう。また俞繡孫(1849-1882)は、字は絳裳、俞樾の女である¹。

「江城子」と「浪淘沙」の二調三首だけではあるが、一般向けの作詩参考書に詞の作例や平仄式が示されることは極めて珍しい。「凡例」に「此編吾邦にて此まで人の心を用ゐざる所に於て心を用ゐしめんことを欲す。絶律詞賦等の平仄を細論する、これなり」とあるように、

編者である大雅堂亮が、本書にこれまでにはない新味を出そうとして「平仄を細論」し、それが「詞賦」にまで及んだのであろう。もちろんその奥には、田能村竹田編『填詞圖譜』のことや、明・徐師曾『文體明辨』、清・萬樹『詞律』への關心もあったのかもしれない。『(絶律典例)詩學金粉』から十三年後の『増補詩學金粉』において近藤元粹の文章を追加したのも、こうした新機軸を打ち出そうとする編纂方針と関連していたと思われる。

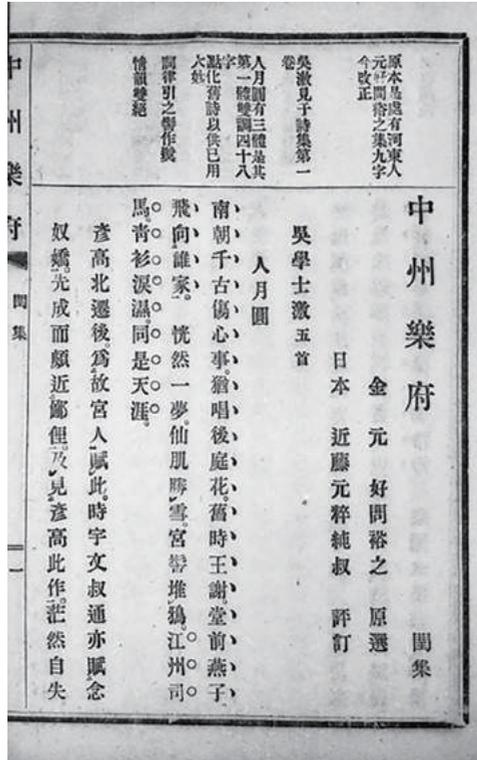
近藤元粹(1850-1922)は、字は純叔、號は南州。螢雪軒、讀未見書樓等の室號がある。伊豫松山の生まれで、明治の初めに江戸に出て芳野金陵に學び、後に大阪で猶興書院を興した。以後、京都・大阪で民間儒者として學を講じ、『増註春秋左氏傳校本』『螢雪軒叢書』『王孟詩集』など、多くの著作を残している。詩文集に『螢雪存稿』一卷附録一卷と『南州先生詩文鈔』三卷がある。その傳記や人となりについては、水田紀久氏の「近藤南州先生と猶興書院」(「てんまてんじん」第51號所收、2007)に詳しい。

近藤元粹の學問や業績について、日本ではほとんど論文に取り上げられないが²、中國では特に『螢雪軒叢書』が高く評價され、また近年では近藤元粹の中國詩學に注目した論文もいくつか發表されている³。

中國の詩人の詩集を多量に校訂し、注や評語を附して出版した近藤元粹は、また詞學についても造詣が深かった。近藤元粹が詞にも詳しくあったことについては、『大阪天滿宮御文庫漢籍分類目録』(大阪天滿宮、1977)を編纂された長澤規矩也氏が、「集部詞曲類(二)詞選」の部に著録される『(新刻題評名賢詞話)草堂詩餘(近藤南州手校本)』の後に「南州校字ノ外長調小會^マナド體別ヲ書キ込ミナドシ、カナリ詞ニモ通ゼシカ」と記され、またその後「觀書めぐり(二)」(『長澤規矩也著作集』第六卷所收、汲古書院、1984)にも、「南州が博學多識であつたことは知つていたが、明版の詞曲も多少あるには驚いた。しかも、詞集の中には、南州の書き入れがあちらこちらに見える」と記しておられる⁵。『大阪天滿宮御文庫漢籍分類目録』の卷頭には、元粹の細かな書き入れが見える上記『(新刻題評名賢詞話)草堂詩餘』の書影が掲げられており、その他『目録』「集部詞曲類」の記載に據れば、清・萬斯同『新樂府詞』(清同治8年序刊)と『花間集』(清刊本)にも手校や手

批手識が見えるとのことである。『草堂詩餘』については、水田紀久氏「近藤南州先生と猶興書院」も、「中には『草堂詩餘』のような填詞集にもびっしり書込みがなされていて、先生が決して四書五經一邊側の庸儒でなかったことを、如實に物語る」と指摘されている。

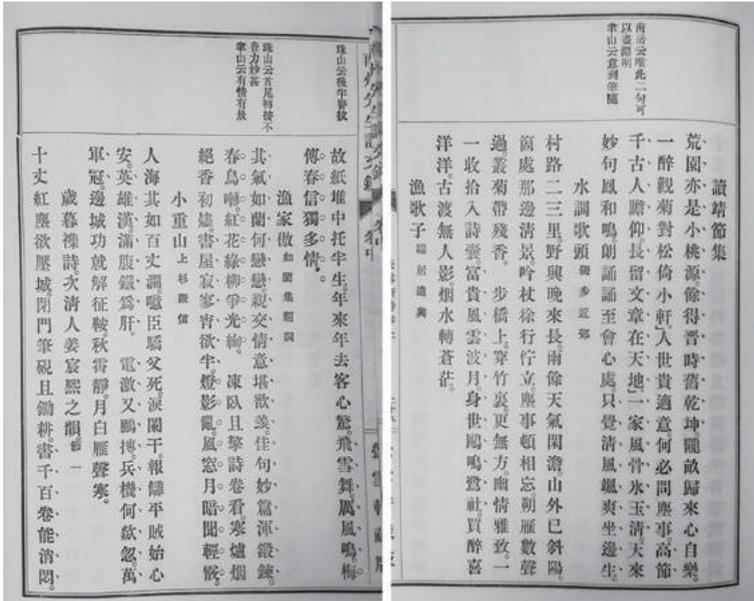
近藤元粹の詞學の一端は、明治41年6月刊の『中州集』（青木嵩山堂）所收『中州樂府』（圖2参照）に附された夥しい頭注からも窺うことができる。たとえば、蔡松年の「水調歌頭（雲間貴公子）」詞の後段に「文體明辨、後段第四句四字、第五句七字、今從詞律」とあり、また同「月華清（樓倚明河）」詞の詞牌に「月華清有二體、是其二體、雙調九十九字、詞律爲一百字」、前段第四句「常記別時月冷」に「詞律、記下有得字、常記得三字爲豆、故爲一百字、未知是否」とあるなど、『文體明辨』や『詞律』を利用して詞牌や詞體の校訂を行っていたことが分かる。また劉仲



(圖2)『中州樂府』

尹「攤破浣溪沙（蠶欲眠時日已曛）」詞には、「攤破浣溪沙、據詞律爲四十八字、末二句上七下三、前後段皆同。此篇末二句上四下五、故爲四十六字、蓋又一體也。諸書無例、姑俟考」という長い頭注が附され、『詞律』（卷三）に見える「攤破浣溪沙」が四十八字體で「七七七三 七七七三」という句式であるのに対して、劉仲尹詞は「七七四五 七七四五」という句式の四十六字であることについて疑義を呈している⁶のは、やはり『詞律』に對する

深い理解があったからであろう。『大阪天満宮御文庫漢籍分類目録』には、元粹舊藏の康熙二十六年序刊『詞律』（掃葉山房後修本）と杜文瀾『校刊詞律』の兩書が録されている。



(圖3)『南州先生詩文鈔』

『中州樂府』には、元粹が手がけた他の詩集と同様に、本文に返り点や圈点が附されており、各詞の讀解に有益である。また頭注には「一結高妙」「彩筆秀逸」「妖艷多情」など簡潔な評語も加えられていて、近藤元粹が詞の情趣をよく領會していたことも知られる。『南州先生詩文鈔』には、元粹の詞作二十二首も収録されており(圖3参照)、實作者としても詞を理解するところがあったのであろう⁷。

以下に引く「詩餘」も、近藤元粹の詞に關する知識を知るに十分な内容である。上述のように『文體明辨』や『詞律』をよく讀みこんでいたことがこの文章からも分かるし、また「されど其編、小令のみに止りて、中調、長調等に及ばざりしは、遺憾の至りなり。余是を以て自から揆らず、其完全なる者を編し、以て初學に益せんと欲す」と述べ

ているのは、竹田『填詞圖譜』の遺を補って詞譜を編纂する意があったように思われて非常に興味深い。もし元粹が詞譜編纂を企圖していたとすれば、『詞律大成』を完成させた森川竹礫と並んで、明治期に二人も詞譜編者がいたことになり、日本の詞學史において特筆すべきこととなるであろう。

近藤元粹の詞學の全貌を明らかにするには、『中州樂府』など公刊されている業績⁸の検討とともに、天満宮御文庫所蔵の書き入れ本や自筆稿本類⁹などの詳細な調査が不可欠であり、今後の研究が待たれる。

先述のように、「詩餘」は本文部分（圖4参照）と詞譜部分（小令三十一調三十六體、中調十七調十七體、長調五調五體所收）（圖5参照）とに分かれており、以下には本文部分全文（本文部分の末には詞譜の圖例も含む）と詞譜部分の詞牌名、字數、作例の作者名と近藤元粹の注を挙げ、詞譜の白圈黒圈とその注、及び作例の本文は省略した。また文中の雙行注は（ ）内に収めた。



（圖4）「詩餘」本文部分

我が朝にては、前中書兼明親王の憶江南の體に倣ひ、憶龜山の詞を作られしを權輿とし、其他は至つて寥々たりしに、近世に至り、菅茶山、賴杏坪、賴山陽、梁川星巖の諸老、皆な之れを作し、杏坪翁は其作尤も多く、且つ尤も巧みなり。田能村竹田翁、丹青の餘暇を以て、特に之れを好み、萬紅友の詞律を以て根據と爲し、旁ら諸書を參考し、填詞圖譜二卷を著はし、之れを江湖に板行せり。爾後初學の徒の詩餘を學ばんとする者、皆な之れに據らざるを得ざることとなれり。故に竹田翁自から云ふ所の、雪月風花の忠臣とは、今日より之れを觀れば、實に誣言に非るなり。されど其編、小令のみに止りて、中調、長調等に及ばざりしは、遺憾の至りなり。余是を以て自から揆らず、其完全なる者を編し、以て初學に益せんと欲すれども、多事役々、未だ其志を果さず、亦た自から以て憾と爲せり。然るに今偶然筆を弄し、其一二を記し、以て他日完全の書を出だすの先聲と爲す。

さて小令、中調、長調の目は、萬氏詞律には、草堂詩餘に始り、後人之れに因ると云へり。(余の藏する草堂詩餘には、其目無し。) 錢塘の毛氏曰く、五十八字以内を小令と爲し、五十九字より九十字に至るまでを中調と爲し、九十一字以外を長調と爲す、古人の定例なりと。詞律には、毛説を以て臆見と爲し、之れを辯駁すれども、余は文體明辨附録等の説に據り、姑らく右の例に従ふ者なり。詩にも絶句、律詩、古詩の三體あれば、詩餘にも小令、中調、長調の三例ありて、相並び行はるるも、妨げざることなり。

舊譜には、一調中、字の多少等により、第一體、第二體、第三體等の次序を設けたり。詞律には、最も義理無き者と爲し、之れを譏れり。是れは確論にして、竹田も之れに従へり。されど同じ一調にして、數體なるあり。乃ち同じ訴衷情の調に、七體あり。同じ江城子の調に、五體あり。甚だしきは酒仙子の一調に、二十體あるに至れり。右の如きは、第一第二の次序は設けざるも、詞律及び歴代詩餘等の例に従ひ、字の多寡に因り、寡を先にし、多を後ちにし、總て又一體、

又一體と列書し、之れを別かつを正論とす可し。

又た單調と雙調と云ふ別あり。單調はたとへば近體の詩の絶句一首の如し。雙調は前段後段と分かれ、乃ち詩の絶句を二首雙べ作れる如き模様あり。されど詩にては絶句を二首併はす時は、之れを律と云へども、詩餘にては、前段後段、字句の多寡同じきもあり、異なるもあり、亦た對句をも作さざるもの故へ、之れを律と曰はず。韻も一韻なるあり、換韻せるあり、其例全く近體の詩と別なり。書例も、前後段の經界の處は、必らず一字を缺く例なり。

又た三疊四疊と云ふ體あり。三疊は、雙調の上へに、更に一調を加へ、前段、中段、後段と、三重に疊ぬるものを云ふ。四疊は、三疊の上へに、復た一調を加へ、四重に疊ぬるものを云ふ。三疊は諸書に散見すれども、四疊は詞律にも僅かに一闋を載せ、歴代詩餘にも、數闋を載するのみ。後學の容易に作り得る所にあらず、たとひ作り得るも、別に妙味無き者に似たり。

左に出す所の例は、毎調先づ圖を掲げ、次ぎに譜を掲ぐ。總て文體明辨、留青全書、三才圖會、及び填詞圖譜等の例に據る。

圖例。其字平なるべき者は、白圈○を用ひ、仄なるべき者は、黒圈●を用ゆ。又た元來平なるべきも、仄を用ひ妨げ無き者は、白圈にして其下半を黒にする者◐を用ゆ。又た元來仄なるべきも、平を用ひ妨げ無き者は、黒圈にして其下半を白にする者◑を用ゆ。其例、近體律絶平仄圖の◐半白半黒を用ひし者と、少しく意味を異にせり。

韻脚の初て韻を押する者、首句、二句、三句の別無く、總て平韻起、或は仄韻起と注す。上韻を承け押する者は、何れの句にても、平叶或は仄叶と注す。其韻を換ふる者は、平韻換、或は仄韻換と言ふ。三び換ふれば、平韻三換、或は仄韻三換と言ふ。若し通篇平仄兩韻交錯する者あれば、首平に叶す、或は首仄に叶す、又た二平に叶す、或は二仄に叶すと言ふ。

又た一句の内に讀あり。五言の句、通例なれば、二字三字

と連続する者なれども、或は一字四字に讀むことあり。されば上みの一字に讀を切り、下もの四字目に句を切るなり。七言なれば四字三字の綴りを通例とすれども、時には三字四字に讀むことあり。されば上みの三字に讀を切り、下もの四字に句を切るなり。凡そ是類詩句中にも時には有ることなれども、詩餘には尤も此例多しとす。

小令

十六字令（又名蒼梧謠／單調）十六字（四句／三韻） 蔡佃
間中好（單調）十八字（四句／二韻） 段成式
梧桐影（單調）二十字（四句／二韻） 呂巖
醉妝詞（單調）二十二字（六句／六韻） 蜀主王衍
者邊は、即ち俗語の這邊このへんなり。這の字、禪書に多く者の字に作る¹⁰。

南歌子（單調）二十六字（五句／三韻） 張泌
別に一體の二十三字なるあれども、今略す。

又一體（雙調）五十二字（前段五句三韻二／十六字 後段同）趙攄
兩結語氣、上六下三なれども、亦た上四下五なる可し。
是調又た望秦川と名け、又た風蝶令と名く。又一體に入聲韻を用る者あり、今畧す。

荷葉杯（單調）二十三字（六句／六韻） 溫庭筠
是の調凡そ三たび韻を換ふ。亂斷の二仄、塘涼の二平、内に間へ用ゆ。兩の字の處、必らず仄聲を用ゆる例なり¹¹。別に二體あれども、略す。

一點春（單調）二十四字（四句／二韻） 侯夫人
花非花（單調）二十六字（六句／三韻） 白居易
春曉曲（單調）二十七字（四句／三韻） 朱敦儒
漁歌子（單調）二十七字（五句／四韻） 張志和

是の調一名は漁父。和凝諸人、平仄互に異なるを作れども、宋より以後は、大抵西塞の一體に依る。今の作者宜く之れに従ふべし。

又一體（雙調）五十字（前段六句四韻二／十五字 後段同）李珣
草芊芊の二句、又た○●●、●○○に作り、韻に叶せざ

るあり。後段同じ。別に又一體なり。

憶江南（單調）二十七字（五句／三韻） 李後主

是の調、又た夢江南、謝秋娘、夢江口、望江南、望江梅、
春去也と名く。皆な一體なり、今畧す。

又一體（雙調）五十四字（前段五句三韻二／十七字 後段同）
歐陽脩

搗練子（單調）二十七字（五句／三韻） 吳子厚

桂殿秋（單調）二十七字（五句／三韻） 向子諲

南鄉子（單調）二十八字（五句／五韻） 歐陽炯

遊南浦の句、或は○●の二字に作り、韻を叶せざる一體
あり。

又一體（單調）三十字（六句／五韻） 李珣

又一體（雙調）五十六字（前段五句四韻二／十八字 後段同）
蘇軾

江南春（單調）三十字（六句／三韻） 寇準

憶王孫（單調）三十一字（五句／五韻） 李甲

是の調、一名は憶君王、一名は怨王孫、又た豆葉黃、畫
蛾眉、闌干萬里心、一半兒の諸名あり。

調笑令（單調）三十二字（八句／八韻） 馮延巳

起二字疊句とす。長夜の二字は、即ち上句の尾の二字を
以て顛倒して之れを疊む例なり¹²。凡そ三用韻。

思帝鄉（單調）三十三字（八句／四韻） 韋莊

如夢令（單調）三十三字（七句／六韻） 晏殊

是の調、本と憶仙姿と名く。後唐の莊宗の作内如夢の二
字有るに因り、遂に以て調に名く。一名は比梅、一名は
宴桃源、一名は如意令。

甘州子（單調）三十三字（七句／五韻） 顧夔

訴衷情（單調）三十三字（十一句／十一韻） 溫庭筠

第二字韻を用て起し、二三の兩句連叶す。帷の字以下、
俱に微韻に叶し、而して枕錦の二字、韻を換へ、其中に
間す¹³。填詞圖譜に載する所は又一體なり。今略す。是
調一名は一絲風、單調又一體あり。雙調にて、別に四體

あり。今皆な略す。

- 天仙子（單調）三十四字（六句／五韻） 皇甫松
風流子（單調）三十四字（八句／六韻） 孫光憲
歸國謠（雙調）三十四字（前段三句三韻十／七字 後段同） 歐陽脩
定西番（雙調）三十五字（前段四句十五字／後段四句二十字） 溫庭筠
何滿子（單調）三十六字（六句／三韻） 和凝
長相思（雙調）三十六字（前段四句四韻十／八字 後段同） 馮延巳
風光好（雙調）三十六字（前段四句四韻十六字／後段四句四韻二十字） 陶穀
醉太平（雙調）三十八字（前段四句四韻十／九字 後段同） 戴復古

此調一名は醉思凡、一名は凌波曲、一名は四字令。

- 感恩多（雙調）三十九字（前段四句四韻十八字／後段五句三韻二十一字） 牛嶠
昭君怨（雙調）四十字（前段四句四韻二／十字 後段同） 万俟雅言

此調一名は宴西園、一名は一痕沙。小令は、猶ほ多々なれども、上文にも言ひし如く、略ぼ其一斑を示すもの故へ、餘は略することと爲す。是れよりは中調の例を少し擧げ示さん。

中調

- 一剪梅（雙調）五十九字（前段五句三韻二十九字／後段六句三韻三十字） 李清照
月滿樓、或は月滿西樓に作る、非なり¹⁴。
臨江仙（雙調）六十字（前段五句三韻三／十字 後段同） 陳去非
蝶戀花（雙調）六十字（前段五句四韻三／十字 後段同） 張泌

此調一名は黄金縷、一名は鳳棲梧、又た鵲踏枝、一籬金、魚水同歡、捲珠簾、明月生南浦の諸名あり。三才圖會第二第三の二句を併せて九字一句と爲す。諸作例を検するに亦た妨げざるに似たり。今姑く詞律に據り、分つて二句と爲す。然れども意味必らず一貫を要す。

玉堂春（雙調）六十一字（前段七句四韻三十四字／後段五句二韻二十七字）
晏殊

漁家傲（雙調）六十二字（前段五句五韻三／十一字 後段同）
王安石

定風波（雙調）六十二字（前段五句五韻三十字／後段六句六韻三十二字）
閻選

行香子（雙調）六十六字（前段八句五韻三十三字／後段八句四韻三十三字）
蘇軾

此調後段起句、○○●●を用ひ韻を叶せず。餘は皆同じ。

別に五體あり。今皆な略す。

醉春風（雙調）六十四字（前段七句四韻三／十二字 後段同）
朱希真

後段第二句、一に○●○○●に作る。拘はらざるに似たり。

風中柳（雙調）六十四字（前段六句五韻三／十二字 後段同）
劉因

此詞後段起句、○○●●に作り、前段首句と全く反す。

詞律には、調に於て當に此の如くすべしと論ぜり。然れども別人の詞を見るに、皆な前後同段にして、此詞と同じき者無し。姑らく録して參考に資す。

青玉案（雙調）六十六字（前段六句四韻三／十三字後段同）
黃知命

此調、凡そ八體あり。是其一體なり。

賣花聲（雙調）六十六字（前段六句四韻三／十三字 後段同）
黃裳

後段起句、○○●●に作る。前段と相反す。餘は皆同じ。

此調一名は謝池春、一名は風中柳、一名は玉蓮花。

月上海棠（雙調）七十字（前段六句四韻三／十五字 後段同）

陸游

前後同段にして、第二句涙の字、寄の字、必らず去聲なるを要す。後段末句天の字、宜しく仄字なるべし。是れ偶然の失なり¹⁵。

千秋歲（雙調）七十一字（前段八句五韻三十五字／後段八句五韻三十六字）

謝逸

千秋歲引（雙調）八十二字（前段八句四韻三十八字／後段八句六韻四十四字）

王安石

風入秋（雙調）七十四字（前段六句四韻三／十七字 後段同）

趙師俠

越春溪（雙調）七十五字（前段七句三韻三十八字／後段六句四韻三十七字）

歐陽脩

拂霓裳（雙調）八十二字（前段八句六韻四十一字／後段九句五韻四十一字）

晏殊

中調も亦た多分なれども、今姑らく是れにて止め、以下は長調の例を示さんとす。

長調

滿江紅（雙調）九十三字（前段八句四韻四十七字／後段十句五韻四十六字）

蘇軾

滿江紅凡そ六體あれども、各家の詞、多くは此體に従ふ。

雪梅香（雙調）九十四字（前段八句四韻四十六字／後段十句五韻四十八字）

柳永

水調歌頭（雙調）九十五字（前段九句四韻四十八字／後段十句四韻四十七字）

蘇軾

燭影搖紅（雙調）九十六字（前段九句五韻四／十八句 後段同）

張掄

念奴嬌（雙調）一百字（前段九句四韻四十九字／後段十句四韻五十一字）

蘇軾

此調、又た百字令、百字謠、酌江月、大江東去、大江西上曲、壺中天、無俗念、淮甸春、湘月と名く。體も亦た

九體あり。今其一體を掲ぐるのみ。長調も亦た其調甚だ多し。而して長調は詩餘中に在て尤も作し難き者とす。故に今其一斑を挙げ、其例を示す。學者其全豹を見んと欲する、宜しく詞律、歷代詩餘等の諸書に就き之れを検すべし。

注

1 胡文楷編『歴代婦女著作考（増訂本）』（上海古籍出版社、1985）の「慧福樓幸草一卷」項（415頁）に、「繡孫、字絳裳、浙江德清人、兪樾女、知府錢塘許祐身妻。年三十四、以産厄卒」と見える。兪繡孫没後に兪樾が刊行した『慧福樓幸草』（光緒9年刊）では詞が十五首、また清・徐乃昌編『小檀樂室彙刻閩秀詞』（李保陽編、浙江大學出版社2018年影印本）第八集所収の「慧福樓詞一卷」では、詞十七首が収録されている。

2 管見の及ぶ範囲では、寺門日出男「大阪天満宮御文庫所蔵『雕題』（中井履軒撰）諸本について」（『中国研究集刊』第10号所収、1991）、及び同氏「『戰國策雕題』（中井履軒撰）と近藤南州と」（『懷徳』第60号所収、1991）の二篇のみである。なお2007年7月29日開催の大阪藝能懇話會において、芳村弘道氏が「近代大阪漢文學の泰斗 近藤南州の編著について」という題目で口頭発表をされ、その発表資料の惠贈を忝くした。本稿作成に際してはその発表資料を多く参照させて頂いており、詳細な資料とともに、近藤元粹について種々御教示下さった芳村弘道先生に厚く御禮申し上げる。

3 王兵「論近藤元粹の中國詩學批評」（『日本研究』2010年3月）、張兆勇「近藤元粹視野中的韋柳詩一兼述近藤の中國詩觀」（『淮北師範大學學報（哲學社會科學版）』2014年2月）、王園瑞「日本近藤元粹及其《蘇東坡詩集》考述」（『樂山師範學院學報』2019年2月）、程雪「近藤元粹杜詩評點研究」（『蜀學』2019年10月）など。

4 「小令」の誤植であろう。『大阪天満宮御文庫漢籍分類目録』の卷頭に掲げられている『（新刻題評名賢詞話）草堂詩餘』の書影にも「第一體／小令」の書き込みが見える。

5 近藤元粹の藏書が天満宮御文庫に入った経緯については、「觀書めぐり（二）」に「南州の藏書中の貴重書は、その死後、中尾松泉堂の前代によつて賣り立てられたと聞く。（中略）本宮に入つたものは、門人たちが募金をし、南

州の遺族から買い取つた、二萬餘巻と稱するものである」と記されている。

6 「七七四五 七七四五」という句式の四十六字體「攤破浣溪沙」は、「琴調相思引」の別名であり、「浣溪沙」の派生體である「攤破浣溪沙」とは異なる詞牌である。唐圭璋編『全金元詞』（中華書局、1979）では劉仲尹詞の詞牌を「琴調相思引」に改めている。

7 神田喜一郎『日本における中國文學 I・II』（『神田喜一郎全集』第六・七卷所收、同朋舎、1985・86）では、どういふわけか、近藤元粹の詞にはまったく觸れられていない。

8 廣く詞曲に関わる業績として、近藤元粹校閲、鹿島修正譯の『評釋西廂記』（青木嵩山堂、明治36年、明治43年再版）がある。『評釋西廂記』について、井上泰山氏「日本における「西廂記」研究（附；譯注書目録、關係論著目録）」（『中國俗文學研究』第8號所收、1990）は「これは金聖嘆の批注をも含めた初の全譯本である點、明治期の譯注書の中では特筆すべき一書である」と評しておられる。なお鹿島修正は、明治35年に青木嵩山堂より『速成日清會話獨修』という中國語會話の參考書を出版している。

9 水田紀久氏「近藤南州先生と猶興書院」に、「本平成十八年（二〇〇六）十一月一日、當地古書肆の老舗松泉堂書店社長中尾堅一郎氏は、たまたま氏の姻戚三重縣伊賀市、町野家の土藏に昭和十九年より疏開中だった先生の自筆稿本類を中心とする舊藏書五箱を、先代熊太郎氏筆の整理目録とともに大阪天滿宮に寄進された。中には草稿等三百點のほか、先生の額入寫眞や先生着用の儒巾一着も含まれていた」と記されており、こうした自筆稿本類の中に詞に関する資料が含まれている可能性がある。

10 王衍の作例首句に「者邊走」とあるのに注したもの。

11 溫庭筠の作例は以下の通り。「一點露珠凝冷。波影。滿池塘。綠莖紅豔兩相亂。腸斷。水風涼。」

12 馮延巳の作例「明月。明月。照得離人愁絕。更深影入空床。不道幃屏夜長。長夜。長夜。夢到庭花陰下。」の首二句と「長夜」句についての注。

13 溫庭筠の作例は以下の通り。「鶯語。花舞。春晝午。雨霏微。金帶枕。宮錦。鳳皇帷。柳弱燕交飛。依依。遼陽音信稀。夢中歸。」

14 李清照の作例前闕末句の「月滿樓」について注したもの。

15 陸游の詞の前段第二句「弔興亡、遺恨淚痕裏」、後段第二句「折幽香、誰與寄千里」、後段末句「楚天危樓獨倚」についての注。

论花间词人的越地想象与书写

汪超

《花间集》作为最早的文人词总集，历来备受关注，研究积累丰厚。近年来多有学者从文学地理学的角度推进《花间集》的研究，如赵惠俊、刘帼超从文学内部探讨地名意象；而李定广、李博昊则结合地理认知讨论文学问题，均有所获¹。不过，如果我们把花间词置于唐五代词的文本世界展开分析，或许可以看到更有趣的现象。

据赵惠俊《〈花间集〉的地理意象》统计，《花间集》中72首作品出现地理意象笔者统计书中含有江南“越地”相关意象的词作22首²。该结果看似平平无奇，但若翻检《全唐五代词》，就会发现花间词人是这个时期最集中、最频繁提到越地意象的词作者群体。而且大部分花间词人并非在越地书写越地，其创作带着虚设与想象。此种想象不但体现出词人们的空间感受、地理认知，也展现出颇多有意思的文本生产、衍生问题。

一 花间词人地理认知与“越女”语汇系统

地域书写首先体现在作家们对所描写地域特征的体认。花间词人的越地书写与想象建立在他们对吴越地域区块的差异性认知的基础上，他们通过越地历史、人物、特产的知识性呈现将越地与吴地等其他地域区隔开来。并在此过程中，形成了一套以“西施”为中心的“越女”语汇系统，从而影响到花间词的文本面貌。

“吴越”是江南的核心区域。江南指涉的范围或许有时代差异，但唐人混称吴越，以苏浙的“吴越”指代“江南”的例子俯拾皆是。甚至明明是咏唱越地的诗歌，字面也用“吴越”。孟浩然《自洛之越》，见诗题而知其目的地是“越”，他却咏出“山水寻吴越，风尘厌洛京”的句子³。白居易《长相思》（汴水流）也是以杭州的吴山泛指江南群山。再如白居易《忆江南》组词，以“江南好”总写江南之美，又以“江南忆”两首分叙苏州、杭州，而苏、杭正是吴、越的大城。张伟然指出“尽管他曾声称‘苏杭自昔称名郡’，但将苏杭相提并论，并以之作为江南诸郡的头牌，其实出自他本人的品题：‘江南名郡数苏杭……’”⁴。略晚于

白氏的袁郊《竹枝词》也混称吴越，其“吴越山川游已遍”仍然将“吴越”用作“江南”的代称⁵。这也说明至少在中唐诗人心中，吴、越之间的文化属性趋同，二者分殊尚不清晰，越地并未被视作独立的地理文化空间。

不过，花间词人从温庭筠开始就对“吴越分殊”有清晰的表述。温氏《菩萨蛮》其十四下片想象西施入吴后的情境，道：“两蛾愁黛浅，故国吴宫远。春恨正关情，画楼残点声。”词人代言西施愁情，通过故国与吴宫的空间距离表明其愁所自，特别注意到吴、越的疆域之别。又如薛昭蕴《浣溪沙》其七的下片⁶：

吴主山河空落日，越王宫殿半平芜，藕花菱蔓满平湖。

前两句对仗互文见义，但以“吴主”对“越王”也是从历史记忆的角度区分吴、越之差异。花间词人对吴越分殊的地理认知甚为明确，并在创作时特意将越地视为一个单独的文化区块加以叙述。

而与花间词人同时代的其他词作者，只有南唐的成彦雄在《杨柳枝》词中提到吴越分殊，其云：“勾践初迎西施年，琉璃为帚扫溪烟。”⁷这也是唯一一例将西施与勾践挂钩的唐五代词，作者注意到西施入吴前后区别（亦即“吴越分殊”）。不过该词吟咏本题，是写春日柳枝的样貌。在涉及吴越分殊的地理认知方面，非花间词人至少要到年辈与孙光宪略近的成彦雄才触及相关表述，而花间词人却从温庭筠开始就一以贯之地了然其事。此种地理认知还形成了一套以西施为代表的“越女”词汇系统，进而影响到花间词人的文本生产。

花间词人最初以“西子想象”表现“吴越分殊”，通过西子在越地的居所、入吴的生活空间表达吴、越之间的区域差异。刘昉超曾举前引温庭筠《菩萨蛮》其十四以及和凝《临江仙》（海棠香老春江晚）等为“在非咏史词中，古迹地名被作为艳情典故使用”之例⁸。事实上，她所举的例子多与西施故事直接相关。西施是“越艳”的代表，承载着词人的艳情想象。同时，西施故事也是花间词中以“越女”代称美人的起点。温庭筠《菩萨蛮》其九：“小园芳草绿。家住越溪曲。杨柳色依依。燕归君不归”、《河传》其二：“若耶溪，溪水西。柳堤。不闻郎马嘶”以西施曾生活的越溪曲、若耶溪代美人所居之地。这固然是地名作为艳情典故使用，但前提仍是西子的越人身份以及西施本身美艳传说的符号化。薛昭蕴《浣溪沙》其七亦然，他说：“倾国倾城恨有余。几多红泪泣姑苏”。姑苏，即姑苏台，为吴地旧迹。范成大《吴郡志》载：“吴王夫差筑姑苏

之台，三年乃成。”⁹薛昭蕴想象西施入吴之后的生活，写其饱含家国之恨，泣泪滴血。“姑苏”通过“西施”的联结关系，也成为“西施”符号的一部分，成为“越女想象”的一部分。皇甫松《杨柳枝》其一则说：

烂熳春归水国时，吴王宫殿柳丝垂。黄莺长叫空闺畔，西子无因更得知。

这是首咏古之作，作者站在后知视角，写想象中的吴地。起句之“水国”，因次句“吴王宫殿”而被限定地理空间。作者说秋去春来，今时柳、莺仍在，而昔日西子已经消失在滚滚红尘中，平添一种虚幻感。到了花间第三代词人欧阳炯，依旧在怀古词中书写西施故事。他的《江城子》词云：

晚日金陵岸草平。落霞明。水无情。六代繁华，暗逐逝波声。空有姑苏台上月，如西子镜，照江城。

咏金陵用“六代繁华”是唐人遗韵，而姑苏台、西子镜均用西施入吴的典故。这些文本都通过西施入吴前后的叙述区分了吴、越的地理空间差异。重点是花间词人笔下，相关语汇最终形成一个想象系统，成为花间词文本生产的惯套。这一语汇系统包含西施、西子及与之相关的一系列词汇（地理名词比如苧萝、若耶溪等实际地名，越溪曲、越王台等虚化地名；物质名词比如越罗、越禽、越梅等），甚至泛指“越女”。

相较其他物质名词，“越罗”也被花间词人刻意突出，成为“越女想象”的组成部分之一。我们不能否认花间词仍以书写闺阁、女性主题为主，而衣饰妆容恰是相关主题较多描摹的内容。在文学作品中，以衣饰的材质表示主人公身份的现象由来已久。《花间集》写到丝织品“罗”的例子实在是不胜枚举。不过，其中大部分都只以绫罗的色彩、图案、质感来形容，例如画罗、麴尘罗、绣罗轻、云罗雾縠等等。此外，以“罗”为形容词修饰名词，形成偏正结构的词组，如罗胜、罗袂、罗袜、罗衾、罗幌、绿罗裙、碧罗衣、黄罗帔等等。这些都与地名毫无关系。但以地理名词为定语修饰丝织品的，遍检花间全集也仅有巴锦、吴绫与越罗三种，其中巴锦、吴绫都仅仅一见，而越罗被提到六次。

此外，花间词人“越罗”书写的质量也高于巴锦、吴绫。张泌《浣溪沙》其七写女主人公，“人不见时还暂语，令才抛后爱微颦，越罗巴锦不胜春”。巴锦与越罗都成为女主人公难以描摹的佳丽气质之助力，但张泌并未对织物细节有更多的呈现。薛昭蕴的《醉公子》上片以铺叙之法，一一叙

述主人公的容妆、室内装饰，词道：“慢绾青丝发，光研吴绫袜。床上小熏笼，韶州新退红。”词中的吴绫有细密的质感和作为实物的名称表达。词人们写越罗，其细节呈现就更为丰富了。写越罗之颜色的，如温庭筠《归国遥》：“越罗春水绿”，李珣《浣溪沙》其一：“越罗衣褪郁金香”；写越罗之长度，有孙光宪《竹枝》其二：“越罗万丈（竹枝）表长寻（女儿）”；写越罗的质感，有尹鹗《杏园芳》：“含羞举步越罗轻，称娉婷”。可知词人们对越罗的细节呈现是远远多于巴锦、吴绫的。可是花间词人何以独独钟情于越罗呢？其原因或是西子浣纱的传说激发吟者听众的艳情想象。因花间词中的“罗”意象总与女性事物关联，而越罗或许让受众更容易联想到越地浣纱女子西施的故事。鲍溶《越女词》就说：“越女芙蓉妆，浣纱清浅水”¹⁰。反倒是巴、吴二地相对较少令人产生相关联想的女性历史人物。因此，“越罗”从某种意义上也属于“越女想象”的语汇系统。而当注意到吴越地理分殊的花间词人，似乎也更有可能使用“越女想象”营构其曲子词文本。

“越女想象”的语汇系统看似唐诗常客，李白《越女词》就是以若耶溪开篇。而杜甫《壮游》记叙游历越地经验，不但有鉴湖、剡溪、天姥山，更留下“越女天下白”的印象。唐人诗歌其他越地书写亦所在皆是。但在唐五代词家中，花间词人之外，仅四人五阙提及越地意象。其中张志和《渔父》两阙一笔带过“钓台”、“霅溪”地名，再加上三人三阙涉及西子故事。涉及西子故事者，除前文所述成彦雄之外，另两首都是以西施地名意象生发美艳想象的。一是唐昭宗李晔，他在《巫山一段云》中写到“苧萝山又山”¹¹；另一首是云谣杂曲子的《破阵子》唱到“正时越溪花捧艳，独隔千山与万津”¹²。诗中常见的语汇、典故，花间词人以外的唐五代词家却极少使用。这或许是个有趣的现象，至少说明花间词人与同时代其他词人的文本生产方式有一定差别，《花间集》文本的内部具有某种紧密的连结。

二 《花间集》越地文本网络的自足性

唐五代时期，越地虽然也是文人们乐于书写的区域。但在大“江南”视野下，越地相对不如金陵、姑苏那般具有历史的话题性；又不像潇湘、洞庭那样具有僻远的冲击性。因此，书写越地主题的作品远未堆山积海。

花间词人却是当时词人中最关注越地的群体。不过，我们更感兴趣的是他们越地书写的作品之间的文本关系。

从花间词人们书写越地的作品看，其彼此似有微妙的文本间性。且看以下三例：

吴主山河空落日，越王宫殿半平芜。藕花菱蔓满重湖。（薛昭蕴《浣溪沙》其七）

碧江空。半滩风。越王宫殿，苹叶藕花中。（牛峤《江城子》其一）

含情遥指碧波东。越王台殿蓼花红。（欧阳炯《临江仙》其一）

这三例，均以相对阔大的水域起句，承续历史遗迹“越王（台）殿”，再接以生长于水中或水畔的开花植物。“吴主山河空落日”虽然与后一句是互文见义，但在文本呈现上与后两例极其相似。所举牛峤、欧阳炯之例，字面有三分之一相同，甚至连韵脚都相同。至于碧江、碧波，宫殿、台殿，藕花、蓼花，从意象涉及的品类上说也是全然相同的，语词上不过小异而已。薛昭蕴、牛峤年辈相仿，欧阳炯入宋。今已无法判断究竟谁是首唱，但其文本写作的相互影响是非常明显的¹³。

在吟咏对象并非越地的花间词中，我们仍可看到这三例的影子。如李珣《南乡子》其九有“越王台下春风暖。花盈岸。游赏每邀邻女伴”，同组词其十有“刺桐花下越台前。暗里回眸深属意。遗双翠。骑象背人先过水”之句，其句字面依稀呈现薛、牛等人的影子。越王台、越台几乎就是这组互文文本的翻版。虽然《南乡子》其九没有出现“水”字，但“岸”字依然留下了相关痕迹。李珣这组岭南风土词，依稀沿袭了其前辈越地想象的花、水、古迹三重组合。

再看一组以“杨柳”、“越女”相互绾合的例子。温庭筠有两阕相近的越地词：

小园芳草绿，家住越溪曲。杨柳色依依，燕归君不归。（《菩萨蛮》其九）

春已晚，莺语空肠断。若耶溪，溪水西。柳堤，不闻郎马嘶。（《河传》其二）

从内容上看，这两阕都是闺怨之词，意脉相通：西施故家、柳树、待不到的归人。越溪曲、若耶溪是以地名代指西施，又以西施代指闺中人。闺中人在春归之后盼行人归来而不得，见杨柳色、柳堤，皆生发折柳送行的联想，而“君不归”，“不闻郎马嘶”其意相同。除此之外，温庭筠

《杨柳枝》其三写道：

苏小门前柳万条，毵毵金线拂平桥。黄莺不语东风起，深闭朱门伴舞腰。

这首大体袭用了上两阕的意群组合，不过人事上略有变通。本首将“越女想象”语汇系统中以“西施”代指闺中人改成了以“苏小”代指。柳丝、黄莺与美女的叙述结构并没有太大的变化。皇甫松《杨柳枝》的基本叙述结构与温词基本相同，其词云：

烂熳春归水国时，吴王宫殿柳丝垂。黄莺长叫空闺畔，西子无因更得知。

柳丝、黄莺与西施合成词，不过将历史遗迹吴王宫叠加叙述。春再归来，史迹犹存而逝者不归。一股淡淡的历史沧桑感漫出词篇。此阕综合采用了以上三首温庭筠词作的意象群，与温庭筠《杨柳枝》其三、《河传》其二在意脉上何其相似。牛峤《柳枝》其二似又从皇甫松的文本字面翻出，其词道：

吴王宫里色偏深。一簇纤条万缕金。不愤钱塘苏小小，引郎松下结同心。

该阕吟咏本调，是一首咏物词。以柳枝低垂，想象柳树不甘被苏小小比下去，因而垂下万缕金丝绦。吴王宫、柳丝与传说人物苏小小，其因袭痕迹并不难发现。

由此，我们已见花间词人越地书写有较为鲜明的特点，文本之间的叙述逻辑、主题内容常见耦合。那么唐五代词的其他文本，是否也有与《花间集》相似的叙述模式呢？

我们在《全唐五代词》正编中很少见到书写越地的内容¹⁴。张志和《渔父》组词最早提到越地，其二“钓台渔父褐为裘”，其三“霅溪湾里钓鱼翁”写到的严子陵钓台与霅溪均是越地地名¹⁵。但整组作品受主题限制，表现隐逸者散澹潇洒之情，故而较少出现花、美人，与花间词人越地书写的文本间性距离较远。

敦煌词中唯一写到越地的词是《云谣杂曲子》所收《破阵子》，词道：
日暖风轻佳景，注莺似问人。正是越溪花捧。独隔千山与万津。
单于迷虏尘。梅雪落停愁地。香檀枉注歌唇。拦径萋萋芳草绿。
红脸可知珠泪频。鱼笺岂易呈¹⁶。

这是一首闺怨之词，女主人公思念的对象是戍边战士。不过，词文本

中仍然出现了黄莺、花、越溪等意象。且黄莺取其声，与花间词人所写的“莺语”、“黄莺不语”、“黄莺长叫”涵义无别。可以说，在文本之间虽存在着某些“血缘关系”，但敦煌词中却仅此孤例。

五代词中，花间词以外也很少用历史上的知名女子来指代美女。南唐词人仅仅李璟、冯延巳、徐昌图三人的作品提到地理名词，且均与越地无涉。冯延巳是南唐词人中存词数量最多的，他的书写主题与花间词大体相近。但冯词大部分以室内、庭院为叙述背景，公共场所的叙述几乎不涉及历史名胜与人物，也很少以水中植物结篇。因此，在文本关联上，与花间词的越地书写之作有较大差异。

与花间词越地文本“血缘关系”最为亲近的仍属白居易《杨柳枝》。这一组作品前后相连，在《白氏长庆集》《乐府诗集》《万首唐人绝句》等不同的文献中曾分别被冠以“杨柳枝词”“乐府诗”、“绝句”等文体出现。其中前八首收在《白氏长庆集》卷三一，可知白居易是将其作为组词看待的。这八首词前后之间有较为明显的起承关系，例如其四写到“馆娃宫暖日斜时”，其五即道：

苏州杨柳任君夸。更有钱塘胜馆娃。若解多情寻小小，绿杨深处是苏家。

其六紧承末句而起，道：

苏家小女旧知名。杨柳风前别有情。剥条盘作银环样。卷叶吹为玉笛声¹⁷。

不得不说，这是与花间词越地想象文本最为接近的唐五代人词作。以柳丝牵连钱塘苏小小，咏柳而及传说中的人物。白词用特定人物指代美女，在唐词中也是极为罕见的。

既然从词体文学内部看，花间词人越地书写的文本与同时代其他词作的互文性较弱，它们几乎是在独立地完成了一套越地想象的语汇系统、结构模式。那么，在花间词人其他文类的创作中，有无相近的文本呢？鉴于花间词人大部分传世作品的文体是词，有些作者如尹鹖、李珣、阎选等均只有词作传世，我们拟以诗词均多有流传，且曾在越地生活的温庭筠、韦庄为例考察。

温庭筠在诗词创作中，语汇、成句互用是较为明显的，其诗中有“满楼明月梨花白”（《舞衣曲》）之句¹⁸，词中又用“满宫明月梨花白”（《菩萨蛮》其九）。但具体到越地语汇系统，温庭筠诗歌更偏向书写男性，

比如他诗中写越溪、若耶溪就不再生发“越女想象”，而是与渔父生涯相关联。《西江上送渔父》就说：“如逐严光向若耶，钓轮苓棹寄年华。”《秘书省有贺监知章草题诗笔力遒健风尚高远拂尘寻玩因有此作》又有“越溪渔客贺知章”之句¹⁹。而提及越人时，也几无“越女”的用例，反而常提“越僧”。至少在温氏的越地书写中，我们看到了诗词表现对象的差异。韦庄的诗词表达差异虽不甚明显，但细究起来仍然有所区别。在韦诗中，西施的传说不仅仅用来写美女，也用来咏物喻花，比如“西子去时遗笑靥”（《叹落花》）；用来写江湖之思，比如“曾向五湖期范蠡，尔来空阔久相忘”（《赠渔翁》）²⁰。这在韦庄词中就没有出现过。温、韦二人自身诗词文本之间的关系似乎远没有花间词人相互的文本间性关系更为紧密。

从比例上看，《花间集》是同时代越地书写出现频率相对较高的文本系统，且其文本间有较为密切的互文关系。因此，笔者以为《花间集》的越地想象形成了一套较为封闭的文本网络。而这一文本网络在词汇、结构上具有内在自足性，不但与同时代的其他词作互文性较疏远，且与作者本人诗歌文本间的联系也不强。

三 《花间集》越地文本风貌的形成及其词史意义

《花间集》明确写出越地意象者固然仅 22 首，唐五代词明确写出吴地意象的也仅 24 首。这 24 首中花间词人又占 11 首，其中还有 5 首是与越地意象重合的，单独写到吴地意象的仅 6 首。泛称“江南”的词例则不在为我们的统计中。细看这些“吴越分殊”相对明确的词作，越地文本是明显出现了语汇系统的，但吴地的意象呈现则更加分散，内在叙述逻辑也更加混乱。那么，《花间集》越地文本为何形成如此风貌？

从外在原因看，温庭筠、韦庄等以北方士子游历江南，采取他者视角观看吴越地域。故而有较丰富的江南生活经验，描写吴越地域的细节也颇有可观。所以，在温庭筠、韦庄的越地书写中，我们可以看到“竹风轻动庭除冷”、“烟浦花桥路遥”、“碧沼红芳烟雨静”等南方风景的感官叙述。这些叙述与南唐、吴越的文人词几乎无甚差异。但温韦作为他者，会不经意写出地理名词，而吴、越本土词人长期生活在当地，或许并不觉得当地地理方位需要突出。因此，他们描写当地景色，

是书写目之所接、眼中所见，故而不特别标明。这一点，不论南唐君臣，还是吴越词人都是如此。南唐词人除李璟、冯延巳、徐昌图外，词作中甚至完全没有明确的地理名词。冯延巳词也不写历史名胜与人名。

此外，五代时巴蜀与越地交通艰难，《旧五代史·司马邺传》记载：“时淮路不通，乘馭者迂回万里，陆行则出荆、襄、潭、桂入岭，自番禺泛海至闽中，达于杭、越。”²¹可知，彼时吴越与前后蜀政权之间山水相隔，一度曾因后梁与杨吴对峙，而道路不通。两地人员往还受限，商贸交通受阻，需要远出荆楚，绕道岭表，泛海交往。从或客观上引发了花间二、三代词人越地的陌生化，而作家对于陌生对象的想象空间也更大，或许也更有书写兴趣。所以我们看到花间词人写越地意象远超当时其他词人，而他们写吴地意象也占到唐宋词人明确写出吴地地名、典故的45%弱。

从文学创作而言，我们可能会说他们受到了越地书写传统的影响。因为，与花间词人类似的叙述的确是有众多前文本的。唐人怀古之作咏及吴越故事者多涉及西施入吴之事。尤其是姑苏怀古之作，如李白《苏台览古》、皎然《姑苏行》、刘商《姑苏怀古送秀才下第归江南》，其例甚多，稍检即得。而专写西子人物的咏史之作，作品量也不少，如李白《越女词》、包溶《越女词》、于濬《越溪女》、苏振《西施》皆其例。被认为是花间词人沿袭对象的罗虬《比红儿诗》也有相应的叙述，其九道：“越山重叠越溪斜，西子休怜解浣纱。”²²前代文学家留下了可资借鉴的丰富文本，直接浸润了花间词人的笔端。

从现有唐五代词文本的情况看，西蜀由于《花间集》的编纂，保留了相对可观的作品量，但南唐以外的其他割据政权所留下的词作就少得多。撇开文本流传的问题，我们不难发现西蜀、南唐及同时代的文本虽有多元主题，也有不同风格，但相较早期词作（不论是敦煌曲子词也好，还是唐人诗客曲子词也好）其审美婉约化、对象狭小化、抒情普泛化的趋向都是非常明显的。唐人戴叔伦《转应词》（边草）、敦煌词《赞普子》（本是蕃家将）之类边塞词的宏阔场景展示、豪放叙述风格倏忽不见了。甚至于实用化的易静《兵要望江南》也无从觅迹。而在越地书写的部分，张志和《渔父》组词是大历九年左右，湖州太守颜真卿主持的文会上唱和之作，会后张志和又依词作绘制词意画²³。虽然这是在越地唱和的作品，但仅可见的二十一首和作均与越地无关²⁴。张志和所作二首主题内

容与越地地名的空间限制关系不大，若将词中“钓台”改成别的地名事实上也是成词的。但从风格上说张作是接近于温庭筠越地书写的诗歌的，而温飞卿五首涉及越地意象的词作恰恰都是不同于其诗歌叙述风格的委婉之作。温庭筠诗词文本的内在差异，足以说明唐人自身就已经注意区别诗、词的体性。正如王兆鹏师所说“词体一开始就呈现出诗混合的迹象”，而“温词的出现，标志着词体从传统的五七言诗歌中分离独立出来，宣告词体的定型与成熟”²⁵。而在沢崎久和《〈花间集〉における“沿襲”》总结花间词人4类沿袭对象，温庭筠词、同侪之词均被列在其中²⁶。这种沿袭模仿看上去是花间词人主动施为的，而这种模仿带来了花间词人越地书写有别于唐诗的取向。他们在重新型塑词体体性的过程中，不断丰富、突出了“越女想象”语汇系统。花间词人群体起而效之巩固了温词创作的文体实践成果，稳定了“花间范式”的基本特征。不妨说花间词人越地书写面貌的形成主要是词体独立进程中，花间词人内部认同与主动模仿的结果。

而花间词人内部主动模仿的理由，也让我们不得不重新审视花间词的创作背景。饶宗颐先生说：“敦煌谱所显示的情况，必为歌筵上酒之用。……我故谓《云谣》与《花间》《尊前》本是一脉相承，仍是属于乐章舞曲一类。”²⁷《花间集》与《云谣集杂曲子》《尊前集》诸词一样，都是歌筵上酒之用。创作目的即为乐章舞曲，写作场合也可能是歌筵上即席所为。而花间诸人除温庭筠、皇甫松、和凝外，多在相近的时间生活在相近的区域，即便孙光宪也是蜀地所出。因此，彼此间很可能传唱同一批曲子词。“一个诗人不需要考虑之前的任何一首具体的诗歌，因为他读过或听过很多‘同一类型的’诗歌，熟知很多遵循某种程序的诗句。就和语言习得（language acquisition）一样，很多具体的语言表述累积起来，就会指向一系列的语言可能性、规律和习惯。”²⁸宇文所安的这段话，或许正可以解释《花间集》内部文本高度耦合的面貌，也可以部分说明为什么花间词人会成为当时用越地意象的最多的词人群。但是否有更多、更深刻的影响因素，还值得我们继续考虑。

注

- 1 赵惠俊《〈花间集〉的地理意象》，《中国韵文学刊》2016年第2期；刘帼超《〈花间集〉的南方地名的艳情色彩》，《理论界》2017年第6期；李定广《“花间别调”与晚唐五代蜀粤商贸活动》，《文学遗产》2018年第3期；李博昊《论蜀之地理形势与〈花间集〉的词调来源》，《湖北社会科学》2018年第5期。
- 2 本文所引词作均出自李一氓《花间集校》，人民文学出版社1958年版。
- 3 [唐]孟浩然著，佟培基笺注：《孟浩然诗集笺注》上海古籍出版社2000年版，第217页。
- 4 张伟然：《中古文学的地理意象》，中华书局2014年版，第111页。
- 5 曾昭岷、曹济平、王兆鹏、刘尊明编著：《全唐五代词》，中华书局1999年版第136页。
- 6 薛昭蕴，陈尚君《‘花间’词人事辑》认为当作“薛昭纬”（文载陈著《唐代文学丛考》，中国社会科学出版社1997年版，第373页）。而《全唐五代词》以为“终无确乎不拔之证”（第494页），可参。
- 7 《全唐五代词》，第719页。
- 8 刘帼超：《〈花间集〉的南方地名的艳情色彩》，《理论界》2017年第6期。
- 9 [宋]范成大：《吴郡志》，江苏古籍出版社1999年版，第100页。
- 10 [清]彭定求等编：《全唐诗》卷四百八十六，中华书局1960年版，第5516页。
- 11 《全唐五代词》第183页。
- 12 《全唐五代词》第808页。
- 13 这种文本“沿袭”现象在《花间集》中十分常见。村上哲见曾说：“在蜀词人的大部分作品中，可以明显地窥见那模仿的痕迹（超按：指模仿温庭筠。”（氏著，杨铁婴译《唐五代北宋词研究》，陕西人民出版社1987年版，第116页。）
沢崎久和《〈花間集〉における“沿襲”》（《高知大学学术研究報告》第三十四卷，1985年）准此论，专门分析过《花间集》内部，以及《花间集》与唐诗之间的“沿袭”现象，及其文本操作方法。我们主要关注花间词人对特定地域的书写，亦即越地想象文本的构筑。
- 14 《全唐五代词》以文体明确的作品为“正编”，但文体难断，或历代总集误收的声诗与徒诗作品列为“副编”（《全唐五代词》第22页）。

- 15 《全唐五代词》第 26 页。
- 16 《全唐五代词》第 808 页。
- 17 《全唐五代词》第 67 页。
- 18 刘学楷：《温庭筠全集校注》，中华书局 2007 年版，第 38 页。
- 19 《温庭筠全集校注》，第 402、443 页。
- 20 聂安福：《韦庄集笺注》，上海古籍出版社 2002 年版，第 21、174 页。
- 21 [宋] 薛居正：《旧五代史》，中华书局 1976 年版，第 1 册，第 279 页。
- 22 [宋] 计有功著，王促鏞校笺：《唐诗纪事校笺》卷六十九，巴蜀书社 1989 年版，第 1842 页。
- 23 唐人沈汾《续仙传》道：“真卿为湖州刺史，与门客会饮，乃唱和为《渔父》词。其首唱志和之词，曰：‘西塞山边白鹭飞，桃花流水鳜鱼肥。青箬笠，绿蓑衣，斜风细雨不须归。’真卿与陆鸿渐、徐士衡、李成矩共和二十五首，递相夸赏。而志和命丹青，剪素，写景夹词，须臾五本。”（李昉：《太平广记》卷二十七“玄真子”条引，中华书局 1961 年版，第 180 页。）
- 24 王昆吾：《唐代酒令艺术》附录《唐著辞纪事》收 20 首（知识出版社 1995 年版，第 286-287 页），《全唐五代词》收张志和兄张松龄一首。
- 25 王兆鹏：《从诗词的离合看唐宋词的演进》，《中国社会科学》2005 年第 1 期。
- 26 沢崎久和：《〈花間集〉における“沿襲”》，第 84 页。
- 27 饶宗颐：《后周整理乐章与宋初词学有关诸问题——由敦煌舞谱谈后周整理乐章兼论柳永〈乐章集〉之来历》，《饶宗颐二十世纪学术文集》卷十二，中国人民大学出版社，2009 年，第 158 页。
- 28 [美] 宇文所安著，胡秋蕾等译：《中国早期古典诗歌的生成》，生活·读书·新知三联书店 2012 年版，第 17 页。

朝鮮前期 元好問 『遺山樂府』의 受容에 대하여 : 金時習의 예를 중심으로

魯耀翰

1. 들어가며

南孝溫(1454-1492)의 『秋江冷話』에는 元好問(1190-1257), 金時習(1435-1493)과 관련한 다음과 같은 일화가 수록되어 있다. 金時習은 독서할 때에 文義에 구애되지 않고 大旨를 보고 大義를 음미할 뿐이었다. 남효온이 「征夫怨」 10수를 지어 元遺山의 시에 和韻하였는데 그 중 1 편은 다음과 같았다.

百草凋霜月滿空
年年鞍馬任西東
令嚴萬幕平沙夜
部伍相招鼓角中

온갖 풀 서리에 시들고 달빛 하늘에 가득한데
해마다 군마 타고서 동서남북을 돌아다니네
밤중 사막의 온 군막에는 군령이 지엄하여
북과 호각 소리 속에 대오가 서로 부르네

그런데 金時習이 보고 실소하며 말하기를 “글자가 크게 잘못되었소. 어찌 군령이 엄한 때에 다시 서로 부르는 일이 있겠소?” 라고 하고는 『시경』 「小雅·車攻」을 취하여 내게 보여 주었다. 그 시에 “이 사람이 정벌하러 가니, 소문만 있고 소리는 없도다. 진실된 군자는, 참으로 대성하리라. [之子于征, 有聞無聲. 允矣君子, 展也大成.]” 라고 하였다. 남효온은 깊이 그 말에 감복하고 돌아와 洪餘慶에게 이 일을 말하였더니, 洪餘慶이 찬탄하며 말하기를 “東峰의 독서가 가장 좋고 가장 좋구나.” 라고 하였다.¹ 金時習은 「山居集句」에서 元好問의 “小樓人靜月侵床”로 集句詩를 짓기도 했다.²

元好問의 文集이 언제 우리나라에 들어왔는지는 알 수 없다.³ 다만 權近(1352-1409)은 1390년에 지은 「題盾谷李公書室」의 自註에서 “집에 『元遺山集』이 있었으므로 그 詩韻을 썼으며, 折花·雲山 두 그림이 또 진귀하였으므로 아울러 시를 지었다.”⁴ 라고 하고 있어,

고려말에는 『元遺山集』이 輸入되어 文人들 사이에서 읽히고 있었던 것으로 推定된다.

그런데 元好問에게는 文集 외에 『遺山樂府』가 있어, 初刊本은 전하지 않고 弘治 5년(1492, 朝鮮成宗 23)에 晉州에서 木板으로 간행한 朝鮮刊本이 國內외에 전한다. 이 책은 李宗準의 「遺山樂府詩跋」에 의하면 “舊本을 가지고 殘文과 誤字를 考校하고, 淨本을 謄寫하여, 마침내 晉州牧使 慶緝에게 부탁하여 上梓한 것 [於是就舊本考校殘文誤字, 謄寫淨本, 遂屬晉州慶牧使緝繕梓]”으로, 舊本의 殘文과 誤字를 교정하고 淨寫하여 목판으로 간행한 것이다. 이 晉州刊本 『遺山樂府』는 弘治 11년(1498)에 中國에서 간행된 것보다 6년이 앞서는 것으로, 朱孝臧(1857-1931)은 『彊村叢書』所收 『遺山樂府』3卷(高麗刊本)에서 이 晉州刊本을 底本으로 삼기도 하였다.

晉州刊本 『遺山樂府』에 대해서는 車柱環(1976)⁵에 의해 처음 소개되고, 尹浩鎭(1997)⁶은 李宗準 「遺山樂府詩跋」을 중심으로 中國의 詩歌理論이 韓國의 漢詩論에 미친 影響을 검토한 바 있다. 본고는 이상의 연구를 참고하면서 元好問 『遺山樂府』의 刊行과 그 影響에 대해 논하고자 한다.

2. 晉州刊本 元好問 『遺山樂府』의 刊行

晉州刊本元好問 『遺山樂府』는 同本이 연세대학교 도서관에 2부, 하버드대학 하버드-엔칭도서관에 1부 등 3부가 확인된다. 간략한 서지사항은 다음과 같다.

1) 연세대학교 도서관

請求記號 : 고서 (귀) 293 0

3卷 1冊 : 四周單邊 半郭 15.9 × 11.8 cm, 有界, 10行 17字, 大黑口, 上下內向黑魚尾; 24 cm

跋 : 時弘治紀元之五年壬子(1492) 重陽後一日 都事月城李宗準仲勻識

請求記號 : 고서 (귀) 810 0

3卷 1冊 : 四周雙邊 半郭 15.6 × 11.9 cm, 有界, 10行 17字, 大黑口,

朝鮮前期 元好問『遺山樂府』의 受容에 대하여:

金時習의 예를 중심으로

上下內向黑魚尾; 23 cm

跋: 時弘治紀元之五年壬子 (1492) 重易後一日 都事月城李宗準仲勻識

2) 하버드대학 하버드 - 엔칭도서관

請求記號: TK 5237.5 1147

HOLLIS number: 990079922420203941

3卷1冊: 四周雙邊 半郭 15.6 × 11.9 cm, 有界, 10行17字, 大黑口,
上下內向黑魚尾; 23.9 × 16.3 cm

跋: 時弘治紀元之五年壬子 (1492) 重易後一日 都事月城李宗準仲勻識
印記: 「臨淵齋章」(朱文方印)

『遺山樂府』의 刊行에 대해서는 『成宗實錄』 권 285 成宗 24년 (1493) 12월 28일의 記事에李克墩 (1435-1503) 이 慶尙監司가 되고,李宗準 (?-1499) 이 都事가 되었을 때 『酉陽雜俎』·『唐宋詩話』·『破閑集』·『補閑集』·『太平通載』 등과 함께 『遺山樂府』를 刊行하였다는 기록이 전한다.⁷

앞서 보았듯이李宗準은 이 晉州刊本 『遺山樂府』에 跋文을 작성했는데, 이에 따르면 舊本 『遺山樂府』을 가지고 殘文과 誤字를 考校하고 淨本을 謄寫하여서 당시 晉州牧使 慶緝에게 부탁하여 간행한 것이라고 한다. 이때 舊本이란 唐本을 가리키는 것일 수도 있고, 唐本을 朝鮮에서 覆刻한 것을 가리키는 것일 수도 있다. 跋文은 ‘弘治紀元之五年壬子重陽後一日’에 작성되었는데 이때는 成宗 23년 (1492) 9월 10일에 해당한다.⁸



<그림 1> 하버드대학 하버드 - 엔칭 도서관 소장 『遺山樂府』. 裴三益 (1534-1588) 의 장서인이 눌러져 있다.

하버드대학 하버드 - 엔칭도서관 소장 『遺山樂府』는 首葉에 元好問 「遺山自題樂府引」 3葉(半葉 8行10字). 序末에 “歲甲午 [...] 十月五日, 太原元好問裕之題.” 라고 있다. 이어서 「遺山樂府目錄」이 2葉에 걸쳐 수록되어 있다. 목록에 이어 본문이 시작된다. 본문은 首行에 ‘遺山樂府卷之上’, 次行低 8 格 ‘太原元好問裕之’ 라고 되어 있다. 次行에 低3格으로 편명 ‘水調歌頭’ 가 나오고 행을 바꾸어 低 1 格으로 小序, 次行 平頭에서 시 본문이 이어진다. 首題 아래에 「臨淵齋章」(朱文方印) 이 눌러져 있다. 中縫에는 ‘遺山上’ 이라고 하여 서명과 권차를 표시하고 아래에 頁次를 기재하였다.

元好問의 「遺山自題樂府引」는 다음과 같다.

세상에 전하는 악부는 많다. 黃山谷 (황정견) 의 「漁父詞」에 “푸른 대곶길 샷갓 앞 무한한 일, 푸른 도롱이 아래 한때의 휴식, 기운

바람 가랑비에 뱃머리를 돌리누나. [靑箬笠前無限事, 綠蓑衣底一時休, 斜風細雨轉船頭]”라고 하고 陳去非(진여의)의 「懷舊」에 “옛날에 午橋莊의 다리 아래에서 술마실 적 생각하니, 좌중이 모두 호걸 영웅이었어라. 긴 도랑에 달빛 소리 없이 떠나고, 살구꽃 드문 그림자 속에서 피리 불어 날 밝았지. 삼십 년이 한바탕 꿈 같으니, 이 몸이 살아 있음이 놀랍기만 하구나. 한가히 높은 누각에 올라 맑게 갠 하늘 감상하니, 지난 세월 여러 일 많기도 하였는데, 삼경에 들려오는 어부의 노랫소리. [憶昔午橋橋下飲, 坐中都是豪英. 長溝流月去無聲. 杏花疏影裡, 吹簫到天明. 三十年來成一夢, 此身雖在堪驚. 閒登高閣賞新晴. 古今多少事, 漁唱起三更]”라고 하고 또 “楚辭를 높게 읊으며 단오일에 수작하니, 천애의 곳에서도 節序는 총총히 지나간다. 석류꽃은 무희의 치마처럼 붉지 않은데, 이 마음 아는 이 없으니, 노래 마치자 주렴에 바람만 가득하구나. 만사에 이 한 몸 늙어 서러운데, 접시꽃은 담장 동쪽에서 비웃는다. 술잔의 깊고 얕음은 지난해와 같은데, 시험삼아 澆橋 아래에 술을 부으면, 오늘 저녁에는 湘江에 이르리라. [高詠楚辭酬午日, 天涯節序匆匆. 榴花不似舞裙紅. 無人知此意, 歌罷滿簾風. 萬事一身傷老矣, 戎葵凝咲墻東. 酒杯深淺去年同. 試澆橋下水, 今夕到湘中]”라고 하였다. 이와 같은 부류를 詩家에서는 言外句라고 하는데, 머금고 오랫동안 곱씹으면 전하지 않는 묘함이 은연중에 미간에 떠오르니 오직 구안자만이 이를 감상할 수 있다. 옛날부터 있어 누구나 먹고 마시지만 그 맛을 제대로 아는 사람이 드물다. 비유하자면 여윈 암소와 늙은 숫양을 일천 번 끓이고 일백 번 단련하면 椒桂의 향이 사람의 코에 거스르나, 한 번 찮은 뒤에는 오래된 숨이 입안에 가득하여 혹 역겨워 토해내지만, 반드시 金頭의 큰 거위와 같이 소금에 절여 이들을 묵히고 火候를 잘 아는 늙은 여종으로 하여금 삶게 하여 황색 고기와 흰 비계가 씹으면 씹을수록 맛이 더욱 나와 그 깊은 맛을 말할 수 있는 것과 같다. 갑오년(1234)에 내가 쓴 『遺山新樂府』가 이루어지자 손님이 나에게 말하기를 “그대는 전에 宋人의 시는 대개 唐에 미치지 못하고 악부가사는 낫다고 하였는데 이 논의는 매우 옳다. 악부 이래 蘇軾이 제일이고 이후 곧바로 辛棄疾에 이르렀다고 하였는데, 이 의론 역시 옳다. 소식과 신기질은 논하지 말고, 그대가 得意 했

을 때 秦觀·晁補之·晏幾道·賀鑄의 여러 사람과 비교하여 어떠한가?” 라고 하였다. 나는 크게 웃고 객의 등을 어루만지며 “어떻게 알겠는가. 蛤蜊나 먹으세.” 라고 말했다. 객 역시 웃으며 떠났다. 10월 5일 太原 元好問 裕之는 題한다.

世所傳樂府多矣. 如山谷「漁父詞」: “青箬笠前無限事, 綠蓑衣底一時休, 斜風細雨轉船頭.” 陳去非「懷舊」云: “憶昔午橋橋下飲, 坐中都是豪英. 長溝流月去無聲. 杏花疏影裡, 吹簫到天明. 三十年來成一夢, 此身雖在堪驚. 閒登高閣賞新晴. 古今多少事, 漁唱起三更.” 又云: “高詠楚辭酬午日, 天涯節序匆匆. 榴花不似舞裙紅. 無人知此意, 歌罷滿簾風. 萬事一身傷老矣, 戎葵凝咲墻東. 酒杯深淺去年同. 試澆橋下水, 今夕到湘中.” 如此等類, 詩家謂之言外句, 含咀之久, 不傳之妙, 隱然眉睫間, 唯具眼者乃能賞之. 古有之, 人莫不飲食, 鮮能知味. 譬之羸牴老羝, 千煮百鍊, 椒桂之香逆於人鼻, 然一吮之後, 敗絮滿口, 或厭而吐之矣. 必若金頭大鵝, 鹽養之再宿, 使一老奚知火候者烹之, 膚黃肪白, 愈嚼而味愈出, 乃可言其雋永耳. 歲甲午, 予所錄『遺山新樂府』成, 客有謂予者云: “子故言宋人詩大概不及唐, 而樂府歌詞過之. 此論殊然. 樂府以來, 東坡爲第一, 以後便到辛稼軒, 此論亦然. 東坡·稼軒卽不論, 且問遺山得意時, 自視秦晁賀晏諸人爲何如?” 予大咲, 拊客背云: “那知許事, 且噉蛤蜊.” 客亦咲而去. 十月五日, 太原元好問裕之題.

元好問은 黃庭堅과 陳與義의 詞 작품을 인용하고는 詞 작품을 詩家들은 言外句라고 하는데, 오래 씹으면 전하지 않는 오묘함이 은연 중에 눈썹 사이에 떠오르니, 오직 具眼者만이 그것을 감상할 수 있다고 하였다. 또한 갑오년(1234)에 『遺山樂府』가 이루어졌는데, 손님이 “그대는 전에 宋人의 시는 대개 唐에 미치지 못하고 악부가사는 낫다고 하였는데 이 논의는 매우 옳다. 악부 이래 蘇軾이 제일이고 이후 곧바로 辛棄疾에 이르렀다고 하였는데, 이 의론 역시 옳다. 소식과 신기질은 논하지 말고, 그대가 得意 했을 때 秦觀·晁補之·晏幾道·賀鑄의 여러 사람과 비교하여 어떠한가?” 라고 묻자, 元好問은 크게 웃고 객의 등을 어루만지며 “어떻게 알겠는가. 蛤蜊나 먹으세.” 라고 하였다고 한다. 서문 작성일은 1234년 10월 5일이다.

朝鮮前期 元好問『遺山樂府』의 受容에 대하여:

金時習의 예를 중심으로

서문을 작성한 1234 년은 元好問이 45 세 되던 해이다. 그 해는 元好問이 聊城에 抑留된 지 2년이 되던 해로, 정월에 金이 멸망하였다. 元好問은 1221 년 (32세) 進士가 되어 1224 년 (35세) 에 權國史院 編修라는 관직으로 관리생활을 시작하였다. 이 해는 金의 마지막 임금인 哀宗 (1224-1234 재위) 이 제위에 오른 해이기도 했다. 당시는 蒙古의 세력이 팽창하기 시작하던 때로, 哀宗 正大 8 년 (1231) 부터 金이 蒙古의 침공에 붕괴되기 시작하여, 1232 년 蒙古軍이 汴京을 포위하자 哀宗은 河北으로 出奔한다. 1233년 金의 西面元帥로 있던 崔立 이 반란을 일으켜 성문을 열어 몽고군이 汴京을 점령하자, 元好問은 당시 蒙古의 宰相 耶律楚材 (1190-1243) 에게 書翰을 보내 50여 인의 주요 인물의 보호를 요청하였다. 하지만 元好問은 그 일주일 후 聊城에 抑留되고 만다. 1234년 정월 몽고와 송의 연합군에 蔡州가 함락되고 그곳에 있던 哀宗이 自殺함으로써 金은 완전히 멸망한다. 금 멸망 후 元好問은 金의 遺民으로서 새 왕조에 벼슬 나가지 않고 聊城에 체류하면서 金의 역사와 문학을 정리하는 일을 여생의 사명으로 삼았다고 한다.⁹

李宗準이 작성한 「遺山樂府詩跋」은 다음과 같다.¹⁰ 이 발문은 하버드대학 소장본에는 수록되어 있지 않다.李宗準의 문집 『慵齋遺稿』에 수록되어 있는 「遺山樂府詩跋」을 단락을 나누어 살펴보면 다음과 같다.

악부는 詩家의 大香奩이다. 원호문이 저술한 바는 清新하고 婉麗한데, 스스로 보기를 秦觀·晁補之·晏幾道·賀鑄와 비교되는 것을 부끄럽게 여기는 듯하여, 직접 蘇軾과 辛棄疾의 작품에 追配하고자 하였다. 이것은 동파가 제일이어서 작자가 얻기 어려운 것이라 여긴 것이 아니겠는가? 하지만 陳師道 (1053~1101)는, 소식이 시로 詞를 짓기를 教坊의 雷大使의 춤과 같이 하였으니, 비록 천하의 공교로움이지만 요컨대 本色이 아니라고 여겼다. 李清照 (1084~1155) 역시 “子瞻의 歌詞는 모두 句讀가 정리되지 않은 시일 뿐이어서, 종종 音律이 맞지 않는다. 王安石과 曾鞏의 문장은 西漢과 비슷하지만, 小歌詞를 지으면 사람들이 반드시 절도하며 읽지 못할 것이다. 곧 詞는 별도의 一家임을 알 수 있는데 이것을 아는

사람이 드물다.” 라고 하였다. 저 세 선생의 집대성으로도 오히려 사람들의 譏議를 면하지 못하였거늘, 하물며 그 아래에 있는 사람이라?

樂府, 詩家之大香奩也. 遺山所著, 清新婉麗, 其自視似羞比秦晁賀晏諸人, 而直欲追配於東坡·稼軒之作. 豈是以東坡爲第一, 而作者之難得也耶? 然后山以爲子瞻以詩爲詞, 如教坊雷大使之舞, 雖天下之工, 要非本色. 李易安亦云: “子瞻歌詞, 皆句讀不葺之詩耳, 往往不協音律. 王半山·曾南豐, 文章似西漢, 若作小歌詞, 則人必絕倒不可讀也. 乃知別是一家, 知之者小[少].” 彼三先生之集大成, 猶不免人之譏議, 況其下者乎?

“元好問이 스스로 보기를 秦觀·晁補之·晏幾道·賀鑄와 비교되는 것을 부끄럽게 여긴 듯하다.[其自視似羞比秦晁賀晏諸人.]” 라는 말은 元好問 「遺山自題樂府引」에서 자신을 秦觀·晁補之·晏幾道·賀鑄와 비교해 어떤가라는 손님의 질문에 대해 元好問이 “어떻게 알겠는가. 蛤蜊나 먹으세 [那知許事, 且噉蛤蜊.]” 라고 대답한 것을 염두에 둔 평가이다. 또한 “직접 東坡(蘇軾)와 稼軒(辛棄疾)의 작품에 追配하고자 하였다.[而直欲追配於東坡·稼軒之作.]” 은 마찬가지로 元好問 「遺山自題樂府引」에서 “악부 이래 蘇軾이 제일이고 이후 곧바로 辛棄疾에 이르렀다고 하였는데, 이 의론 역시 옳다. [樂府以來, 東坡爲第一, 以後便到辛稼軒, 此論亦然.]” 라고 한 것을 따른 것이다.

대저 詩文은 平側을 구분하지만 歌詞는 五音과 五聲을 구분하고 또 六律을 구분하여, 淸濁과 輕重이 모두 조화로운 후에야 入腔할 수 있다. 대개 東坡는 스스로 말하기를 평생에 세 가지가 다른 사람만 못하였으니, 歌舞가 그중 하나라고 하였다. 그러므로 그가 지은 歌詞는 간혹 入腔하지 못한 곳이 있다. 하지만 王安石과 曾鞏은 모두 學際의 天人이다. 小歌詞를 짓는 것은 마치 大海에 蠡水를 따르는 것과 같은 것이니 어찌 謗傷할 수 있겠는가?

夫詩文分平側, 而歌詞分五音五聲, 又分六律, 淸濁輕重, 無不克諧, 然後可以入腔矣. 蓋東坡自言, 平生三不如人, 歌舞一也. 故所作歌詞, 間有不入腔處耳. 然半山·南豐, 皆學際天人. 其於作小歌詞, 直如酌

蠡水于大海, 豈可謗傷耶?

이중준은 다시 陳師道와 李清照의 말을 인용하여 소식의 사 작품 역시 시로 사를 지은 것 [以詩爲詞] 이라 완전한 것이라 할 수 없으며, 또한 사는 소식 문학의 본령이 아님을 지적하고 있다. 곧 사는 별도의 한 영역을 이루는 것이며 이것은 별도의 재능과 연습을 필요로 한다는 것이다. 이중준은 그 이유에 대해 아래에서 시는 평측만을 구분하지만 사는 五音과 五聲, 六律을 구분하여, 淸濁과 輕重이 모두 조화로워야 하기 때문이라고 서술하였다.

우리 東方은 이미 중국과 語音이 매우 달라, 이른바 樂府에 있어서 引聲과 唱曲을 알지 못하고, 그저 글자의 平側과 句의 長短을 구분하여 韻을 맞출 뿐이어서 모두 이른바 詩로 詞를 짓는다는 것이니, 가슴을 부여잡고 얼굴을 찌푸려도 다만 그 醜陋함을 볼 뿐이다. 그러므로 文章의 巨公들도 모두 감히 억지로 짓지 않았으니 재주가 미치지 못해서가 아니다. 이는 또한 中國人으로 하여금 「鄭瓜亭」과 「小唐鷄」의 풀이를 하도록 한다면, 반드시 사람들로 하여금 갇힌이 끊어지도록 웃게 하고 말 것과 같은 것이다. 오직 李齊賢은 忠宣王을 入侍하여 閻復·趙孟頫 등 여러 學士들과 從游하면서 詩餘의 衆體를 갖추어 알았으니, 이러한 사람은 우리 東方에서 한 사람이 있을 뿐이다. 하지만 后山(陳師道)과 易安(李清照)이 살아난다면, 弊衣로 서서히 걸어서 진짜 孫叔敖가 될 수 있을지 모르겠다. 이로써 樂府는 잠깐 동안에 지을 수 있는 것이 아님을 알 수 있으니, 비록 악부를 알지 못하더라도 우리나라의 문장에 누가 되는 것은 아니다.

吾東方, 既與中國語音殊異, 於其所謂樂府者, 不知引聲唱曲, 只分字之平側, 句之長短, 而協之以韻, 皆所謂以詩爲詞者, 捧心而顰其里, 祇見其醜陋耳. 是以文章巨公, 皆不敢強作, 非才之不逮也, 亦如使中國人若作鄭瓜亭小唐鷄之解, 則必且使人撫掌絕纓矣. 唯益齋入侍忠宣王, 與閻·趙諸學士游, 備知詩餘衆體者, 吾東方一人而已. 然使后山易安可作, 未知弊衣緩步, 爲眞孫叔敖也耶? 以此知人不可造次爲之, 雖未知樂府, 亦非我國文章之累也.

이종준은 조선의 언어가 이미 중국과 달라 樂府의 引聲과 唱曲을 알지 못하고, 그저 글자의 평측과 句의 장단을 구분하여 韻을 맞출 뿐이어서, 이는 이른바 시로 사를 짓는다는 것과 같다고 하였다. 하지만 이는 중국인들이 高麗歌謠인 「鄭瓜亭」이나 「小唐鷄」를 알지 못하는 것과 같은 것이므로, 조선 문인으로서 사 문학을 알지 못하는 것이 부끄러움이 되지 않는다고 변론하였다. 이는 앞에서, 원호문이 사의 일인자로 꼽은 소식 역시 진사도나 이청조에 의해 시로 사를 짓는다는 비판을 받았다는 언급을 했던 이유이기도 하다. 또한 사를 잘 지은 문인으로 이제현 한 사람이 있지만, 그 역시 진사도나 이청조가 살아난다면 비판을 면하지 못할 것이라고 하였다.

내가 이 말을 외운 지 오래되었다. 이제 이것을 監司 廣原 李相國에게 고하니, 相國이 말하기를 “그대의 이 말은 옳다. 하지만 학자들이 이를 모방하려고 한다면 이 시집을 널리 유포하지 않을 수 없다.” 라고 하였다. 이에 舊本을 가지고 殘文과 誤字를 考校하고, 淨本을 謄寫하여, 마침내 晉州牧使 慶紕에게 부탁하여 上梓하였다. 弘治 5년 (1492, 壬子) 9월 10일 都事 月城 李宗準 仲勻은 기록한다.

愚之誦此言久矣. 今以告監司廣原李相國, 相國曰: “子之言是矣. 然學者如欲依樣畫葫蘆, 不可不廣布是集也.” 於是就舊本考校殘文誤字, 謄寫淨本, 遂屬晉州慶牧使紕繡梓, 時弘治紀元之五年壬子重陽後一日, 都事月城李宗準仲勻識.

元好問은 『遺山樂府』에서 작품을 編年式이 아닌 分類式으로 編次하였으며, 수록 작품 수는 모두 55 調 218 首이다. 목록을 들면 다음과 같다.

卷上

水調歌頭 (11) 摸魚兒 (3) 木蘭花慢 (6) 水龍吟 (5) 沁園春 (2)
 賀新郎 (1) 最高樓 (1) 玉漏遲 (1) 滿江紅 (8) 念奴嬌 (1)
 永遇樂 (1) 聲聲慢 (1)

朝鮮前期 元好問『遺山樂府』의 受容에 대하여:

金時習의 예를 중심으로

卷中

石州慢 (2) 洞僊歌 (2) 滿庭芳 (1) 八聲甘州 (2) 江城子 (14)
三奠子 (2) 行香子 (1) 感皇恩 (2) 促拍醜努兒 (3) 青玉案 (2)
婆羅門引 (1) 江梅引 (1) 玉樓春 (1) 定風波 (2) 蝶戀花 (3)
臨江仙 (15) 江月晃重山 (1) 虞美人 (2) 小重山 (2) 鵲橋仙 (3)
一落索 (1) 南鄉子 (5) 踏莎行 (1) 桃源憶故人 (1)

卷下

鷓鴣天 (36) 品令 (1) 浪淘沙 (6) 南柯子 (3) 西江月 (1)
人月圓 (2) 太常引 (5) 眼兒媚 (1) 朝中措 (10) 阮郎歸 (1)
清平樂 (11) 浣溪沙 (11) 後庭花破子 (2) 古烏夜啼 (1) 點絳脣 (8)
訴衷情 (3) 採桑子 (1) 謁金門 (1) 好事近 (1)

3. 元好問『遺山樂府』의 수용: 金時習의 경우

한국의 경우 고려 중엽 이후 조선 전기까지는, ‘詞 = 樂府’ 라는 개념이 도입되고 詞는 樂章의 성격을 지녔기 때문에 樂府·樂章·詞의 명칭이 혼용되고 있었다. 車柱環의 조사에 따르면, 한국에서 본격적으로 사를 짓기 시작한 인물은 李齊賢으로, 『益齋亂藁』에 長短句 15調 53篇이 수록되어 있다. 李齊賢과 동시대 인물인 李穀 (1298-1351) 역시 『稼亭集』에 3調 10篇의 사를 남기고 있다. 그밖에 鄭誦 (1309-1345) 1調 8篇, 權近 (1352-1409) 와 權遇 (1363-1419) 형제 1調 10篇, 金時習 (1435-1493) 9調 9篇, 崔演 (1503-1549) 7調 36篇, 金止男 (1559-1631) 4調 4篇, 許筠 (1569-1648) 6調 6篇, 金佺 (1597-1638) 28調 30篇, 安命夏 (1682-1752) 23調 23篇, 柳宜健 (1687-1760) 3調 5篇, 朴昌元 (1683-1753) 11調 12篇, 孟欽堯 (1731-1800) 9調 9篇, 李善吾 (1737-1811) 6調 13篇, 李周禎 (1750-1818) 1調 12篇, 鄭奎漢 (1750-1824) 5調 5篇, 丁若鏞 (1762-1836) 8調 9篇, 孟晚燮 6調 6篇, 趙冕鎬 (1803-1887) 50調 61篇, 都漢基 (1836-1902) 7調 7篇, 金允植 (1835-1922) 20調 20篇 등의 사 작품이 전한다.¹¹

본고에서는 이 중 金時習의 『梅月堂集』 권13 「關東日錄」에 수록된 사 작품을 검토해 보기로 한다.

「關東日錄」은 金時習이 50대에 관동을 유람하면서 남긴 시들을 엮은 것이다. 「關東日錄」에는 「石州慢 (寒松亭)」, 「洞仙歌 (鏡浦)」, 「滿庭芳 (華表柱)」, 「八聲甘州 (白沙汀)」, 「江城子 (洞山館)」 등 5편의 詞 작품이 실려 있다. 그런데 이 5편의 수록 순서는 元好問 『遺山樂府』 卷中の 첫 번째 작품부터 다섯 번째 작품까지의 수록 순서와 일치한다. 곧 金時習은 元好問 『遺山樂府』의 편차에 따라 일종의 和韻의 형식으로 詞 작품을 지었음을 알 수 있다. 또한 「關東日錄」에는 사 작품이 5 수밖에 실려 있지 않지만, 원래는 그보다 훨씬 많은 양의 사 작품이 있었을 것으로 추정할 수 있다.

먼저 「石州慢 (寒松亭)」을 살펴보도록 하자. 王奕清 『欽定詞譜』에 의하면 「石州慢」은 『宋史』 「樂志」에 “越調이다. 賀鑄의 詞에 有 ‘長亭柳色才黃’ 句가 있어 「柳色黃」라고 하였고 謝懋의 詞는 「石州引」라고 하였다” 라고 나온다.¹² 賀鑄의 「石州慢」은 雙調 102字, 前段 10句 4仄韻, 後段 11句 5仄韻이다. 이 調는 아래의 詞를 正體로 하며, 蔡松年 · 二張 詞의 攤破한 句法과 王之道 詞의 句讀가 全異한 것은 모두 變格이다. 이 詞의 前後段 兩結句는 의례상 上1 下4의 句法으로 하니, 填者는 이를 잘 알아야 한다고 하였다.¹³

『欽定詞譜』에서 正體로 삼은 賀鑄의 작품은 다음과 같다.

薄雨催寒，斜照弄晴，春意空闊。長亭柳色才黃，遠客一枝先折。

◎●○○，○●●○，◎●○■。○○◎●○○，◎●◎○○■。

煙橫水際，映帶幾點歸鴉，東風消盡龍沙雪。還記出關時，恰而今時節。

○○◎●，◎◎◎●○○，◎○○●○○■。◎●●○○，●○○○■。

將發。畫樓芳酒，紅淚清歌，頓成輕別。已是經年，杳杳音塵都絕。

○■。●○○●，◎◎◎◎，◎○○■。●●○○，◎●◎○○■。

欲知方寸，共有幾許清愁，芭蕉不展丁香結。枉斷斷天涯，兩厭厭風月。

◎○○●，◎◎◎●○○，◎○○●○○■。◎●●○○，●○○○■。

※○平聲，●仄聲，◎可平可仄，□平韻，■仄韻

朝鮮前期 元好問『遺山樂府』의 受容에 대하여:

金時習의 예를 중심으로

元好問의 「石州慢」 2편 중 1 편을 들면 다음과 같다.

「石州慢」【赴召史館，與德新丈別於岳祠西新店，明日以此寄之。】
 擊筑行歌，鞍馬賦詩，年少豪舉。從渠里社浮沈，枉笑人間兒女。
 ●●○○，○●●○，○●○■。○○●●○○，●●○○○■。
 生平王粲，而今憔悴登樓，江山信美非吾土。天地一飛鴻，渺翩翩何許。
 ○○○●，○○○●○○，○○●●○○■。○●●○○，●○○○■。
 羈旅。山中父老相逢，應念此行良苦。幾許虛名，誤卻東家雞黍。
 ○■。○○●●○○，○●●○○■。●●○○，●●○○○■。
 漫漫長路，蕭蕭兩鬢黃塵，騎驢漫與行人語。詩句欲成時，滿西山風雨。
 ○○○●，○○●●○○，○○●●○○■。○●●○○，●○○○■。

그런데 元好問의 「石州慢」은 下段이 賀鑄의 「石州慢」과 같지 않다. 賀鑄의 「石州慢」은 “將發。畫樓芳酒，紅淚清歌，頓成輕別” 로, 2-4-4-4 구로 이루어져 있지만 元好問의 「石州慢」은 “羈旅。山中父老相逢，應念此行良苦” 의 2-6-6 구로 되어 있는 것이다. 『欽定詞譜』는 賀鑄의 작품을 正體로 삼았지만, 元好問은 蔡松年の 「石州慢」을 따르고 있다. 蔡松年の 「石州慢」은 다음과 같다.

雲海蓬萊，風霧鬢鬢，不假梳掠。仙衣捲盡雲霓，方見宮腰纖弱。
 ○●○○，○●●○，●●○■。○○●●○○，○●○○○■。
 心期得處，世間言語非真，海犀一點通寥廓。無物比情濃，覓無情相博。
 ○○●●，●○○●○○，●○●●○○■。○●●○○，●○○○■。

離索。曉來一枕餘香，酒病賴花醫卻。灑灑金樽，收拾新愁重酌。
 ○■。●○●●○○，●●●○○■。●●○○，○●○○○■。
 片帆雲影，載將無際關山，夢魂應被楊花覺。梅子雨絲絲，滿江干樓閣。
 ●○○●，●○○●○○，●○○●○○■。○●●○○，●○○○■。

元好問의 「石州慢」은 蔡松年の 「石州慢」과 平仄에서 일부 차이를 보인다. 단, 이것은 아래에서 다시 보겠지만, 賀鑄의 「石州慢」을 참고하면 대부분 平仄을 모두 허용하는 곳이므로 크게 문제되는 것은 아

니다. 그런데 김시습의 「石州慢」은 元好問과 蔡松年の 체식을 따르되 元好問 「石州慢」과 蔡松年 「石州慢」의 平仄이 다른 곳에서, 모두 元好問 「石州慢」을 따라 平仄을 맞추고 있다. 金時習의 「石州慢 (寒松亭)」은 다음과 같다.

十里寒聲，蕭颯高低，吹我耳側。疑聞帝居紅雲，奏彼鈞天廣樂。
 ●●○○，○○●●，○●●■。○○●●○○，●●○○○■。
 生平豪氣，如今添却遊遊，滄波萬頃何遼廓。都是一胸襟，儘教伊吞吐舒縮。
 ○○○●，○○○●○○，○○●●○○■。○●●○○，●○○○●○■。
 窪尊斲石團圓，都是舊時蹤跡。萬古相傳，一任風磨苔剝。
 ○○●●○○，○●●○○■。●●○○，●●○○○■。
 流年如許，跳丸歲月蹉跎，前人視我今猶昔。慷慨發長歌，滿沙汀飛鳴。
 ○○○●，○○●●○○，○○●●○○■。○●●○○，●○○○■。

金時習은 上段 제2구와 제3구에서 元好問의 「石州慢」이 ‘平仄仄平，平仄平仄’으로 되어 있는 것과 달리 ‘平仄平仄，平仄仄仄’으로 하고 있다. 또한 元好問 「石州慢」에서 ‘羈旅’는 下段의 시작이 되지만, 金時習은 이를 誤讀하여 이 두 글자를 上段으로 올려서 사를 지었다. 그 외의 平仄과 押韻에서 金時習은 元好問 「石州慢」의 平仄과 押韻을 정확히 따르고 있다. 平仄과 押韻의 사항을 표로 보이면 다음과 같다.

賀鑄	薄雨催寒，斜照弄晴，春意空闊。長亭柳色才黃，遠客一枝先折。 ◎●○○，○●●○，◎●○■。◎◎◎●○○，◎●◎○○■。
蔡松年	雲海蓬萊，風霧鬢鬢，不假梳掠。仙衣捲盡雲霓，方見宮腰纖弱。 ○●○○，○●●○，●●○■。○○●●○○，○●○○○■。
元好問	擊筑行歌，鞍馬賦詩，年少豪舉。從渠里社浮沈，枉笑人間兒女。 ●●○○，○●●○，○●○■。○○●●○○，●●○○○■。
金時習	十里寒聲，蕭颯高低，吹我耳側。疑聞帝居紅雲，奏彼鈞天廣樂。 ●●○○，○●●○，○●○■。○○●●○○，●●○○○■。
賀鑄	煙橫水際，映帶幾點歸鴉，東風消盡龍沙雪。還記出關時，恰而今時節。 ○○◎●，◎◎◎●○○，◎◎◎●○○■。◎●●○○，●○○○■。
蔡松年	心期得處，世間言語非真，海犀一點通寥廓。無物比情濃，覓無情相博。 ○○●●，●○○●○○，●○●●○○■。○●●○○，●○○○■。
元好問	生平王粲，而今憔悴登樓，江山信美非吾土。天地一飛鴻，渺翩翩何許。 ○○○●，○○○●○○，○●●●○○■。○●●○○，●○○○■。

朝鮮前期 元好問『遺山樂府』의 受容에 대하여:

金時習의 예를 중심으로

金時習	生平豪氣，如今添却遊，滄波萬頃何遼廓。都是一胸襟，儘教伊吞吐舒縮。 ○○○●，○○○●○○，○○●●○○■。○○●○○，●○○○●○■。
賀鑄	將發。畫樓芳酒，紅淚清歌，頓成輕別。已是經年，杳杳音塵都絕。 ○■。●○○●○○，◎◎◎○，◎◎◎■。●●○○，◎●◎○○■。
蔡松年	離索。曉來一枕餘香，酒病賴花醫卻。灑灑金樽，收拾新愁重酌。 ○■。●○○●○○，●●●○○■。●○○○，○●○○○○■。
元好問	羈旅。山中父老相逢，應念此行良苦。幾許虛名，誤卻東家雞黍。 ○■。○○●●○○，○●●○○■。●●○○，●●○○○○■。
金時習	窶尊斲石團圓，都是舊時蹤跡。萬古相傳，一任風磨苔剝。 ○○●●○○，○●●○○■。●●○○，●●○○○○■。
賀鑄	欲知方寸，共有幾許清愁，芭蕉不展丁香結。枉望斷天涯，兩厭厭風月。 ◎○○●，◎◎◎●○○，◎○○●○○■。◎●●○○，●○○○○■。
蔡松年	片帆雲影，載將無際關山，夢魂應被楊花覺。梅子雨絲絲，滿江干樓閣。 ●○○●，●○○●○○，●○○●○○■。○○●○○，●○○○○■。
元好問	漫漫長路，蕭蕭兩鬢黃塵，騎驢漫與行人語。詩句欲成時，滿西山風雨。 ○○○●，○○●●○○，○●●●○○■。○○●○○，●○○○○■。
金時習	流年如許，跳丸歲月蹉跎，前人視我今猶昔。慷慨發長歌，滿沙汀飛鴨。 ○○○●，○○●●○○，○●●●○○■。○○●○○，●○○○○■。

다음으로, 「洞仙歌」는 『欽定詞譜』에 의하면 唐教坊曲名으로 이 調는 令詞과 慢詞가 있다. 令詞는 83자에서 93자, 모두 35수. 康與之 詞는 「洞仙歌令」, 潘昉 詞는 「羽仙歌」, 袁易 詞는 「洞仙詞」라고 이름하였다. 『宋史』 「樂志」에서는 「洞中仙」이라고 이름하였는데, 그 注에 林鐘商調라고 하고 또 歇指調라고 하였다. 『金詞』의 注에서는 大石調라고 하였다. 慢詞는 118자에서 126자, 모두 5수. 柳永 『樂章集』 「嘉景」 詞의 注에서 般涉調라고 하고 「乘興閑泛蘭舟」 詞의 注에서 仙呂調라고 하고 「佳景留心慣」 詞의 注에서 中呂調라고 하였다. 張緘 『詩餘圖譜』를 살펴보면, 前段 6句 3韻, 後段 7句 3韻, 前後段 第3句 모두 7字, 第4句 모두 9字, 前段 結句 6字, 後段 結句 9字로, 이 令詞가 正體이다. 간혹 攤破·添字句·添韻이 있는데 모두 여기에서 나온 것이며, 譜의 句讀는 모두 이것에 의거한다.¹⁴

『欽定詞譜』에서 正體로 든 蘇軾의 「洞仙歌」는 雙調83字, 前段 6句 3仄韻, 後段 7句 3仄韻이다.

冰肌玉骨，自清涼無汗。水殿風來暗香滿。

◎○○●，◎◎○○■。◎●○○●○■。

繡簾開、一點明月窺人，人未寢，敲枕釵橫鬢亂。

●○○、◎●◎●○○，◎◎●，◎●◎◎◎■。

起來攜素手，庭戶無聲，時見疏星渡河漢。

◎◎◎◎●，◎●○○，◎●○○●○■。

試問夜如何、夜已三更，金波淡、玉繩低轉。

●◎◎◎◎、◎●○○，◎◎●、◎○○■。

但屈指、西風幾時來，又不道、流年暗中偷換。

◎◎◎、◎◎●○○，◎◎●、○○●○○■。

『欽定詞譜』는 宋人이 「洞仙歌」의 令詞에 填詞한 것은 句讀과 韻脚에 서로 異同이 있는데 오직 蘇軾과 辛棄疾의 兩體은 填詞한 사람이 가장 많으며,¹⁵ 辛棄疾의 詞는 蘇軾의 詞와 동일한데 다만 前段 第4句가 上5 下4 句讀인 것이 조금 다르다고 하였다.¹⁶ 그런데 元好問의 「洞仙歌」는 蘇軾과 辛棄疾의 詞體가 아닌 京鐘의 詞體를 따르고 있다. 『欽定詞譜』에 따르면 이 詞體는 雙調 85字, 前段 6句 3仄韻, 後段 7句 4仄韻으로, 前段은 辛棄疾의 詞와 같고 後段은 阮閱은 詞와 같다. 京鐘의 「洞仙歌」와 원호문 「洞仙歌」 2수 중 제1수를 나란히 들면 다음과 같다.

京鐘

東皇著意，妙出妝春手。點綴名花勝於繡。

○○●●，●●○○■。●●○○●○■。

向魚鳧國裏，琴鶴堂前，仍共賞，蜀錦堆紅炫晝。

●○○●●、○○○○，○○●，●●○○●■。

妖嬈真豔豔，儘是天然，莫恨無香欠檀口。

○○○●●，●●○○，●●○○●○■。

幸今年風雨、不苦摧殘，還肯爲、遊人再三留否。

●○○○●、●●○○，○○●、○○●○○■。

算魏紫姚黃、號花王，若定價收名、未應居右。

●●●○○、●○○，●●●○○、●○○■。

元好問

靑錢白壁，自買愁腸繞。更恨歡狂負年少。

○○●●，●●○○■。●●○○●○■。

記陽關圖上、尊酒留連，兒女淚，輸與閒人坐釣。

●○○○●、○●○○，○●●，○●○○●■。

茂陵多病後，懶盡琴心，無複求凰與同調。

●○○●●，●●○○，○●○○●○■。

似清風古殿、風動幡搖，晴晝永、惟有龕燈靜照。

●○○●●、○●○○，○●●、○●○○●■。

雙胡蝶飛來、澹無情，問牆脚戎葵、爲誰凝笑？

○○●○○、●○○，●○●○○、●○○■。

마찬가지로 元好問의 「洞仙歌」은 京鎧의 「洞仙歌」과 平仄에서 약간 차이를 보이지만 蘇軾의 「洞仙歌」를 참고하면 平仄을 모두 허용하는 곳이다. 김시습이 鏡浦를 주제로 지은 「洞仙歌(鏡浦)」는 다음과 같다. 김시습의 『梅月堂集』에 전하는 「洞仙歌(鏡浦)」는 下段의 제 3 구에서 4자가 缺落되어 있다.

靑樽白髮，畫舸汀洲遠。嫌却皇華負年少。

○○●●，●●○○■。○●○○●○■。

記前朝舊事、一段風流，都是夢，輸與人間一笑。

●○○●●、●●○○，○●●，○●○○●■。

琉璃千頃碧，極浦孤山，閑坐釣□□□□。(4字缺)

○○○●●，●●○○，○●●

更玉輦金輿、法駕東巡，絲管鬧、羽葆幢旗前導。

●●●○○、●●○○，○●●、●●○○○■。

作千古閑談、付漁樵，問亭畔雲霞、爲誰繚繞？

●○●○○、●○○，●○●○○、●○○■。

김시습의 「洞仙歌」는 京鏜과 元好問의 체식을 따르고 있지만 일부 仄이 다른 곳이 발견된다. 이것은 蘇軾의 「洞仙歌」를 참고하면 仄仄을 모두 허용하는 곳이므로 문제될 것은 없지만, 원호문의 詞를 모범으로 하면서 평측을 맞추지 못한 것인지, 혹은 蘇軾의 詞를 함께 참고했던 것인지는 불분명하다. 다만 여기서 더욱 주의해야 할 점은 원호문 「洞仙歌」에서 사용된 어휘를 여러 곳에서 답습하고 있다는 점이다. 원호문 「洞仙歌」는 상단 제1구를 ‘靑錢白璧’으로 하고 제3구를 ‘負年少’으로 마쳤는데, 김시습은 상단 제1구를 ‘靑樽白髮’으로 시작하여 제3구를 마찬가지로 ‘負年少’으로 마치고 있다. 또한 제4구를 두 작품이 모두 ‘記’로 시작하고 있으며, 상단의 마지막 구를 원호문은 ‘輸與閒人坐釣’로 하고 김시습은 그와 비슷하게 ‘輸與人間一笑’로 하고 있다. 하단의 마지막 2구를 원호문은 ‘問牆角戎葵，爲誰凝笑’라고 하여 질문으로 작품을 끝맺었는데, 김시습 역시 ‘問亭畔雲霞，爲誰繚繞’라고 하여 질문으로 작품을 끝맺고 있다. 김시습의 이 詞는 경포대를 바라보며 前朝의 옛 일이 모두 허사가 되고 말았다는 무상감을 주제로 하고 있어 전반적인 내용은 원호문의 詞와 같지 않지만, 원호문의 詞에서 적지 않은 영향을 받았음을 알 수 있다.

蘇軾	冰肌玉骨，自清涼無汗。水殿風來暗香滿。 ◎○○●，◎○○○■。◎●○○●○■。
京鏜	東皇著意，妙出妝春手。點綴名花勝於繡。 ○○●●，●●○○■。●●○○●○■。
元好問	靑錢白璧，自買愁腸繞。更恨歡狂負年少。 ○○●●，●●○○■。●●○○●○■。
金時習	靑樽白髮，畫舸汀洲遠。嫌却皇華負年少。 ○○●●，●●○○■。○●○○●○■。
蘇軾	繡簾開、一點明月窺人，人未寢，敲枕釵橫鬢亂。 ●○○、◎●◎●○○，◎◎●，◎●◎○○■。
京鏜	向魚鳧國裏，琴鶴堂前，仍共賞，蜀錦堆紅炫晝。 ●○○●●、○●○○，○●●，●●○○●○■。
元好問	記陽關圖上，尊酒留連，兒女淚，輸與閒人坐釣。 ●○○○●、○●○○，○●●，○●○○●○■。
金時習	記前朝舊事，一段風流，都是夢，輸與人間一笑。 ●○○●●、●●○○，○●●，○●○○●○■。
蘇軾	起來攜素手，庭戶無聲，時見疏星渡河漢。 ◎◎○○●，◎●○○，◎●○○●○■。

朝鮮前期 元好問『遺山樂府』의 受容에 대하여:

金時習의 예를 중심으로

京鐘	妖嬈真豔豔，儘是天然，莫恨無香欠檀口。 ○○○●●，●●○○，●●○○○●■。
元好問	茂陵多病後，懶盡琴心，無複求凰與同調。 ●○○●●，●●○○，○●○○○●●■。
金時習	琉璃千頃碧，極浦孤山，閑坐釣□□□□。(4字缺) ○○○●●，●●○○，○●●
蘇軾	試問夜如何、夜已三更，金波淡、玉繩低轉。 ●◎◎◎◎、◎●○○，◎◎●、◎◎◎■。
京鐘	幸今年風雨、不苦摧殘，還肯爲、遊人再三留否。 ●○○○●、●●○○，○●●、○○●○○■。
元好問	似清風古殿、風動幡搖，晴晝永、惟有龕燈靜照。 ●○○●●、○●○○，○●●、○●○○●■。
金時習	更玉輦金輿、法駕東巡，絲管鬧、羽葆幢旗前導。 ●●●○○、●●○○，○●●、●●○○○■。
蘇軾	但屈指、西風幾時來，又不道、流年暗中偷換。 ◎◎◎、◎◎●○○，◎◎●、○○●○○■。
京鐘	算魏紫姚黃、號花王，若定價收名、未應居右。 ●●●○○、●○○，●●●○○、●○○■。
元好問	雙胡蝶飛來、澹無情，問牆脚戎葵，爲誰凝笑? ○○●○○、●○○，●●○○○，●○○■。
金時習	作千古閑談、付漁樵，問亭畔雲霞，爲誰繚繞? ●○○○○、●○○，●●○○○，●○○■。

다음으로 「滿庭芳」은 『欽定詞譜』에 의하면 平韻과 仄韻의 兩體가 있으며, 이 調는 晏幾道와 周邦彥의 詞를 正體로 한다. 晏幾道の 詞는 雙調 95字, 前後段 各10句, 4平韻, 周邦彥의 詞는 雙調 95字, 前段 10句 4平韻, 後段 11句 5平韻이다. 黃公度 詞에서 글자 수를 줄이거나, 程垓·趙長卿·元好問의 詞에서 글자 수를 늘린 것, 無名氏의 사에서 轉調한 것은 모두 變體이다. 이 晏幾道 詞는 換頭句에서 短韻을 감추고 있지 않은데, 宋·元의 사람들이 이와 같이 填詞한 경우도 많다.¹⁷ 元好問의 詞는 換頭句에서 短韻을 감춘 周邦彥의 詞에 填詞하였다. 晏幾道, 周邦彥, 元好問의 詞를 순서대로 들면 다음과 같다.

晏幾道

南苑吹花，西樓題葉，故園歡事重重。憑欄秋思，閑記舊相逢。

◎●○○，◎○○●，◎○○●○□。◎○○●，◎●●○□。

幾處歌雲夢雨，可憐便、流水西東。別來久，淺情未有，錦字繫征鴻。
 ◎●◎○○●，◎◎●、◎●○○□。◎○○，◎○○●，◎●●○○□。
 年光還少味，開殘檻菊，落盡溪桐。漫留得，樽前淡月西風。
 ◎○○●●，◎○○●，◎●○○□。●◎◎，◎○○●○○□。
 此恨誰堪共說，清愁付、綠酒杯中。佳期在，歸時待把，香袖看啼紅。
 ◎●◎○○●，◎◎●、◎●○○□。○○●，◎○○●，◎●●○○□。

周邦彥

風老鶯雛，雨肥梅子，午陰嘉樹清圓。地卑山近，衣潤費爐煙。
 ○●○○，●○○●，●○○●○○□。●○○●，○●●○○□。
 人靜鳥鶯自樂，小橋外、新綠濺濺。憑欄久，黃蘆苦竹，擬泛九江船。
 ○●○○●●，●○○、○●○○□。○○●，○○●●，●●●○○□。

年年。如社燕，飄流瀚海，來寄修椽。且莫思身外，長近樽前。
 ○□。○●●，○○●●，○●○○□。●●○○●，○●○○□。
 憔悴江南倦客，不堪聽、急管繁弦。歌筵畔，先安枕簟，容我醉時眠。
 ○●○○●●，●○○、●●○○□。○○●，○○●●，○●●○○□。

元好問

妝鏡韶華，牙籤名品，慣看培養經年。何年曾見，槁葉散芳妍？
 ○●○○，○○○●，●○○●○○□。○○○●，●●●○○□。
 知是毗耶坐客，三生夢、猶有情緣。薰香手，融霞暈雪，來占百花前。
 ○●○○●●，○○●、○●○○□。○○●，○○●●，○●●○○□。

嫣然。誰爲笑，珠圍翠繞，且共留連。待詩中偷寫，畫裏真傳。
 ○□。○●●，○○●●，●●○○□。●○○○●，●●○○□。
 繡帽擁霜凝紫塞，瓊肌瑩、春滿溫泉。新聲在，梁園異事，並記玉堂仙。
 ●●○○○●●，○○●、○●○○□。○○●，○○●●，●●●○○□。

그런데 元好問의 詞는 換頭句에 短韻을 감춘 周邦彥의 詞에 填詞하고 있으면서 下段의 제7구가 7자로 되어 있어, 하단 제7구가 6자인 周邦彥의 詞보다 1자가 많다. 周邦彥의 詞를 正體로 하는 變體 중에

朝鮮前期 元好問『遺山樂府』의 受容에 대하여:

金時習의 예를 중심으로

서 하단 제7구가 7자인 것은 『欽定詞譜』에는 보이지 않는다. 『欽定詞譜』에 수록되어 있는 元好問의 다른 詞는 雙調 96字, 前後段 각 10句, 4平韻으로, 晏幾道の 詞와 같되, 前後段 第4·5句가 모두 4字·5字로 되어 있고 後段 第8句에 襯字 하나가 첨가된 것이 다르다. 하지만 『遺山樂府』 수록의 元好問 詞는 이 詞와 체식을 따르고 있지 않다. 그런데 金時習의 사는 제7구가 7자인 『遺山樂府』 수록의 元好問의 詞體를 그대로 모방하고 있다. 金時習의 「滿庭芳(華表柱)」는 다음과 같다.

人世繁華，倏如星轉，暫時笑語悲歡。千年城郭，民物遞凋殘。
○○○○，●○○●，●○○●○□。○○○●，○●●○□。
常見紅塵萬丈，令人老、苦樂千般。唯華表，撐空獨立，長閱古今顏。
○○○○●●，●○○、●●○□。○○●，○○●●，○●●○□。

縱橫城裏道，榆柳蔭傍，行旅盤桓。逢鄉人指點，何代幡竿。
●○○●●，○●●○，○●○□。○○○●●，○●○□。
牛礪角樵章擊火，苔花暈碧點成斑。遼東客，何年化鶴，來語歎人間。
○●●○○●●，○○●●●○□。○○●，○○●●，○●●○□。

金時習은 元好問의 「滿庭芳」을 체식으로 하였지만, 元好問의 詞가 하단의 換頭句에서 ‘嫣然’ 이라고 하여 短韻을 감춘 것과 달리 압운을 넣지 않았다. 또한 元好問의 詞는 하단 제 8 구 중간에 讀를 끊었지만 金時習의 사는 讀를 끊지 않았다.

이어서 「八聲甘州」는 『欽定詞譜』에 따르면, 『碧雞漫志·甘州』에 仙呂調는 曲破, 八聲, 慢, 令이 있다고 나오는데, 이 調는 前後段이 8韻이어서 「八聲」이라고 하며, 곧 慢詞로 「甘州遍」의 曲破와 「甘州子」의 令詞와는 다른 것이라고 하였다.¹⁸ 또한 柳永의 아래 詞가 正體이며 張炎의 詞에서 글자를 더한 것이나 劉過 이하 다섯 詞에서 글자 수를 줄인 것은 모두 變體이다.¹⁹ 柳永의 詞는 雙調 97字, 前後段 각 9句, 4平韻이다. 『欽定詞譜』에 인용된 柳永의 詞는 다음과 같다.

對瀟瀟暮雨灑江天，一番洗清秋。漸霜風淒緊，關河冷落，殘照當樓。
●○○○●●○○，○○●○□。●○○○●，○○○●，○●○□。

是處紅衰翠減，苒苒物華休。惟有長江水，無語東流。

◎●◎○○●，◎●●○○□。◎●◎○○●，◎●○○□。

不忍登高臨遠，望故鄉渺渺，歸思難收。歎年來蹤跡，何事苦淹留。

◎●◎○○●，●◎○○●，◎●○○□。●◎○○●，◎●●○○□。

想佳人、妝樓長望，誤幾回、天際識歸舟。爭知我、倚欄杆處，正恁凝愁。

●◎◎、◎●◎●，●◎○、◎●●○○□。○○●、◎○○●，◎●○○□。

『遺山樂府』에 수록된 元好問의 詞는 2수로, 2수 모두 柳永의 사체를 따르고 있으나 제1수는 상단 제5구가 柳永의 詞가 4자로 되어 있는 것과 달리 5자로 되어 있다. 또한 柳永의 詞는 상단 제 1 구가 ‘仄中平中仄仄平平’ 인데 비해 元好問의 2수는 모두 ‘仄平平平平仄平平’ 으로 되어 있고, 하단 제6구가 ‘仄中中中仄仄仄’ 인데 비해 ‘仄仄平平平平仄仄’ 으로 되어 있어 平仄이 같지 않다. 元好問의 「八聲甘州」 2수를 들면 다음과 같다.

許君祠、層崖上崢嶸，幽林入清深。坐嵩丘少室，風煙濃淡，百態變晴陰。

●○○、○○●○○，○○●○○□。●○○●●●，○○○●●，●●●○○□。

山下一溪流水，不受是非侵。寂寞懸瓢地，黃屋無心。

○○○○●●●，●●●○○□。●●○○●●，○●○○□。

木杪巘岒石塚，見人間幾度，夕鼎朝鍤。問五兵誰作，天地更生金。

●●○○●●●，●○○●●●，●●○○□。●○○○○●，●●●○○□。

百年來、神州萬里，望浮雲、西北淚沾襟。青山好、一尊未盡，且共登臨。

●○○、○○●●●，●○○、○●●○○□。○○●、●○○●●，●●○○□。

又

玉京巖龍香海南來，霓裳月中傳。有六朝圖畫，朝朝瓊樹，步步金蓮。

●○○○○●○○，○○●○○□。●●○○●●，○○○●●，●●●○○□。

明滅重簾畫燭，幾處鎖嬋娟。塵暗秦王女，秋扇年年。

○○○○●●●，●●●○○□。○●○○●●，○●○○□。

朝鮮前期 元好問『遺山樂府』의 受容에 대하여:

金時習의 예를 중심으로

一枕繁華夢覺，問故家桃李，何許爭妍。便牛羊丘壘，百草動蒼煙。
 ●●○○●●，●●○○●，○○○□。●○○○●，●●●○○。
 更誰知、昭陽舊事，似天教、通德見伶玄。春風老、擁鬢顰黛，寂寞燈前。
 ●○○、○○●●，●○○、○●●○○□。○○●、●○○●，●●○○□。

金時習의 「八聲甘州(白沙汀)」은 『遺山樂府』에 수록된 元好問의 2수 중 상단 제5구가 4자로 되어 있는 제2수를 따랐다. 金時習의 「八聲甘州(白沙汀)」은 다음과 같다.

金時習, 「八聲甘州(白沙汀)」
 海無垠沙汀白晴光，濛濛射殘輝。見雙雙白鷗，浮沈波際，咬嘎爭飛。
 ●○○○○●○○，○○●○○□。●○○○●，○○○●，●●○○□。
 何處漁舟未返，長笛一聲歸。不管人間世，心事相違。
 ○●○○●●，○●●○○□。●●○○●，○●○○□。

我本風流宕客，謝浮生毀譽，得失幾微。探江湖風月，到處更依依。
 ●●○○●●，●○○●●，●●○○□。●○○○●，●●●○○□。
 望那邊、滄波萬頃，顧這般、身影淚沾衣。韶光暮底心獻賦，獨侍丹墀。
 ●●○、○○●●，●●○、○●●○○□。○○●●○○●●，●●○○□。

그런데 金時習의 「八聲甘州(白沙汀)」는 앞서 언급한, 柳永의 詞와 元好問의 詞에서 平仄이 다른 두 곳은 元好問 詞의 平仄을 모두 따르되, 可平可仄의 자리에 있어서는 元好問의 제1수를 거의 따르고 있다. 곧, 金時習은 『遺山樂府』 수록 元好問 「八聲甘州」 제2수의 詞體를 바탕으로 하면서 제1수를 따라 平仄과 押韻을 하였음을 알 수 있다. 平仄과 押韻의 사항을 표로 보이면 다음과 같다.

柳永	對瀟瀟暮雨灑江天，一番洗清秋。漸霜風淒緊，關河冷落，殘照當樓。 ●◎◎◎●●○○，◎◎◎○○□。●◎◎◎●，◎◎◎●，◎●○○□。
元好問1	許君祠層崖上崢嶸，幽林入清深。坐嵩丘少室，風煙濃淡，百態變晴陰。 ●○○○○●○○，○○○○□。●○○●●，○○○●，●●●○○□。
元好問2	玉京巖龍香海南來，霓裳月中傳。有六朝圖畫，朝朝瓊樹，步步金蓮。 ●○○○○●○○，○○○○□。●○○○○，○○○●，●●○○□。

金時習	海無垠沙汀白晴光，濛濛射殘輝。見雙雙白鷗，浮沈波際，咬嘎爭飛。 ●○○○●○○，○○●○□。●○●●●，○○○●，●●●○□。
柳永	是處紅衰翠減，苒苒物華休。惟有長江水，無語東流。 ◎●◎○◎●，◎●●○□。◎●◎○●，◎●●○□。
元好問1	山下一溪流，不受是非侵。寂寞懸瓢地，黃屋無心。 ○●○○●●●，●●●○□。●●●○●，○●●○□。
元好問2	明滅重簾畫燭，幾處鎖嬋娟。塵暗秦王女，秋扇年年。 ○●○○●●●，●●●○□。○●○○●，○●○○□。
金時習	何處漁舟未返，長笛一聲歸。不管人間世，心事相違。 ○●○○●●●，○●●○□。●●○○●，○●○○□。
柳永	不忍登高臨遠，望故鄉渺渺，歸思難收。歎年來蹤跡，何事苦淹留。 ◎●◎○◎●，◎●◎◎●，◎●○□。●◎○◎●，◎●●○□。
元好問1	木杪嶺岒石塚，見人間幾度，夕鼎朝鋸。問五兵誰作，天地更生金。 ●●○○●●●，●○●●●，●●○□。●○○○●，●●●○□。
元好問2	一枕繁華夢覺，問故家桃李，何許爭妍。便牛羊丘壘，百草動蒼煙。 ●●○○●●●，●●○○●，○●○□。●○○○●，●●●○□。
金時習	我本風流宕客，謝浮生毀譽，得失幾微。探江湖風月，到處更依依。 ●●○○●●●，●○○●●，●●○□。●○○○●，●●●○□。
柳永	想佳人、妝樓長望，誤幾回、天際識歸舟。爭知我、倚欄杆處，正恁凝愁。 ●◎◎、◎●◎●，●◎○、◎●●○□。○○●、◎○◎●，◎●●○□。
元好問1	百年來、神州萬里，望浮雲、西北淚沾襟。青山好、一尊未盡，且共登臨。 ●○○、○●●●，●○●、○●●○□。○○●、●○●●，●●●○□。
元好問2	更誰知、昭陽舊事，似天教、通德見伶玄。春風老、擁鬢顰黛，寂寞燈前。 ●○○、○●●●，●○●、○●●○□。○○●、●○●●，●●●○□。
金時習	望那邊、滄波萬頃，顧這般、身影淚沾衣。韶光暮、底心獻賦，獨侍丹墀。 ●●○、○●●●，●●○、○●●○□。○○●、●○●●，●●●○□。

마지막으로 「江城子」는 『欽定詞譜』에 따르면 唐詞는 單調로 韋莊의 詞를 위주로 하고 나머지는 모두 韋莊의 詞에 비추어 添字한 것인데, 宋人에 이르러 처음으로 雙調를 지었다고 한다.²⁰ 元好問과 金時習의 詞는 모두 雙調로, 蘇軾의 詞를 體式으로 하였다. 蘇軾의 詞는 다음과 같다.

鳳凰山下雨初晴。水風清。晚霞明。一朵芙蓉、開過尚盈盈。
◎○◎●●○□。●○□。●○□。◎●◎○、◎●●○□。
何處飛來雙白鷺。如有意。慕娉婷。
◎●◎○○●●。○◎●。●○□。

朝鮮前期 元好問『遺山樂府』의 受容에 대하여:

金時習의 예를 중심으로

忽聞江上弄哀箏。苦含情。遣誰聽。煙斂雲收、依約是湘靈。
 ◎○○●●○□。●○□。●○□。◎●◎○、◎●●○□。
 欲待曲終尋問取。人不見。數峰青。
 ◎●◎○○●●。○◎●。●○□。

『欽定詞譜』에 따르면 이 詞의 兩段은 모두 韋莊의 體式에 填詞한 것으로, 안쪽 第4句의 平仄은 張泌 ‘飛絮落花’ 句의 體式에 填詞한 것이다. 宋詞를 자세히 살펴보면 可平可仄의 異同이 심하지 않은데, 오직 秦觀 詞의 前結 ‘雖同處, 不同枝’ 과 後結 ‘重相見, 是何時’, 그리고 方嶽 詞의 前段 第4句에서 ‘幾雨幾晴, 做得這些春’ 라고 하고 後段 第4句에서 ‘吹得酒痕, 如洗一番新’ 라고 한 것은 平仄이 약간 다르다. 나머지는 다만 七言句의 第1字·第3字, 9言句의 第1字·第5字가 대개 구애되지 않는다. 黃庭堅에게 仄韻 「江城子」 詞가 있는데, 그 字句는 蘇軾 詞와 동일하며, 오직 韻腳을 仄聲으로 고쳤을 뿐이다.²¹

『遺山樂府』에는 「江城子」 14수가 실려 있는데 金時習의 「江城子(洞山館)」은 이 중 제 8수에 크게 영향을 받고 있다. 元好問의 詞는 제목에 “嵩山中作” 이라는 주석이 달려 있다. 元好問과 金時習의 「江城子」를 나란히 들면 다음과 같다.

元好問, 「江城子」

衆人皆醉屈原醒，笑劉伶。酒爲名。不道劉伶、久已笑螟蛉。
 ●○○●●○□，●○□。●○□。●●○○、●●●○□。
 死葬糟邱殊不惡，緣底事，赴清冷。
 ●●○○○●●，○●●，●○□。

醉鄉千古一升平，物忘情。我忘形。相去羲皇、不到一牛鳴。
 ●○○●●○□，●○□。●○□。○●○○、●●●○□。
 若見三閭憑寄語，尊有酒，可同傾。
 ●●○○○●●，○●●，●○□。

金時習, 「江城子(洞山館)」

海濱孤館接滄溟。倚風櫺。望蓬瀛。浩渺滄波、數點白鷗輕。

●○○●●○□。●○□。●○□。●●○○、●●●○□。

物外浮沈渠似我，渠不競，我忘形。

●●○○○●●，○●●，●○□。

異鄉千里影伶俚。鬢星星。眼青青。怪底乾坤、身世一長亭。

●○○●●○□。●○□。●○□。●●○○、●●●○□。

若見安期煩寄語，千日酒，與君傾。

●●○○○●●，○●●，●○□。

元好問의 「江城子」는 술을酷好하였던 劉伶을 소재로 하여, 醉鄉이야말로 영원한 태평성세이자 太古의 순박함에 도달할 수 있는 곳으로, 만약 屈原을 만난다면 그와 함께 술잔을 기울이고 싶다는 말을 그에게 전해달라고 하였다. 반면 金時習의 「江城子」는 洞山館에서 바람부는 난간에 기대어 홀로 바다를 바라보면서 멀리 바다 위의 갈매기들이 物外에서 浮沈하고 있는 것이 자신의 형체를 잊고서 物外에서 노닐고 있는 자신과 같다고 하였다. 또한 異鄉 천리에서 홀로 외로운 그림자를 드리우고 있으니 백발이 되었어도 눈동자만은 푸르디 푸르는데, 어찌하여 하나의 長亭과 같은 天地 간에 부처 사는 신세가 되었는지, 만약 安期生을 만난다면 千日酒를 함께 기울이고 싶다고 전해달라고 하였다.

두 작품은 함께 술을 주요 소재로 하면서 『莊子』의 ‘忘情’과 ‘忘形’의 개념을 사용하고 있다는 점, 하단의 제5~7구를 각각 “若見三閭憑寄語，尊有酒，可同傾”과 “若見安期煩寄語，千日酒，與君傾”라고 하여 비슷한 구문과 내용을 마무리를 짓고 있다는 점에서 매우 닮아 있다. 하지만 元好問에 있어 술은 醉鄉에 들어 物我一體의 경지에 도달하게 하는 것이지만, 金時習에게 있어 술이란 異鄉에서의 고독감을 잊고 세상의 얽매임에서 자신을 벗어나게 하는 것으로 그려져 있다. 金時習은 천지간의 방랑자가 되어 바닷가의 백구들과 짝하면서 나 자신의 형체를 잊는 ‘忘形’의 경지에 도달하였지만, 자신의 그림자처럼 되어 끝내 벗어날 수 없는 내면 깊은 곳의 고독감과, 자신이 부처 살고 있기에 살아있는 한 영원히 벗어날 수 없는 보이지 않는 세상의 얽매

朝鮮前期 元好問『遺山樂府』의 受容에 대하여:

金時習의 예를 중심으로

임을, 安期生과 함께 千日酒를 기울임으로써 모두 벗어던지고서 영원한 자유를 얻고자 하였다.

4. 나오며

이상 본고는 元好問『遺山樂府』이 조선에서 간행된 사실과 그 영향을 金時習의 사례를 중심으로 살펴 보았다.

李宗準은 『遺山樂府』를 晉州에서 간행할 때 작성한 「遺山樂府詩跋」에서 陳師道와 李清照가 蘇軾의 詞 작품이 詩로 詞를 지은 것 [以詩爲詞] 이라고 비평한 사실, 詩文은 平仄만을 구분하지만 詞는 五音과 五聲을 구분하고 六律을 구분하여, 清濁과 輕重이 모두 조화로운 후에야 入腔할 수 있다는 사실, 조선인이 詞를 잘 알지 못하는 것은 중국인들이 高麗歌謠를 알지 못하는 것과 같은 것이므로 조선 문인으로서 詞 문학을 알지 못하는 것이 부끄러움이 되지 않는다는 사실 등을 강조하였다. 이는 거꾸로, 조선 문인으로서 詞를 능수능란하게 지은 이가 매우 드물었음을 말해 준다.李宗準은 오직 李齊賢만이 忠宣王을 入侍하여 閻復·趙孟頫 등 중국의 學士들과 從游하면서 사를 지을 줄 알았으며, 이는 東方에서 매우 드문 사례가 된다고 하였다.

고려말 조선초의 인물로서 한국에서 詞 작품을 남긴 문인으로는 李齊賢, 李穀, 鄭誦, 權近, 權遇, 金時習, 崔演, 金止男, 許筠, 金佺 등이 있으며 본고는 이 중 金時習의 『梅月堂集』 권13 「關東日錄」에 수록된 사 작품을 대상으로 元好問『遺山樂府』와의 관계를 검토하였다.

金時習 「關東日錄」에는 「石州慢(寒松亭)」, 「洞仙歌(鏡浦)」, 「滿庭芳(華表柱)」, 「八聲甘州(白沙汀)」, 「江城子(洞山館)」 등 5편의 詞 작품이 실려 있는데, 이 5편의 수록 순서는 元好問『遺山樂府』 卷中の 첫 번째 작품부터 다섯 번째 작품까지의 수록 순서와 일치한다. 곧 金時習은 元好問『遺山樂府』의 편차에 따라 일종의 和韻의 형식으로 詞 작품을 지었음을 알 수 있으며, 「關東日錄」에는 본디 5편보다 많은 詞 작품이 수록되어 있었을 것을 추정하게 한다.

金時習의 「石州慢(寒松亭)」은 『欽定詞譜』에서 正體로 삼은 賀鑄의 詞體를 따르지 않고 元好問 「石州慢」을 따라 平仄을 맞추었으며, 「洞仙歌(鏡浦)」는 元好問 「洞仙歌」에서 사용된 어휘와 구문을 여러 곳

에서 답습하고 있다. 또한 元好問의 「滿庭芳」은 周邦彥의 詞를 正體로 하면서도 하단 제7구가 7자로 되어 있는데 金時習 역시 「滿庭芳(華表柱)」에서 元好問의 이 體를 그대로 본받았으며, 「八聲甘州(白沙汀)」에서는 『遺山樂府』 수록 元好問 「八聲甘州」 제2 수의 사체를 바탕으로 하면서 제1수를 따라 平仄과 押韻을 하였다.

한편, 金時習 「江城子(洞山館)」는 『遺山樂府』에 수록된 「江城子」 14수 중 제8수에 크게 영향을 받았다. 두 작품은 함께 술을 주요 소재로 하면서 『莊子』의 ‘忘情’ 과 ‘忘形’ 의 개념을 사용하고 있다는 점, 하단의 제5~7구를 비슷한 구문과 내용을 마무리를 짓고 있다는 점에서 매우 닮아 있다. 다만 주제에 있어, 元好問은 술을 마심으로써 物我가 一體가 되는 醉郷에 들고자 함을 노래하였지만, 金時習은 술을 마심으로써 異郷에서의 고독감과 세상의 얽매임을 벗어던지고서 영원한 자유를 얻고자 하였다. 곧, 金時習은 元好問 詞의 詞體와 소재 등을 참고하여 詞를 지으면서도 이를 點化하여 자신만의 詞 세계를 구축해 나갔다고 할 수 있다.

『유산악부』 외에 원호문의 문집 『元遺山集』은 傳本이 보고된 바 없고 그 독서 흔적 역시 직접 드러난 것은 없다. 하지만 앞서 보았듯이 고려말에는 우리나라에 수입되어 권근을 비롯한 일정한 범위의 문인들에 의해 향유되고 시문 창작에 활용되고 있었으며, 그러한 사실은 김시습의 시 중에 원호문의 시에서 보이는 시어나 시적 표현을 사용한 구절이 종종 확인되는 점에서도 알 수 있다. 이는 조선 전기의 서적 출판이 원대의 출판 문화에 큰 영향을 받은 것과 마찬가지로 조선 전기의 문단 역시 금원대의 문학으로부터 적지 않은 영향을 받고 있었음을 시사해 준다. 다만 이러한 문학 수용의 양상은 조선 전기 문인들의 문학 작품에 숨겨진 금원대 시문의 소재나 시어, 표현이나 의상 등을 통해 거꾸로 확인할 수 밖에 없다. 조선 전기의 문단에 끼친 금원대 문학의 향유 양상과 문학 창작에서의 활용 양상에 대해서는 앞으로의 과제로 삼고자 한다.

본고는 「조선전기 元好問 『遺山樂府』의 수용에 대하여: 金時習의 예를 중심으로」, 『漢文學報』 45 (우리漢文學會, 2021.12.31. pp. 43~78) 에도 수록되어 있다.

朝鮮前期 元好問『遺山樂府』의 受容에 대하여:

金時習의 예를 중심으로

참고문헌

• 1차 자료 및 논저

元好問, 『遺山樂府』 (연세대학교 도서관 소장본, 請求記號: 고서(귀) 293 0)

元好問, 『遺山樂府』 (연세대학교 도서관 소장본, 請求記號: 고서(귀) 810 0)

元好問, 『遺山樂府』 (하버드대학 하버드-엔칭도서관 소장본, 請求記號: TK 5237.5 1147)

金時習, 『梅月堂集』, 亞細亞文化社 影印, 1973.

김진경, 『韓國 辭賦의 史的 展開에 관한 研究』, 고려대 국어국문학과 박사학위논문, 2005.

尹浩鎭, 「中國의 詩歌理論이 韓國의 漢詩論에 미친 影響: 晉州本 『遺山樂府』의 跋을 中心으로」, 『東方漢文學』 13, 동방한문학회, 1997.

車柱環, 「遺山樂府 연구」. 『동방학지』 17, 연세대학교 국학연구원, 1976.

車柱環, 「韓國詞文學研究」, 『亞細亞研究』 15-19, 고려대 아세아문제연구소, 1964-1966.

• 데이터베이스

국사편찬위원회 제공 조선왕조실록 DB (<http://sillok.history.go.kr/main/main.do>)

한국고전번역원 제공 한국문집총간 DB (<https://db.itkc.or.kr/>)

搜韻網 (<https://sou-yun.cn/index.aspx>)

注

- 1 南孝溫,「冷話」,『秋江集』卷7 雜著:東峯金時習,讀書不拘文義,見大旨,味大義而已。余嘗作「征夫怨」十絕,和元遺山詩,其一篇曰:“白草凋霜月滿空,年年鞍馬任西東。令嚴萬幕平沙夜,部伍相招鼓角中。”東峯見而失笑曰:“措大誤矣。豈有令嚴之時,復有相招之事乎?”取詩小雅以示余,有曰:“之子于征,有聞無聲。允矣君子,展也大成。”余深服其言。歸而告于餘慶,餘慶嘆曰:“東峯讀書,最好最好。”
- 2 金時習,「山居集句」【百首】其二十六,『梅月堂詩集』卷7 詩○山居集句。
- 3 한국 국내에는 康熙·光緒 연간에 간행한 『元遺山先生文集』이 몇몇 기관에 산전한다.
- 4 權近,「題盾谷李公書室」,『陽村文集』卷7 南行錄。
- 5 車柱環,「遺山樂府연구」,『동방학지』17, 연세대학교 국학연구원, 1976.
- 6 尹浩鎭,「中國의 詩歌理論이 韓國의 漢詩論에 미친 影響: 晉州本『遺山樂府』의 跋을 中心으로」,『東方漢文學』13, 동방한문학회, 1997.
- 7 『成宗實錄』卷285, 成宗24年 12월 28일 (1493, 弘治6年): 弘文館副提學金諶等上劄子曰:“伏聞, 頃者李克墩爲慶尙監司·李宗準爲都事時, 將所刊『西陽雜俎』·『唐宋詩話』·『遺山樂府』及『破閑』·『補閑集』·『太平通載』等書以獻, 旣命藏之內府, 旋下『唐宋詩話』·『破閑』·『補閑』等集, 令臣等略註歷代年號人物出處以進。[…]”
- 8 車柱環,「遺山樂府연구」,『동방학지』17, 연세대학교 국학연구원, 1976.
- 9 車柱環,「遺山樂府연구」,『동방학지』17, 연세대학교 국학연구원, 1976.
- 10 李宗準,「遺山樂府詩跋」,『慵齋先生遺稿』雜著。
- 11 車柱環,「韓國詞文學研究」,『亞細亞研究』15-19, 고려대 아세아문제연구소, 1964-1966.
- 12 『宋史』「樂志」:“越調。賀鑄詞有‘長亭柳色才黃’句, 名‘柳色黃’, 謝懋詞, 名‘石州引’。
- 13 雙調一百二字, 前段十句四仄韻, 後段十一句五仄韻。此調以此詞爲正體, 若蔡詞·二張詞之攤破句法, 王詞之句讀全異, 皆變格也。此詞前後段兩結句,

朝鮮前期 元好問『遺山樂府』의 受容에 대하여:

金時習의 예를 중심으로

例作上一下四句法，填者辨之。

14 唐教坊曲名。此調有令詞，有慢詞。令詞自八十三字至九十三字，共三十五首。康與之詞，名「洞仙歌令」；潘昉詞，名「羽仙歌」；袁易詞，名「洞仙詞」；『宋史』「樂志」，名「洞中仙」，注林鐘商調，又歇指調；『金詞』注大石調。慢詞自一百十八字至一百二十六字，共五首。柳永『樂章集』「嘉景」詞注般涉調，「乘興閑泛蘭舟」詞注仙呂調，「佳景留心慣」詞注中呂調。按，張綖『詩餘圖譜』，前段六句三韻，後段七句三韻，前後段第三句俱七字，第四句俱九字，前段結句六字，後段結句九字，此令詞正體也，間有攤破·添字句·添韻者，皆從此出，譜中句讀悉據之。

15 宋人填「洞仙歌」令詞者，句讀韻腳，互有異同，惟蘇·辛兩體，填者最多，今以蘇·辛二詞爲初體，其餘添字·減字，各以類聚，庶不蒙混。

16 此與蘇詞同，惟前段第四句作上五下四句讀小異。宋詞如此填者甚多。

17 此調有平韻·仄韻兩體。[……]此調以此詞及周詞爲正體，若黃詞之減字，程、趙、元三詞之添字，與無名氏詞之轉調，皆變體也。此詞換頭句不藏短韻，宋·元人如此填者亦多。

18 『碧雞漫志·甘州』，仙呂調，有曲破，有八聲，有慢，有令。按，此調前後段八韻，故名「八聲」，乃慢詞也，與「甘州遍」之曲破，「甘州子」之令詞不同。

19 此調以此詞爲正體，若張詞之添聲，劉過以下五詞之減字，皆變體也。

20 唐詞單調，以韋莊詞爲主，餘俱照韋詞添字，至宋人始作雙調。

21 此詞兩段，俱照韋莊體填。內第四句，平仄乃照張泌「飛絮落花」句體填。細查宋詞，其可平可仄，不甚異同。惟秦觀詞，前結「雖同處，不同枝」，後結「重相見，是何時」，又方嶽詞，前段第四句云「幾雨幾晴，做得這些春」、後段第四句云「吹得酒痕，如洗一番新」，平仄略爲小異。餘只七言句，第一字·第三字，九言句第一字·第五字，大概不拘也。按，黃庭堅有仄韻「江城子」詞，其字句與蘇詞同，惟韻腳改爲仄聲耳。因詞俚不錄。

文學史系譜的建立：《詞律》中周邦彥、方千里、 吳文英三家詞的內在理路

李日康

一

康熙二十六年（1687），萬樹（字紅友，又字花農，1630—1688）的《詞律》（二十卷）面世，這標誌着明末清初詞譜類著作的高峰。一方面，清人如厲鶚、吳衡照等對《詞律》讚譽有加，另一方面，亦有清代人對《詞律》持懷疑態度，但無論正反，《詞律》也是清人論詞時不能避而不談的重要詞學著作。近來學者如謝桃坊、村上哲見等，也充份肯定萬樹《詞律》在詞體格律研究上的重要貢獻。

論者解釋《詞律》的立意和貢獻，多於〈自敘〉和〈發凡〉着手，引述萬樹意欲匡正時流、時譜之弊的理想。然而，《詞律》能夠獨步天下，除了萬樹敏銳的觀察，始終還得依靠他筆下實踐和具體的文本內證來證成初衷的前瞻眼界，以及將設想的理論予以實踐，這樣才轉化成我們今天所得見的《詞律》一書。相對於回應外部歷史治亂興衰的分析——那些一般定義為外緣分析的角度，本文本將轉入《詞律》內在理路（inner logic）¹的探索。

二

《詞律》按詞調的字數長短依次順序排列，雖然萬樹有就字之增減和句之長短作出校訂，但一般而言，這種排序方式還是相對穩定。在字少居前字多居後的原則下，〈竹枝〉、〈紇那曲〉不管如何編校，也絕不會出現在〈戚氏〉、〈鶯啼序〉之後。換句話說，詞牌的先後編排未必最能反映萬樹的創見。相對而言，例詞的揀選則可以體現萬樹主觀的篩選意志。

《詞律》全書收六百六十調，一千一百八十餘體，每體有一首例詞，例詞有小字旁注，依情況標示平仄、四聲、句豆、叶韻，詞後或有注文

文學史系譜的建立：《詞律》中周邦彥、方千里、
吳文英三家詞的內在理路

詳細說明該調該體的情況，其中包括萬樹的評點和校訂原則等（下文將再詳論）。統計全書選錄重要詞人²詞作作為例詞的情況，可以得出下表的數據：

表一：《詞律》重要詞人錄體數量統計

詞人	數量
柳永	114
吳文英	54
周邦彥	45
黃庭堅	30
晁補之	28
楊无咎	27
趙長卿	27
史達祖	27
杜安世	23
呂渭老	23
蘇軾	21
秦觀	21
蔣捷	21
晏殊	20
顧夙	19
晏幾道	19
孫光憲	18
張先	18
周密	16
姜夔	15
韋莊	14
歐陽修	14
張元幹	14
陸游	14
辛棄疾	14

程垓	14
溫庭筠	13
毛滂	13
方千里	12
歐陽炯	11
皇甫松	10
蔡伸	10
趙彥端	10
牛嶠	8
和凝	8
高觀國	7
王沂孫	7
張翥	7
馮延巳	6
康與之	6
張炎	6
万俟雅言	5
賀鑄	4
李清照	4

單就以上觀察作出描述，很大機會得出某種「誤解」，例如萬樹錄用柳永最多，可能代表萬樹樂於參考柳永《樂章集》中所記諸律調作審律依據；又例如觀察表中前領詞人與姜夔、張炎、周密在數量上的差別，便得出萬樹不重視姜、張雅詞的判斷。

以上誤解實源於方法論上的先天漏洞，《詞律》是按萬樹手頭上所蒐集詞調的長短列次，然而，唐、五代詞人在世時段與詞的創調時期並不一致，存在落差，這意味着大部份唐、五代詞人在生時，很多詞調尚未創製。因此《詞律》作為詞譜收錄詞牌時，並不是每一位詞家也在完全均等機率的前提下被選擇。如果將《詞律》的錄體情況按〈卷一〉至〈卷十〉及〈卷十一〉至〈卷二十〉分開統計，情況便一目了然：

文學史系譜的建立：《詞律》中周邦彥、方千里、
吳文英三家詞的內在理路

表二：〈卷一〉至〈卷十〉重要詞人錄體數量統計

詞人	數量
柳永	50
黃庭堅	25
趙長卿	22
顧夔	19
周邦彥	19
楊旸咎	19
孫光憲	18
吳文英	17
毛文錫	17
晏幾道	16
晏殊	15
杜安世	14
蔣捷	14
韋莊	14
溫庭筠	13
秦觀	13
石孝友	12
歐陽修	11
蘇軾	11
晁補之	11
皇甫松	10
歐陽炯	10
史達祖	10
張泌	10
張先	10
呂渭老	9
辛棄疾	9
張元幹	9

毛滂	9
和凝	8
牛嶠	8
趙師使	7
蔡伸	6
程垓	6
陸游	6
馮延巳	6
向子諲	5
万侯雅言	4
姜夔	4
高觀國	4
周密	4
周紫芝	4
陳允平	3
趙彥端	3
李清照	3
康與之	2
賀鑄	2
張翥	2
方千里	1
程秘	1
張炎	1
王沂孫	0

表三：〈卷十一〉至〈卷二十〉重要詞人錄體數量統計

詞人	數量
柳永	64
吳文英	37
周邦彥	26

文學史系譜的建立：《詞律》中周邦彥、方千里、
吳文英三家詞的內在理路

史達祖	17
晁補之	17
呂渭老	14
周密	12
姜夔	11
方千里	11
蘇軾	10
杜安世	9
秦觀	8
程垓	8
陸游	8
楊旡咎	8
張先	8
王沂孫	7
趙端彥	7
蔣捷	7
趙長卿	5
辛棄疾	5
黃庭堅	5
張元幹	5
晏殊	5
張炎	5
張翥	5
蔡伸	4
康與之	4
陳允平	4
毛滂	4
歐陽修	3
趙師使	3

晏幾道	3
高觀國	3
賀鑄	2
石孝友	1
万侯雅言	1
歐陽炯	1
程秘	1
李清照	1
周紫芝	1
皇甫松	0
溫庭筠	0
顧夔	0
孫光憲	0
向子諲	0
和凝	0
毛文錫	0
張泌	0
馮延巳	0
韋莊	0
牛嶠	0

以上可見，詞人如溫庭筠、皇甫松、和凝、韋莊、牛嶠等的錄體情況全部集中在《詞律》的前半，在後半完全沒有出現，與此同時，一些詞人如方千里、姜夔、周密則在後半有明顯的增幅。

以上統計無非指出一般觀察的不適用和局限，難以針對詞譜這種文獻類型和《詞律》的特殊案例。

以上三表初步反映了《詞律》的內在理路，配合萬樹的評注，其中有若干現象比較鮮明。首先，柳永錄為例詞數量最多。根據疏理，柳永是唯一一位在二十卷中每卷也有錄入詞作作為例詞的詞家，但與此同時，綜觀《詞律》萬樹的評注，他對柳永的問題往往存而不論。錄入數量與

論述深度存在落差；第二，吳文英、周邦彥依次為錄入數量第二、第三多的詞家，他們反映的內在理路，乃至一種可稱為系譜的設置，構成萬樹《詞律》詞學觀的重要一環；第三，姜夔、史達祖、張炎這些一般歸入周派的詞人，在《詞律》中與吳文英與周邦彥的地位存在落差，即萬樹的判斷與評注，有別一般文學史的分析。

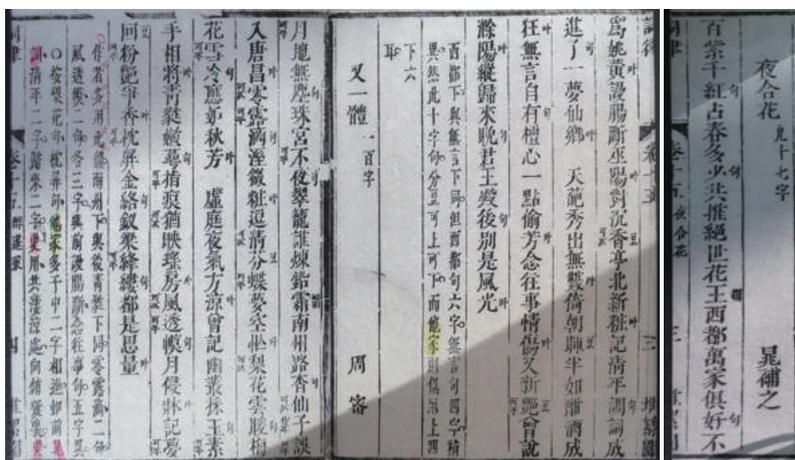
基於論述篇幅所限，本文將主力析論周、方二家詞的個案，藉此探討《詞律》的內在理路。

三

《詞律》全書分別錄入吳文英詞五十四首及周邦彥詞四十五首作為例詞，數量僅次柳永，排名屬全書第二、第三高。相對對柳永詞的議而未決和語有保留，萬樹對周邦彥、吳文英詞表達了明確一致的褒揚，如《詞律》卷七〈戀繡衾〉一調，只錄吳文英〈戀繡衾〉（頻摩書眼怯細文）一首，並以此體為此調定格，萬樹認為如此方能使歌聲頓挫³；卷八〈步蟾宮〉一調，萬樹認為周邦彥八十九字又一體「各仄聲字，俱宜遵守，蓋此調音響如斯也」⁴；卷十二周邦彥的〈蕙蘭芳引〉（寒瑩晚空）萬樹則讚譽其詞「瑩、鏡、斷、對、末、更、倦、厭、但、夢、故、後、障、是、處、更、寄、舊、但、夜、奈等字，俱用去聲，妙絕」⁵；《詞律》卷十三稱讚吳文英〈探芳信〉（探春到）結拍語「翠小，用去上，妙妙」⁶，諸如此類，不勝枚舉。

據此，可以得出萬樹《詞律》推許周邦彥、吳文英詞作為填詞典範這一觀察。這觀點根據《詞律》內證歸納所得，大概可以成立。然而，若以此作為研究的結論，則甚為可惜，且並不圓滿，忽略了《詞律》內在理路的脈絡底下，此一現象更深刻的揭示。

據萬樹體例，《詞律》每收一調，必先標明詞牌名稱、字數，然後登錄例詞詞人及所選例詞，例詞中又以旁注標明豆句、叶韻、平仄，例詞後附上萬樹的分析評注，如該調多於一體，則以「又一體」錄入其他例詞，並重覆以上各項，如此類推，如下圖所示：圖一《詞律》（卷十五）〈夜合花〉及其「又一體」書影



據此，《詞律》每調以下普遍包括以下明細，各項共同構成《詞律》中具有最小完整意義的辨體單位：

1. 詞牌名稱
2. 詞牌字數
3. 詞人名稱
4. 所選例詞及旁注
5. 詞後萬樹評注
6. 又一體（如有）及其詞牌名稱、字數、詞人、例詞、旁注、萬樹評注

以上所謂「萬樹《詞律》推許周邦彥、吳文英詞作為填詞典範」的論點無疑正確，卻未有充份發明每調底下萬樹留下的豐富文本資源，作更進一步的推論分析。以上觀點主要統計了詞人錄入的詞作數量（即第 1、3 項）及歸納和截錄萬樹的評注（即第 5 項），也似乎將各項明細（尤其第 5 項）預設為同一層面之上僅具單一層次的論述文字。然而，萬樹在例詞後的說明雖然大多沒有分段，但實際上乃包含了不同層次的議論，試以卷十五〈珍珠簾〉一調為例，該調共收三體，首列吳文英九十八字〈珍珠簾〉（蜜沉爐煨餘烟裊），次列張炎一百一字〈珍珠簾〉（雲深別有深庭字），再次為陸游一百一字〈珍珠簾〉（燈前月下嬉遊處），各詞後萬樹評

語依次分列如下：

（按：見吳文英例詞後）「麟帶」以下，前後相同，但「東風垂柳」與「客枕幽單」平仄異。「麟帶」二句，「細雨」二句，雖皆五字，但上句、是上二下三，下句、是上一下四，不可誤作一樣。⁷

（按：見張炎例詞後）比前詞，多「小簾櫳」三字，詞家多宗此體。「去」、「住」二字，即用上韻，此玉田巧筆，非必要疊韻也。此詞、用「料理琴書」，「簾影妝樓」，草窗、用「鮫人織就」，「歸時人在」，平仄相反，而前夢窗詞，前用「東風垂柳」，與周同，後用「客枕幽單」，與張同，前後互異，想亦不拘。然他家、俱用草窗體，可從之。「坐」字、竹山作「珠」字，係誤刻。「此」字，無用平理。⁸

（按：見陸游例詞後）「彼此知名」四字，「嬾見便論心素」六字，比前二詞、兩句五字者不同，或以為誤。渭南又一首、亦云「掠地穿簾」、「知是竟歸何處」，是知另有此體也，其後段首句，兩字叶韻，次句、四字叶韻，亦與前、六字用平者，不同。其又一首、亦云，「自古，儒冠多誤」。○《圖譜》、前收〈珍珠簾〉，後又收〈真珠簾〉，不知「珍」即「真」，本是一調也，而後起二字句，亦失註叶韻。⁹

細讀以上〈珍珠簾〉各體各詞後萬樹的評注，可見評注雖以《詞律》所錄吳文英九十八字、張炎一百一字、陸游一百一字三體為起點，但各段評注各有側重，各自延伸至不同的議論方向，展示出不同的論述層次，據此可分為四類：

第一類層次：析論該調該體之特色

第二類層次：比勘《詞律》所錄一調之下各體之異同

第三類層次：比勘《詞律》以外、未錄各體之異同

第四類層次：與其他詞譜比勘

吳文英詞後萬樹的評注屬第一層次，該語段析論吳詞作為例詞一詞之內上下片句式之不同；陸游詞後所謂「『彼此知名』四字，『嬾見便論心素』六字，比前二詞、兩句五字者不同，或以為誤。」屬第二層次，是

以陸游例詞為本位，而與同調異體的吳文英詞、張炎詞互相比勘；張炎詞後萬樹評注徵引周密詞、蔣捷詞比勘以及陸游詞後評注牽涉陸游另一首沒有錄入《詞律》的〈珍珠簾〉，則屬第三層次；最後萬樹批評《圖譜》之缺失，則屬第四類。

以上四種同時混雜呈現但層次不同的評注內容，構成萬樹《詞律》與其他詞譜從形式到本質上的決定性分野。一般詞譜通常僅就所錄詞牌、例詞校勘，即以上第一層次，間或涉及第二層次，即同譜之內所收同調異體之間的比勘，但萬樹的比勘有意識地慣性徵引《詞律》未有錄入的詞人及詞作延伸議論，這使得《詞律》中萬樹的評注往往比例詞本身佔更多篇幅，動輒數百言，《詞律》卷二十歷卷錄入的〈鶯啼序〉一調，例詞佔二百四十字，但萬樹評注保守估計亦有二千五百字，是例詞的十倍，橫跨五頁篇幅。

以上不單構成《詞律》析論詞體的鮮明風格，更重要的是，透過萬樹評注文字所呈現的四種層次，提醒我們至少四點歷來甚少指出的論點。首先，即使撇除萬樹在〈自敘〉提出的回應外部文學史的撰作動機，單憑以上具自覺意識的比勘手段，也足以證成《詞律》透過特定的語言形式和排版形式產生出一種在《詞律》內部運作和生產意義的內在理路；第二，這種鑽研詞體規律的特定形式使得《詞律》一書立足於詞譜工具書性質的前提下同時有所超越，兼及詞論和詞話的性質，因此即使萬樹本人沒有明確申述《詞律》兼及了詞論、詞話，但《詞律》本身早已溢出詞譜的限界，體現了萬樹劃時代的理論高度以及改革詞譜的匠心；第三，萬樹評注大量徵引《詞律》未有錄入的詞人、詞作，打破《詞律》文本的封閉性，使《詞律》變成延伸性極強的開放文本，但與此同時，要麼讀者本身博聞強記，手邊無書也能追隨萬樹援引的歷代詞作和議論的思路，要麼讀者必須透過翻檢其他文獻典藏來檢驗追蹤萬樹提供的線索，這既提高了《詞律》的閱讀價值，同時也提高了閱讀的門檻，或許也就是《詞律》不被部份讀者理解的原因；第四，這種內在理路提示了我們萬樹的評注不單圍繞該調該體，更展開了徵引的網絡，雖然《詞律》以調、體為單位，但基於這種特定的評注方式，例詞及詞人間可能存有間或互相補足、間或互相質疑辯駁的張力，這特定的規律暗示了系譜成立的可能。

文學史系譜的建立：《詞律》中周邦彥、方千里、
吳文英三家詞的內在理路

回到本節議論的原點，周邦彥及吳文英詞作為例詞在《詞律》的錄入情況，據以上第四點的分析和推論，本文發現在《詞律》錄入例詞和萬樹評注中，周邦彥、吳文英二家例詞往往互有關聯，呈現互相補足援引的情況，與此同時，在周、吳二家的互補關係中，又發現了評注中時有援引方千里詞共同作證的情況。以下統計了《詞律》二十卷中，周邦彥、方千里、吳文英三家錄為例詞及萬樹在評注中援引其他詞家的情況：

表四：周邦彥、方千里、吳文英三家錄為例詞及萬樹評注中旁及他家情況

卷數	詞人	詞牌	評注中所及詞人	萬樹相關評注
一	吳文英	憶江南 (又一體)	白居易 李煜	
	周邦彥	浪淘沙慢	蔣捷	
	周邦彥	浪淘沙慢 (又一體)		前調有蔣詞可証，作者但從之可耳。 ¹⁰
二	吳文英	如夢令 (又一體)		
	吳文英	江城梅花引 (又一體)		
三	周邦彥	浣溪沙慢		無第二首可對。 ¹¹
四	周邦彥	萬里春		
	吳文英	阮郎歸	歐陽修 蘇軾	然此(按：歐、蘇)亦是偶爾，作者自當用平仄仄(按：即吳詞)也。 ¹²
五	周邦彥	雙頭蓮 (又一體)	方千里	惜方千里無和詞，莫可訂正也。 ¹³
	周邦彥	品令	方千里	觀方千里和詞，平仄處無一字不同。初欲作旁註，而令人握筆不敢下，古人詞律如此謹嚴，可亂填乎？ ¹⁴
	周邦彥	應天長	蔣捷 方千里 吳文英 康與之	千里和清真，四聲一字不改，觀竹山亦一字不改，益知用字自有定格……夢窗用周體。 ¹⁵
六	吳文英	西江月 (又一體)		
	周邦彥	月中行		

六	吳文英	燭影搖紅		
	吳文英	探春		
	吳文英	探芳新		
	方千里	迎春樂	周邦彥	
七	周邦彥	玉團兒	盧炳	
	周邦彥	紅羅襖		
	吳文英	戀繡衾	辛棄疾 蔣捷 陳允平 陸游 李大古	
八	周邦彥	芳草渡 (又一體)		
	周邦彥	夜遊宮	方千里 陸游 毛滂 吳文英 張元幹	
	吳文英	踏莎行	楊炎 蔡伸	
	周邦彥	紅窗迴		
九	吳文英	花上月令		
	吳文英	一剪梅 (又一體)		
	周邦彥	一剪梅 (又一體)	蔡伸	
	周邦彥	感皇恩		
	周邦彥	漁家傲	趙長卿 徐小淑	
	周邦彥	蘇幕遮	吳純叔	
	吳文英	垂絲釣	陳亮 方千里 楊旼咎 周邦彥	

文學史系譜的建立：《詞律》中周邦彥、方千里、
吳文英三家詞的內在理路

十	吳文英	青玉案 (又一體)	楊无咎 程垓 張元幹 黃公度 曾覲 王千秋	
	吳文英	聲聲慢 (又一體)	趙長卿 辛棄疾 周密	
	吳文英	夢行雲		
	周邦彥	看花回 (又一體)	黃庭堅	
	吳文英	惜黃花慢 (又一體)		
十一	周邦彥	粉蝶兒慢		
	吳文英	風入松 (又一體)	侯寘 康與之	
	周邦彥	荔枝香近	方千里 吳文英	千里和詞，通本皆字字模仿。 ¹⁶
	方千里	荔枝香近 (又一體)	周邦彥 柳永 吳文英	
	周邦彥	隔浦蓮近拍	方千里 陸游 吳文英 曾覲 楊无咎 高觀國 趙端彥 史達祖	千里和詞，「野軒小」屬後，可信。 ¹⁷
	周邦彥	解蹀躞	楊无咎 吳文英 方千里	
方千里	側犯	周邦彥 姜夔	詞至千里，而繩尺森然，纖毫無假借矣。四聲確定，欲旁註而不可得矣……美成為樂府創始之人，豈有謬誤，況千里之和清真，無一字聲韻不合，寧有改之之理？ ¹⁸	

十一	周邦彦	四園竹	方千里	余每贊嘆方氏和清真一帙，為千古詞音証據，觀其字字摹合如此，不惟調字可考，且足見古人細心處。不僅有功於周氏，而凡詞皆可以此理推之。 ¹⁹
	吳文英	祝英臺近	蔣捷 呂渭老 程垓	
	方千里	紅林擒近	周邦彦	千里和之，亦一字不異，是知調格，應是如此，不可任意更改。不然，美成既苦守不變，千里又苦相模仿，何其迂拙。 ²⁰
十二	周邦彦	早梅芳近 (又一體)	李之儀	
	吳文英	洞仙歌	蔣捷 沈端節 王安中 盧祖皋	
	吳文英	洞仙歌 (又一體)	林外	
	方千里	滿路花	周邦彦	
	周邦彦	踏青游	蘇軾	
	周邦彦	蕙蘭芳引	方千里 吳文英	向讀方氏和詞，驚愛其一字不改，及閱夢窗集，取以相較，亦一字不改，愈信定格之不可輕亂。 ²¹
十三	方千里	華胥引	周邦彦	
	吳文英	滿江紅 (又一體)	彭芳遠	
	吳文英	探芳信 (又一體)	蔣捷 史達祖 張炎	
	吳文英	法曲獻仙音 (又一體)	周邦彦 柳永 方千里 姜夔 張炎	試問于周、方、吳、姜、張諸公外，有何傳稿可據而註之乎？「渡」字，玉田用叶，亦不必，周、方亦皆不叶。 ²²
	吳文英	淒涼犯		

文學史系譜的建立：《詞律》中周邦彥、方千里、
吳文英三家詞的內在理路

十三	吳文英	塞翁吟	周邦彥 方千里 趙文	
	周邦彥	意難忘		
	吳文英	惜秋華		此調他家罕覩 ²³
	吳文英	惜秋華 (又一體)		
十四	吳文英	尾犯	蔣捷 柳永	
	周邦彥	留客住		
	方千里	掃花遊	周邦彥 吳文英 陳允平 王沂孫 張炎 邵清溪 張半湖	千里和周，一字不異，或謂太拘，不知有不可假借處也。 ²⁴
	周邦彥	塞垣春	方千里	觀千里和詞，其四聲無字不同，未便臆註。 ²⁵
	吳文英	塞垣春 (又一體)	周邦彥 方千里	
	吳文英	雙雙燕	史達祖	
	吳文英	漢宮春	辛棄疾 陸游	
	吳文英	玉京謠		
	吳文英	西子妝	張叔夏	
	吳文英	暗香	姜夔	
十五	周邦彥	黃鸝遶碧樹		
	吳文英	珍珠簾		
	周邦彥	月下笛	陶宗儀 張炎	
	周邦彥	三部樂 (又一體)	蘇軾 方千里 吳文英 陳亮	
	吳文英	三部樂 (又一體)		

十五	周邦彦	玲瓏四犯	宋徽宗 史達祖 曹邈 方千里 周密	
	吳文英	玲瓏四犯 (又一體)	方千里 宋徽宗 高觀國	
	周邦彦	大有	潘希白	
	吳文英	鳳池吟		
十六	吳文英	新雁過粧樓	張炎 陳允平	
	周邦彦	鎖窗寒	方千里 王沂孫 張炎 楊无咎 程先 楊无咎 吳文英 蕭允之	
	吳文英	三姝媚		
	吳文英	丁香結	周邦彦 方千里	
	吳文英	絳都春	蔣捷 丁仙現 毛滂 張榘 趙端彥 毛滂	
	周邦彦	遠佛閣	吳文英	
	吳文英	解語花	周邦彦 方千里	
十七	周邦彦	瑞鶴仙 (又一體)	趙端彥 方千里 毛滂 趙文 趙長卿 陸子逸 吳文英	蓋方氏遵周甚嚴，即體可兩用，亦必不作另調。 ²⁶

文學史系譜的建立：《詞律》中周邦彥、方千里、
吳文英三家詞的內在理路

十七			王千秋 曾覲	
	周邦彥	瑞鶴仙 (又一體)		
	方千里	倒犯	周邦彥 吳文英	
	周邦彥	氏州第一	方千里	
	周邦彥	西平樂 (又一體)	方千里 吳文英	
	吳文英	金盞子	史達祖 蔣捷	
	吳文英	澡蘭香		無他首可證 ²⁷
十八	方千里	還京樂	吳文英 周邦彥	
	吳文英	霜花映		夢窗自製，惟有此曲 ²⁸
	周邦彥	綺寮怨		止此一首，無可據正 ²⁹
	吳文英	拜星月慢	周邦彥 周密 彭泰翁	但草窗于『甄花滉』作『研箋紅』， 不如周、吳紀律也。 ³⁰
	周邦彥	西河		此體他無作者 ³¹
	吳文英	西河 (又一體)	周邦彥 方千里 張炎 辛棄疾	
	吳文英	尉遲杯	周邦彥 尹公遠	
十九	周邦彥	夜飛鵲	吳文英 盧祖臯	
	周邦彥	一寸金	吳文英	
	周邦彥	過秦樓 (又一體)	魯逸仲 方千里 蔡伸 陸游 侯寘 虞邵菴 張景修 楊无咎 呂渭老 李甲	

十九	吳文英	高山流水		
	吳文英	霜葉飛	周邦彥	
	方千里	丹鳳吟	方千里 周邦彥 吳文英	
二十	吳文英	秋思耗		
	方千里	大酺	周邦彥 劉須溪	
	方千里	六醜	周邦彥 吳文英 楊慎	
	吳文英	鶯啼序	黃在軒 楊慎	

如果單憑統計周、吳二家詞在《詞律》錄體數量上的優勢，仍不足以說明二家詞在萬樹論律體系中的獨特性，更未能探索此一現象背後的意義。據上表呈現所得，在《詞律》中，周邦彥、吳文英並及方千里三家詞，在萬樹評注經常互為緩引，互相作為比勘詞作析論詞體的根據，如《詞律》卷五〈品令〉一調，共錄七體，其中周邦彥五十五字又一體的例詞後，萬樹表示「觀方千里和詞，平仄處無一字不同。初欲作旁註，而令人握筆不敢下，古人詞律如此謹嚴，可亂填乎？」³²；《詞律》卷十四，周邦彥〈塞垣春〉（暮色分平野）後，萬樹又表示「觀千里和詞，其四聲無字不同，未便臆註」。³³

方千里其人生卒未詳，不入經傳史冊，《四庫全書總目》但言：「千里，信安人，官舒州簽判。李昉《宋藝圃集》嘗錄其〈題真源宮〉一詩，其事迹則未之詳也。」³⁴而在兩宋乃至明代詞壇，據現有史料所及，亦難言方千里在文學史上發揮廣泛影響力的痕跡。方氏最重要的詞學貢獻，莫過於其著作《和清真詞》一卷。毛晉汲古閣《宋六名家詞》收錄了方千里的《和清真詞》，這是後世刊刻方千里詞的源頭，萬樹編訂《詞律》經常參考汲古閣刻本，有理由相信他是從這途徑發現方千里詞的價值。然而，經毛晉汲古閣的重新引介，清人論詞雖能體認方千里的嚴守格律，但普遍而言也評價不高，如劉體仁《七頌堂詞繹》認為「千里遍和美成詞，非不甚工，總是堆煉法，不動宕」。³⁵馮煦《蒿庵論詞》則認為：「千里和清真，亦趨亦步，可謂謹嚴。然貌合神離，且有襲跡，非真清真也，

其勝處則近屯田。]³⁶

在三家共一百一十一首錄入例詞及萬樹評注中，周、方、吳互為徵引者高達四十三首，而且當中不少詞調萬樹也稱道周、方、吳三家和詞能達到四聲一字不易的妙境，如〈應天長〉、〈荔枝香近〉、〈側犯〉等調，萬樹由此推論詞之必有「定格」。《詞律》卷十一〈四園竹〉的評注中，萬樹明確道出了周、方、吳三家在《詞律》的價值所在：

余每贊嘆方氏和清真一帙，為千古詞音証據，觀其字字摹合如此，不惟調字可考，且足見古人細心處。不僅有功於周氏，而凡詞皆可以此理推之，豈非詞家所當蒸嘗者耶？

「豈非詞家所當蒸嘗」一語，回應了〈自敘〉中萬樹對時流、時譜竟然「通行天壤，靡不駭稱博覈，奉作章程矣。百年以來，蒸嘗弗輟，近歲所見，剗剗載新而未察其觸目瑕癥，通身罅漏」³⁷的驚訝與不滿。以上所言「凡詞皆可以此理推之」的「理」，不應理解為學習周邦彥、或方千里、或吳文英三家詞個別的典範意義，而是應當理解為萬樹有意從三家詞互勘比照此一審訂詞體規律的模式中抽取其原理範式，予以深化、內化，使這種原理範式推廣和躍升為當世詞家編譜、填詞的法則。萬樹提倡的不是個別詞人，也不是詞派，而是一種嶄新的詞學模式，這種模式需要透過周、方、吳三家例詞互勘的示範向世人展示其價值和合理性，當中包括編譜、審律、讀詞、填詞各不同環節。因此，萬樹〈自敘〉中較多篇幅述論針對舊譜譜式的改革，包括改黑白圈點符號為文字旁注、細辨平仄區分四聲聲情之異趣等，較少觸及對個別詞家、詞風的評點，也可以從以上角度解釋。

《詞律》例詞後的評註說明，很多時甚至比例詞正文更長，原因已如上文所言，萬樹在這些說明中不斷加入和援引歷代詞例作證，如《詞律》卷十八的〈西河〉一調，首列周邦彥一百四字〈西河〉（長安道），次列王彧又一體〈西河〉（天下事），再列吳文英一百五字〈西河〉（春戶霽），而萬樹說明〈西河〉（春戶霽）時，又再在註中加入周邦彥另一首〈西河〉（佳麗地）及方千里〈西河〉（都會地）一起討論。

上述以周、方、吳三家例詞互相比勘對照的模式，在《詞律》中固然以周、方、吳三家的現象最為突出明顯，然而，亦不限於此三家。據

此，例詞並非採取周、方、吳任何一家為例詞時，萬樹也有在評注中援引三家詞例，情況可見下表：

表五：《詞律》萬樹評注以周、方、吳三家助校情況

卷數	詞人	詞調	萬樹評注中以周、方、吳三家助校情況	備註
一	柳永	浪淘沙令	周邦彥	
	柳永	八聲甘州 (又一體)	蘇軾 葉夢得 周密 吳文英 汪莘 辛稼軒 張炎 琴趣	古作者不必皆同，然亦不可不知，夢窗之故意填此，必有謂也。 ³⁸
二	張耒	風流子 (又一體)	王千秋 蔡伸 周邦彥 孫惟信 吳彥高 張翥 吳文英 楊慎	
	南唐後主	相見歡	薛昭蘊 辛棄疾 朱希真 蔡伸 吳文英	
三	康與之	女冠子 (又一體)	李漢老 柳永 周邦彥 蔣捷	
	晏幾道	清商怨	周邦彥	無怪兩公（按：晏、周）之樹幟騷壇也。 ³⁹
	晏殊	清商怨 (又一體)	周邦彥 趙坦庵	
四	潘元質	醜奴兒慢	吳文英	夢窗詞家龍象 ⁴⁰

文學史系譜的建立：《詞律》中周邦彥、方千里、
吳文英三家詞的內在理路

	黃庭堅	一落索 (又一體)	周邦彥	
六	陸游	江月晁重山	吳文英	
	毛滂	憶故人 (又一體)	周邦彥	
七	史達祖	鳳來朝	周邦彥	
	趙長卿	雨中花 (又一體)	黃在軒 楊无咎 吳文英 石孝友 歐陽修	
	黃機	木蘭花慢 (又一體)	吳文英 盧祖臯	
	柳永	望遠行 (又一體)	周邦彥	
	周密	一斛珠 (又一體)	周邦彥 楊无咎 戴復古	
九	盧炳	一剪梅 (又一體)	韓東浦 蔡伸 趙師使 吳文英	
	陳允平	唐多令	吳文英	
十二	秦觀	滿路花 (又一體)	周邦彥 方千里	
	趙師使	滿路花 (又一體)	黃庭堅 周邦彥	
十三	姜夔	惜紅衣	吳文英	
	張炎	探芳信	吳文英 史達祖 蔣捷 楊炎	
	姜夔	淒涼犯 (又一體)	吳文英	夢窗乙稿亦載之，題曰淒涼調，註云：『合肥巷陌，皆種柳。秋風起，騷騷然。余客居闔戶，時聞馬嘶。出城四顧，則荒烟野草，不勝淒黯，乃著此體，琴

				有淒涼調，假以為名。歸行都，以此曲示國工田正德，使以亞臍栗吹之，其韻極美，亦曰瑞鶴仙影。』據此，則是篇，乃夢窗自製之調，非姜作明矣。 ⁴¹
十四	柳永	尾犯 (又一體)	周邦彥 吳文英 蔣捷	
	元好問	玉漏遲	宋子京 吳文英 蔣捷 周密 葛立方 程垓	
	李琳	六么令	周邦彥 柳永	
	柳永	留客住 (又一體)	周邦彥	今照周詞改正 ⁴²
	潘元質	倦尋芳 (又一體)	盧祖臯 吳文英	又查夢窗三首，篇篇用字精當無疵，俱與此相合。 ⁴³
十五	周密	夜合花	晁補之 史達祖 吳文英 高觀國	
	呂渭老	醉蓬萊	楊无咎 吳文英 蘇軾 晁无咎 柳永	
	張炎	珍珠簾 (又一體)	周密 吳文英 蔣捷	
	陶宗儀	月下笛 (又一體)	周邦彥 曾允元	
	張炎	月下笛 (又一體)	周邦彥	
	湯恢	二郎神 (又一體)	徐壽臣 吳文英	

文學史系譜的建立：《詞律》中周邦彥、方千里、
吳文英三家詞的內在理路

			馬莊父 呂渭老	
	程垓	無悶 (又一體)	王沂孫 吳文英	
	王沂孫	三姝媚	吳文英 詹玉 史達祖 詹天游	
	蘇軾	念奴嬌 (又一體)*	毛開 石孝友 周紫芝 李清照 趙長卿 張榘 張元幹 洛水 呂渭老 盧炳 辛棄疾 楊慎 姜夔 鮮于伯機 周邦彥	
	周邦彥	渡江雲	周邦彥 方千里 吳草廬 周密 詹天游 草庵	
	史達祖	東風第一枝	高觀國 張翥 吳文英 呂渭老 馬洪	
	趙長卿	水龍吟	吳文英	
十七	史達祖	玉燭新	周邦彥 吳文英 楊无咎	
	韓玉	曲江秋 (又一體)	姜夔 周邦彥	

	張炎	憶舊遊	周邦彥 方千里 劉應幾 吳文英	
	花犯	王沂孫	周邦彥 方千里 周密 吳文英	周、方二作，律度森然，而歷覽各家，無不字字摹擬，其所用諸去聲，若出一手。 ⁴⁴
	史達祖	瑞鶴仙 (又一體)	玉蟾 趙彥端 辛棄疾 王千秋 吳文英 吳禮之 趙長卿 蔣捷 洪璚 陸子逸 張樞	
	周密	瑤花	吳文英 張天雨	
	王沂孫	齊天樂	姜夔 王月小 吳文英 高觀國 趙萬里 張炎 方千里	
	陳允平	慶春宮	周邦彥 王沂孫	
	蔣捷	畫錦堂	周邦彥 吳文英 方千里	惜千里不和，他無可考耳。 ⁴⁵
	程垓	南浦 (又一體)	王沂孫 周邦彥 史達祖 張炎 陶九成	
	盧祖皋	宴清都	吳文英 周邦彥	

文學史系譜的建立：《詞律》中周邦彥、方千里、
吳文英三家詞的內在理路

			周密 趙善扛 方千里 何擻 程垓 王羨陂	
	趙以夫	龍山會	吳文英	
十八	史達祖	花心動	周邦彥 張元幹 蔣捷 高觀國 阮氏 黃子行 謝無逸 謝逸	
	史達祖	秋霽	胡浩然 吳文英 陳允平 周密 陳後主	
十九	蔣捷	解連環	周邦彥 方千里 楊无咎 姜夔 張翥 高觀國 柳永	
	魯逸仲	惜餘春慢	方千里	
	呂渭老	蘇武慢	周邦彥	
	蔡伸	蘇武 (又一體)	周邦彥 虞邵庵	
	姜夔	疎影	吳文英 張炎 周密 孫光憲 鄧剡 柳永	余前于〈暗香〉，錄夢窗所作，此調夢窗亦有，因有殘缺，故仍載白石原篇。 ⁴⁶
	史達祖	八歸 (又一體)	姜夔 吳文英	

	陸游	沁園春	戴復古 吳文英 蔣捷	
二十	高觀國	賀新郎 (又一體)	毛升 蔣捷 李昉英 張榘 趙善扛 蘇軾 戴復古 吳文英 史達祖 蘆溪 李南金 盧炳 李玉 劉克莊 黃機	
	史達祖	蘭陵王	張元幹 周邦彥 辛棄疾 劉須溪 方千里 彭履道	
	張翥	瑞龍吟	周邦彥 方千里 吳文英	翁處靜 此調以清真章臺路曲為鼻祖，向讀千里和詞，愛其用字相符。 ⁴⁷

這種內在理路在《詞律》中以周、方、吳三家為代表及作為最佳示範，與此同時，在其他詞牌、例詞中也出現類似情況，牽涉其他詞家，例如姜夔、史達祖、周密、張炎等，甚至與周、方、吳三家的論述交疊，互相辯駁，產生張力，形成更複雜的網絡。不過，有關周、方、吳三家以外的情況，已超出本文的範圍，將另文討論。

但無論如何，這種內在理路不以周、方、吳為限，而是遍及《詞律》全書，以網絡的形態展開，實踐萬樹析論詞體的構想，構成《詞律》的獨特之處。

四

《詞律》提煉並深化以周、方、吳三家例詞互相援引比勘的模式此一做法，可以視為《詞律》介入文學史並建立系譜的表現。

系譜是建立知識體系的框架，框架內的對象和內容固然重要，放諸《詞律》，即萬樹標榜的詞家和選錄的例詞，但是對象和內容之所以能夠產生價值判斷，關鍵乃在於對對象和內容的編排佈置和定位，換言之，即是系譜運作的機制。即使選擇了類近的對象和內容，但不同的編排會產生不同的意義和詮釋。不同學者建立各自的知識系譜，信仰相同系譜的詞家、論者、知識份子透過相同的前提和運作機制得出具有類同傾向的效果，這種進入系譜、遵從機制的過程和效應便是文學史討論中研究「學脈」的意義。

清代常州詞派的領袖周濟除了自身的填詞實踐，還提出「問塗碧山，歷夢窗、稼軒，以還清真之渾化」的綱領。此一綱領固然可視為周濟指導後學門人學習填詞的方法，但與此同時，也是常州詞派的詞學系譜。此系譜以王沂孫（碧山）、吳文英（夢窗）、辛棄疾（稼軒）、周邦彥（清真）為對象和內容，而更重要是周濟為以上四家詞安排了學習次序，透過按部就班循序漸進，常派門人理想地可以達到「清真之渾化」的境界。王沂孫生卒未詳，活躍於1230-1291期間；吳文英生卒繫於約1200-1260；辛棄疾生卒繫於1140-1207；周邦彥生卒繫於1056-1121。周濟提供的系譜是由南宋為起點回溯北宋以周邦彥為終點的，可表列如下：

表六：常州詞派周濟詞學系譜

起點： 活躍於 1230- 1291		約 1200- 1260		1140- 1207		終點： 1056- 1121
王沂孫 (碧山)		吳文英 (夢窗)		辛棄疾 (稼軒)		周邦彥 (清真)

近人葉嘉瑩與繆鉞合著《靈谿詞說》，二人論點曾各見於單篇論文，但《靈谿詞說》一書順時序按唐五代兩宋詞鋪展，亦不妨視為俱有文學史意味的著述。二人鋪演發揮其舊說並提出以下觀點：

(按：葉嘉瑩語)姜白石深通音律，作詞精美，與周邦彥相近，故論者或以白石上擬周邦彥。⁴⁸

(按：繆鉞語)若論史達祖在宋詞中的地位，他上承周邦彥，又受到同時的前輩詞人姜白石的影響，應屬於周、姜這一流派。⁴⁹

(按：葉嘉瑩語)這種以思力安排為主的寫作方式，遂為以後南宋詞人如姜夔、史達祖、吳文英、周密、王沂孫、張炎一脈重視格律以思索安排進行填詞的作風，開啟了先聲。……姜、史、吳三家可以代表受周詞影響的三種類型，史達祖是全以周詞為師法的追隨者，不過史詞較周詞為尖巧，而缺少周詞之渾厚，這種情況特別以史之詠物詞為然。至於姜夔與吳文英二人，則是自周詞變化而出的作者，只不過他們變化的途徑則又各有不同。⁵⁰

葉、繆論點容或有微小差異，但總體而言，乃可得出相同圖式，試表列如下：

表七：《靈谿詞說》周派詞人傳承系譜示意圖

起點：北宋 周邦彥 (1056-1121)	「全以周詞為師法」	尖巧：史達祖 (約1163-1220)
	「自周詞變化而出」	清空：姜夔 (1155-1209)
		質實：吳文英 (約 1200-1260)

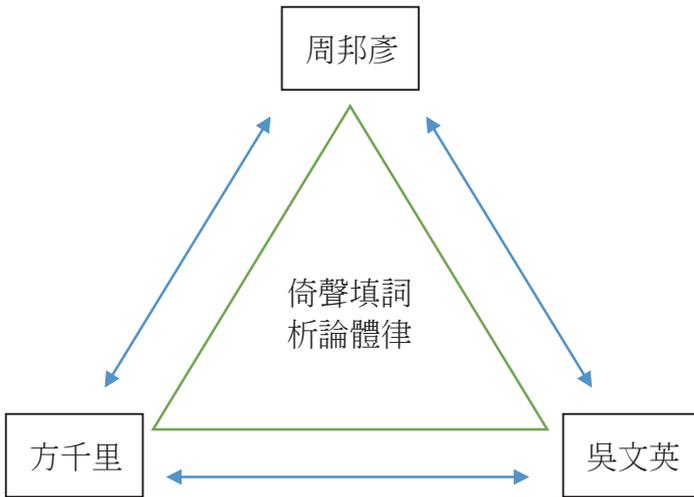
葉、繆二人基於文學史研究的立場，演述詞風流變與傳承，立論動機與周濟大相逕庭，因此系譜也呈現截然不同的圖式。周濟主張由晚宋王沂孫開始折返，追慕北宋周邦彥清真樂府作為終點，周濟標示的常州詞派系譜共經歷四家詞人，呈單線逆時序溯源。葉、繆二人則以北宋周邦彥為該段文學史描述的起點，順時序過渡至南宋史、姜、吳三家詞，也牽涉了四位詞人，其中兩位與周濟所示相同。尤應注意的是，除了時序上順逆的分別，周濟所述的系譜始終以單線線性運作，而據葉、繆二人的系譜，周派詞風流變至南宋，則在互見重疊的時段之中並分三途。葉、

文學史系譜的建立：《詞律》中周邦彥、方千里、
吳文英三家詞的內在理路

繆所述的系譜仍屬線性構思，但已非單線運作，而是三線並行，與周濟的呈結構性差異。

萬樹《詞律》所提倡的周邦彥、方千里、吳文英三家例詞系譜，又與周濟、葉嘉瑩、繆鉞不同，可以下圖表示：

圖二：萬樹《詞律》周、方、吳三家系譜



相較前引兩種系譜，萬樹《詞律》藉周、方、吳三家例詞組成的系譜並非呈線性時序推進，而是如上圖所示呈三角形互為補足，當《詞律》某調某體以周、方、吳其中一家作例詞，另外的「又一體」(如有)便有機會錄入另外兩家，即便《詞律》未有錄入其餘兩家作例詞，但在例詞後萬樹的評注之中，也經常會超越《詞律》一書內部所限，徵引另外兩家未錄入的詞作以助編譜審律。萬樹每則評注當然亦有論述的起點，但對萬樹來說，起點是在周、方、吳三家之間移動流轉，審律辨體過程的互補互證則呈現共時而非線性的狀態。

系譜提供了嶄新的模式，這種模式固然可以視為為個別的詞牌、詞體服務，但萬樹一直有意識地在評注中重覆強調「四聲一字不改」、「(詞體)不可假借」、「定格」(見前表)諸語，可見他各調各體的評注也共同

指向相同的理想。他貫串《詞律》全書，提倡全新的詞學模式，目的是指導詞家讀譜填詞、編者編譜審律的法則，從而建立新的文學史系譜。如果說周濟的目標是希望後學門人能夠在作詞上直達「清真之渾化」，那麼萬樹的做法和目標就是以編譜審律的事業來回應文學史論述，建立獨特的詞學系譜，藉此達至〈自敘〉中萬樹自我期許同時從屬於儒家文藝理想的「至公大雅」的目標。

五

總結本文透過《詞律》中選錄周邦彥、方千里、吳文英作例詞的線索，探論《詞律》內部存有一內在理路，這種內在理路建基於書中不同的細項所展開的不同議論層次，具體表現為具備特定形式的體例、評注和排版。在周、方、吳三家例詞互勘比照的典範底下，萬樹從中抽取其原理範式，並有意識地予以深化、宣揚，既作為以編譜事業救正時弊的實踐，也構成萬樹獨特的知識系譜，標誌他用以回應文學史的詞學觀。

除此以外，本文在方法論上也提出新的分類和統計原則，重新規劃和審視《詞律》中例詞、詞家、評注的關係。「詞譜」是《詞律》的文獻性質，也是《詞律》的撰作前提。既稱為「譜」，本身就意味着這類文獻有着獨特的物質形態，這種物質形態包含獨有的意義生產機制，左右其價值分佈，使詞譜與詞選、詞韻、詞別集等不同文獻類型區別開來。就此，詞譜的研究需要有針對性的研究方法，這既出於方法論的需要，也更根本地回應了文學研究聚焦於文獻形式的本體論命題。

本文為香港 General Research Fund (GRF) 計劃「詞譜與清代詞學建構研究」(Project Number: 12600320) 階段研究成果

注

1 內在理路 (inner logic) 此討論框架受余英時分析清代學術思想史的洞見啟發。余英時〈清代思想史的一個新解釋〉一文探討反滿說及市民階級說兩種外緣因素之外，宋明理學轉入清代考據學的內部發展脈絡。余氏認為：「〔反滿說、市民階級說〕都是從外緣來解釋學術思想的演變，不是從思想史的內在發展着眼，忽略了思想史本身的生命。我們大家都知道，現在西方研究 intellectual history 或 history of ideas，有很多種看法。其中有一個最重要的觀念，就是把思想史本身看做有生命的、有傳統的。這個生命、這個傳統的成長並不是完全仰賴於外在刺激的，因此單純地用外緣來解釋思想史是不完備的……所以在外緣之外，我們還特別要講到思想史的內在發展。我稱之為內在理路 (inner logic)，也就是每一個特定的思想傳統本身都有一套問題，需要不斷地解決；這些問題，有的暫時解決了；有的沒有解決；有的當時重要，後來不重要，而且舊問題又衍生新問題，如此流傳不已。這中間是有線索條理可尋的。」余氏在不否定、不對立於外緣因素下提出此具有方法論高度的觀點，除了在本來的清代思想史領域帶來豐碩成果，其貢獻更在於鬆動了以往強調治亂興衰為主軸的論述結構，使得傳統文化的不同切面可以產生重新組織組合的可能。雖然本章的討論對象是一部實體的清代著作——《詞律》，而非余著所論橫跨數百年經歷數代碩學宿儒的思想史，不過余氏的立論前提，即一種內部具有傳統脈絡的生命，以及思想傳統本身具有的問題意識，放諸本章非但完全沒有牽強附會之感，反而與本文的脈絡十分契合。本研究第二章分析了清初詞壇尊體策略的憂患意識，第三章又從思想史溯源《詞律》尊體的合理性，以上兩章固然是典型從外緣角度解釋《詞律》的相關問題，但與此同時也說明了萬樹《詞律》與清初詞壇千絲萬縷的關係，呼應其起伏脈絡，對時流作出敏銳的回應，加上萬樹苦心經營《詞律》一書，帶有明顯的針對性和問題意識，故此以內在理路來重新組織和理解《詞律》的內在發展，是理想且合理的方法。余英時：〈清代思想史的一個新解釋〉，見《論戴震與章學誠——清代中期學術思想史研究》（北京：三聯書店，2005年），頁322-356。

2 「重要詞人」指：一）在《詞律》中有一定數量或具有特別意義的詞人，如方千里；二）《詞律》中錄體不多，但詞史上普遍定義為重要的詞人，如李清照。

3 [清]萬樹：《詞律》，卷七，康熙二十六年堆絮園刻本，頁32-33。

4 [清]萬樹：《詞律》，卷八，康熙二十六年堆絮園刻本，頁17。

- 5 [清] 萬樹：《詞律》，卷十二，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 33。
- 6 [清] 萬樹：《詞律》，卷十三，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 16。
- 7 [清] 萬樹：《詞律》，卷十五，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 12。
- 8 [清] 萬樹：《詞律》，卷十五，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 12。
- 9 [清] 萬樹：《詞律》，卷十五，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 13。
- 10 [清] 萬樹：《詞律》，卷一，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 24。
- 11 [清] 萬樹：《詞律》，卷三，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 26。
- 12 [清] 萬樹：《詞律》，卷四，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 35。
- 13 [清] 萬樹：《詞律》，卷五，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 10。
- 14 [清] 萬樹：《詞律》，卷五，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 17。
- 15 [清] 萬樹：《詞律》，卷五，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 26-27。
- 16 [清] 萬樹：《詞律》，卷十一，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 6。
- 17 [清] 萬樹：《詞律》，卷十一，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 8-9。
- 18 [清] 萬樹：《詞律》，卷十一，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 26-27。
- 19 [清] 萬樹：《詞律》，卷十一，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 27-28。
- 20 [清] 萬樹：《詞律》，卷十一，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 35-36。
- 21 [清] 萬樹：《詞律》，卷十二，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 33。
- 22 [清] 萬樹：《詞律》，卷十三，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 20。
- 23 [清] 萬樹：《詞律》，卷十三，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 31。
- 24 [清] 萬樹：《詞律》，卷十四，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 16。
- 25 [清] 萬樹：《詞律》，卷十四，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 21。
- 26 [清] 萬樹：《詞律》，卷十七，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 13。
- 27 [清] 萬樹：《詞律》，卷十七，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 34。
- 28 [清] 萬樹：《詞律》，卷十八，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 14。
- 29 [清] 萬樹：《詞律》，卷十八，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 15。
- 30 [清] 萬樹：《詞律》，卷十八，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 21。
- 31 [清] 萬樹：《詞律》，卷十八，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 26。
- 32 [清] 萬樹：《詞律》，卷五，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 17。

文學史系譜的建立：《詞律》中周邦彥、方千里、
吳文英三家詞的內在理路

- 33 [清]萬樹：《詞律》，卷十四，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 21。
- 34 [清]永瑢等：《四庫全書總目》（北京：中華書局，1965），卷一九八，頁 1811。
- 35 [清]劉體仁：《七頌堂詞繹》，見《詞話叢編》（北京：中華書局，2005），頁 620。
- 36 [清]馮煦著，顧學頡校點：《蒿庵論詞》（北京：人民文學出版社，1959），頁 63。
- 37 [清]萬樹：《詞律·自敘》，康熙二十六年堆絮園，頁 1。
- 38 [清]萬樹：《詞律》，卷一，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 30。
- 39 [清]萬樹：《詞律》，卷三，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 27。
- 40 [清]萬樹：《詞律》，卷四，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 6。
- 41 [清]萬樹：《詞律》，卷十三，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 22。
- 42 [清]萬樹：《詞律》，卷十四，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 15。
- 43 [清]萬樹：《詞律》，卷十四，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 24。
- 44 [清]萬樹：《詞律》，卷十七，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 11。
- 45 [清]萬樹：《詞律》，卷十七，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 24。
- 46 [清]萬樹：《詞律》，卷十九，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 24。
- 47 [清]萬樹：《詞律》，卷二十，康熙二十六年堆絮園刻本，頁 15。
- 48 葉嘉瑩、繆鉞：《靈谿詞說》（上海：上海古籍出版社，1985），頁 456。
- 49 葉嘉瑩、繆鉞：《靈谿詞說》（上海：上海古籍出版社，1985），頁 475。
- 50 葉嘉瑩、繆鉞：《靈谿詞說》（上海：上海古籍出版社，1985），頁 489。

和刻本元好問詩詞集的刊行 及其在日本的受容探析

靳春雨

元好問（1190-1257）是我國金末元初的代表文人，字裕之，號遺山。太原秀容（山西省忻州縣）人。歷任權國史院編修、內鄉（河南）縣令、尚書都省掾及左右司員外郎等。金元時戰火四起，紛亂不斷，不少人國破家亡，流離失所。這些顛沛流離的經歷也都反映在元好問的作品中。著作有《統夷堅志》《中州集》《唐詩鼓吹》《唐詩註解》《遺山樂府》《遺山先生文集》等。關於其文學成就，元明時雖有《中州集》等刊行于世，但由於當時的政治形勢，十七世紀之前並未得到正當的評價。直至清康熙三十三年（1694）隨著顧嗣立元詩選初集的出版，人們對元好問和金詩才開始重視起來，陸續出版詩集、詩選和年譜以及箋註¹。清代趙甌北就曾評其才之大書卷之多不及蘇陸，“然正惟才不大書不多，而專以精思銳筆清鍊而出，故其廉悍沉摯處，較勝於蘇陸”²，其中又引《金史》本傳之語，言其“奇崛而絕雕刻，巧縟而謝綺麗”。

元好問的作品很早就流傳到日本，如他所編集的金人作品集《中州集》在日本南北朝時期就有覆刻版流世，曾在五山禪僧間傳閱³。除《中州集》外還有《唐詩鼓吹》《唐詩註解》⁴，以及竹添光鴻編《元遺山先生文選》七卷、《元遺山先生詩選》，以及垣內保定編《元遺山先生詩抄》二卷，小松直之進編《元遺山詩選》二卷。對元好問作品進行綜合編輯的是近藤元粹，有《中州集》行世。筆者不揣譾陋，就和刻本元好問詩詞集的刊刻經緯及其作品在日本的受容傳播情況進行分析和考察，旨在探討江戶明治時期漢詩文壇的風氣走向和當時的漢詩人對元好問的接受和評價情況。

一 元好問編選《中州集》各版本的刊行

《中州集》早在1249年就已成書，刊行於1250年⁵。但原刊本不傳。現存最早的是乙卯（1255）新刊本，還有元至大三年（1310）平水曹氏進

和刻本元好問詩詞集的刊行
及其在日本的受容探析

德齋遞修本以及元延祐乙卯（二年，1315）刊元建安廣勤書堂修補本；明代有宣德九年（1434）廣勤書堂刊本，弘治九年（1496）李瀚本，明末毛晉汲古閣本；清代有四庫本，光緒七年（1881）讀書山房本，民國有董氏誦芬室影元本。四部叢刊本和中華書局排印本皆據誦芬室本⁶。元好問所編《中州集》也在早期傳入日本，為五山禪僧所讀。另外還有個人作品集也在後來傳入日本，並存有數種抄本存世。中國所傳版本，張靜《〈中州集〉版本及流傳考述》中曾按時代順序進行論述，但仍有未言及之版本及探討的餘地，在此進行補充。

乙卯（1255）新刊本

乙卯新刊本：日本宮內書陵部藏本，四冊，《中州集》十卷附《中州樂府》一卷。2001年綾裝書局出版《日本宮內廳書陵部藏宋元版漢籍影印叢書》即影印此本。四冊。《中州集》十卷附《中州樂府》一卷。卷首《中州集引》，卷十《中州癸集卷終》附《張德輝後序》。四周雙邊，雙魚尾，半葉十五行，行二十八字。第一卷缺二十一、二十二、二十五頁。第四卷缺第十一頁。第二種是傅增湘藏五山翻刻本（《藏園群書經眼錄》五集部下卷十八）。第三種是楊守敬所見日本五山板永正年間刊本（《日本訪書記》卷十三）。

元至大三年（1310）進德齋本

元至大三年曹氏進德齋遞修本：中國國家圖書館藏黃丕烈跋本。卷首元好問《中州鼓吹翰苑英華序》、《翰苑英華中州集總目》，卷末有黃丕烈跋。另外還有傅增湘所藏《中州集》十卷《中州樂府》（中州樂府配影抄日本五山版）。傅增湘在《藏園群書經眼錄》五集部下卷十八中所云如下：

元至大三年曹氏進德齋遞修本，每半葉十五行，行二十八字，白口，四周雙闌。分甲至癸十集。卷首遺山自序。其前題曰《中州鼓吹翰苑英華序》，次總目，題《翰苑英華中州集總目》。其首葉序“鼓吹翰苑英華”六字及次葉總目“翰苑英華”四字字體微異、行氣亦不聯貫、顯為後人補入。……是此書初刻當題“乙卯新刊”。鈐有“傳是樓”、“徐乾學印”、“健菴收藏圖書”、“茂苑香生蔣鳳藻秦漢十印齋秘匣圖書”諸印。

按：世傳清初毛斧季宸在都下得蒙古刊本、為徐健菴乾學豪奪以去。此本有徐氏印、當即徐氏所奪者也。樂府一卷原缺、余取日本五山覆刻本補入。樂府後有“至大庚戌良月平水進德齋刊”牌記二行。近年董君綬金暇去影摹、重刊行世。(余藏)⁷。

據張靜研究，此書經毛宸、徐乾學，後又流入蔣鳳藻、繆荃孫及傅增湘手中⁸。

關於此本，筆者曾見靜嘉堂文庫本，行款與上述傅增湘所見元至大本同。又卷首有遺山自序，前題“中州鼓吹翰苑英華序”，次總目，題《翰苑英華中州集總目》，序“鼓吹翰苑英華”與總目“翰苑英華”四字字體不同。《中州甲集卷一》前一頁左下欄外有“從士禮居藏刻本影寫補入”，卷末有牌記：“至大庚戌良月 / 平水進德齋刊”。可見此本即元至大進德齋本。此本《中州鼓吹翰苑英華序》下鈐“歸安陸 / 樹聲藏 / 書之記”，“汪士鍾字春霆 / 號艮園書畫印”。每卷首鈐“汪士鍾 / 曾讀”。清張金吾《愛日精廬藏書志》卷三十五，瞿鏞《鐵琴銅劍樓藏書目錄》卷二十三中亦有記載外，陸心源在《儀顧堂續跋》中亦有記述云：

《翰苑英華中州集》十卷《中州樂府》一卷。前有元好問《中州鼓吹翰苑英華序》，首為十一卷總目，卷一首題《中州集》，下十集仿此。樂府則題《中州樂府》，每卷有目，連屬篇目。樂府卷末有至大庚戌平水進修堂刊木記。每葉三十行，每行二十八字，版心有字數，皆宋本舊式也。

陸心源所述此本是上述靜嘉堂本所藏本無疑。又陸心源在《儀顧堂續跋》卷十四「元槧中州集跋」中有如下記述：

進修堂當是書坊之名，猶建安之有勤有堂、萬卷堂耳。宋元之際，坊刻南有麻沙，北有平水，遙遙相對。然麻沙刊本流傳尚多，平水刊本此外惟平水韻略，蓋亦難能而可貴矣。汲古毛氏刊本，先缺樂府，後得陸文裕家藏本，始成全璧。

按建安勤有堂為即下文所述廣勤書堂故名⁹，此處進修堂或是進德齋之舊名。

元延祐乙卯（1315）刊本

元延祐乙卯刊元建安廣勤書堂修補本較為稀見，瞿鏞曾見此延祐本，《鐵琴銅劍樓藏書目錄》卷二十三有如下記載：

和刻本元好問詩詞集的刊行
及其在日本的受容探析

《中州集》十卷，元刊本。金元好問撰並序。是書初刻有龍山趙國寶本，為至大庚戌武宗三年也。此本為仁宗延祐二年再刻，汲古閣毛氏所刻列朝詩集行款依此式也。

初刻龍山趙國寶本指張德輝序文中所云：“己酉秋得真定提學龍山趙侯國寶資借之，始鋟木以傳。”初刻本在己酉年（1249）就已成書，次年張德輝書跋。而現存最早的五年後的乙卯（1255）新刊本，其次為元至大三年（1310）曹氏進德齋遞修本，然後為元廣勤書堂刊延祐二年（1315）本。此處瞿鏞未言及乙卯新刊本，抑或瞿鏞未見此本。

經筆者調查，發現台灣國家圖書館藏《〈國家圖書館善本書志初稿〉集部總集類》元延祐乙卯刊建安廣勤書堂本，具體信息所記如下：

元延祐乙卯刊元建安廣勤書堂修補本 14235

四周雙邊。每半葉十五行，行二十八字；注文小字雙行，字較小，數不等，每十一字約相當大字八字。版心白口，雙黑魚尾相隨，上魚尾下方題“中州幾”，下魚尾下方則記葉次。

卷首第一葉卷首跨兩行頂格題“中州甲集第一”，後四行為目錄，均低四格，分上下欄。卷末有尾題。卷首有書名頁，上方橫批“廣勤書堂”四字。下分四欄，中央兩欄以大字題書名《翰苑英華 / 中州詩集》，其左右雙兩旁題一聯曰：“集國朝之風雅，煥星斗之文章”。書前有序文，題作《中州鼓吹翰苑英華序》。辛集目錄後、旁注“別起”二字。……末附中州樂府一卷，則係影寫鈔補，甚為精美。而此本裝訂時將樂府改置卷首目錄後。

書中鈐有“國立中央 / 圖書館 / 藏書”朱文方印，“擇是居”朱文橢圓印，“苙圃 / 收藏”朱文長方印，“炳卿珍藏舊槧古鈔之記”朱文長方印，“張印 / 鈞衡”白文方印，“石銘 / 秘笈”朱文方印，“吳興張氏適園收藏圖書”朱文長方印，“慈照院”朱文長方印，“雪 / 岑”朱文方印，“梅熟軒”朱文長方印¹⁰。

由上述藏書印可知，此延祐本曾經張均衡、張乃熊、內藤湖南等收藏。查“梅熟軒”與“慈照院”兩印，早稻田大學圖書館所藏郭璞傳、胡文煥校《山海經》十八卷三冊《新刻山海經序》下方亦鈐“梅熟軒”、“慈照院”藏書印，應屬相國寺塔頭所鈐之印。也即延祐乙卯本曾收藏於相國寺中。日本室町後期的臨濟宗僧惟高妙安（1480-1568）十四歲時入相國寺，並於天文九年（1540）任相國寺第九十世住持。妙安有抄物《詩

學大成抄》《天文部・雨》中有云：“章邯兵。……似是中州集中有”。妙安所見《中州集》很有可能是上述延祐乙卯刊本。另外，妙安還曾於文明五年（1473）年抄錄同為相國寺僧瑞溪周鳳的日記為《臥雲日軒錄拔尤》¹¹，也即妙安是當時重要的文僧。

明刊本

明刊本：明代刊本有宣德九年（1434）建安葉景達刻廣勤書堂本。宣德本並未廣汎流佈。長澤規矩也《和刻本漢詩集成》總集篇四收延寶二年（1674）九月田中理兵衛刊本，而所據底本則為宣德廣勤書堂本。此本卷首宣德九年陳孟浩《翰苑英華中州詩集敘》，次《中州集引》，次葉《翰苑英華中州詩集叙》，末附張德輝跋。此外還有明弘治九年（1496）李瀚刊本和明末毛氏汲古閣本。

明弘治九年李瀚刻本，大倉文化財團曾有收藏。《大倉文化財團漢籍善本目錄》記錄如下：

新刊中州集

十卷。首一卷中州樂府一卷。金元好問編。明弘治九年李瀚西安刊。元氏引，嚴永濬序，張德輝跋。泉心閣、少司寇兼御史中丞藍氏、藍皇翁印記。十一冊¹²。

毛氏汲古閣本，朱孝臧《疆村叢書》中收以明代九峰書院本為底本的《中州樂府》一卷，並校之以五山覆刻元至大三年本。朱孝臧在跋文中云：

右中州樂府一卷，彭汝寔毛鳳韶序，明嘉靖中嘉定守高登刊之九峰書院者。毛子晉刻中州集據宏治本，刻樂府即據此本。然頗有異文。……元至大庚戌平水進德齋刊中州集並樂府，日本五山嘗覆刻之，取校此本，頗資訂正¹³。

據此可知毛晉刻本所據為李瀚本，《中州樂府》一卷據九峰書院本。關於九峰書院本刊刻詳情，《疆村叢書》所收《中州樂府》一卷的卷首嘉靖十五年（1536）彭汝寔《近刻中州樂府跋》中有云：

《中州樂府》一帙，蓋金尚書令史元遺山集也。凡三十六人，總一百二十四首，以其父明德翁終焉。……蜀左轄我儼山陸先生會計之暇，目不瞬於檢閱，偶得是編，示予兌陽樓。……然則我儼山先生圖刻之意，其重有感於是編乎。嘉定守貴陽高等遂刻之九

和刻本元好問詩詞集的刊行
及其在日本的受容探析

峰書院。

又前文陸心源在《儀顧堂續跋》卷十四中云：“汲古毛氏刊本，先缺樂府，後得陸文裕家藏本，始成全璧。”此處陸文裕當指彭汝寔跋文中所云陸儼山，即陸深，字子淵，號儼山，諡文裕。

另外，台灣國家圖書館亦藏毛晉汲古閣本，其中有葉恭綽手記三行，謂此書得於吳門書肆，審為朱疆村先生物，擬為趙璧之歸，而先生遽爾僂化，可勝惘惘。卷末張德輝後序後有朱筆手跋十五行，署“嘉慶己巳中秋後三日雨館松舟王汝楫醉中識”¹⁴。

清刊本

四庫全書本《中州集》附《中州樂府》一卷，此本為毛晉汲古閣本。另有光緒九年（1883）讀書山房本。

台灣國家圖書館還有一部清初印溪草堂藍格抄本，其具體信息如下：

四周單邊，每半葉十行，行二十二字。注文小字雙行（部分為單行），字數同。版新白口，悉空白未題署，唯於右下端印有“印溪草堂”字樣。

首卷第一葉首行頂格題《中州甲集》，右旁下注“第一”，其下未題編者姓名。二至五行為本卷所收作者目錄，皆低二格，分上下欄，人名下注所作詩之數量。卷末行有尾題，並加一“終”字。冊首封面有書簽，題書名《中州集》，旁下注“汲古閣抄本”。書根亦手記書名，旁以小字記“甲集”，“乙集”以迄“癸集”，唯甚為模糊。是書無序跋。

本書只有中州集十卷，亦無目錄。每兩卷合裝一冊，全書共五冊，首冊末頁有“乾隆戊申（五十三年，1788）清和月古虞山席世昌假讀”及“乾隆甲寅（五十九年，1794）八月澣水芑孫獲觀”之觀款手書題記，前者並附鈐“淨／照”白文方印。第五冊卷末則有黃丕烈手書題跋記云：“乾隆甲寅仲冬得此於吳趨坊”，其下有小字注云：“平江黃氏士禮居藏書”，附鈐“蕘圃”朱文橢圓印¹⁵。由上可知此鈔本曾經清代王芑孫和黃丕烈之手。

雖然對元好問和金詩的關注在清代以降，但元好問所編《中州集》自元至清都有刻本傳世，部分以抄本的形式存在¹⁶。尤其是現存最早的

乙卯新刊本早期就已流傳到日本並在學僧中流傳。後來元好問自身的詩詞集也在日本刊行和抄錄，部分甚至留有日本漢詩人的批注。接下來主要探討一下和刻本元好問詩詞集的刊行和抄錄情況。

二 和刻本元好問詩集的刊行

前文已提到元好問所編《中州集》在日本有覆元版存在，並且出現在如惟高妙安的《詩學大成抄》中，也即當時的五山僧有機會接觸《中州集》。又有後來延寶二年（1674）田中理兵衛刊本，據長澤規矩也《和刻本漢詩集成》總集編第四輯¹⁷，此本所據底本為明宣德九年（1434）建安葉景達廣勤書堂刊本。此本目次中列《中州樂府》，但正文中并未收錄。又明治時期的儒學家、漢學家近藤元粹（1850-1922）曾編著多部書籍¹⁸，並通過青木嵩山堂出版，其中就有活版《中州集》十卷中州樂府一卷（青木嵩山堂，1908年）。近藤元粹所編《中州集》為明宣德本，又云：“又得延寶翻刻本，其書不啻不附樂府，校閱疏漏，訛誤脫文亦不為少”，“是書已不附樂府”。

上述為元好問所編詩集。除此之外，另有元好問自身的作品以《遺山先生詩抄》二卷二冊的形式，在日本刊刻行世。長澤規矩也《和刻本漢詩集成》補篇第十七輯中收此寫刻本：《遺山先生詩鈔》二卷。垣內保定（溪琴）編、野呂公麟（深處）校，天保七年（1836）正月和歌山世壽堂阪本屋喜一郎等刊本，二冊，帶香草閣藏¹⁹。

《遺山先生詩抄》由江戶後期紀州的豪商、漢詩人垣內保定（1799-1881）編著。

垣內保定即菊池溪琴，本姓垣內，名保定，字士固，號溪琴，又號海莊。日本勤王之士，曾積極參與國事，著有《海備餘言》一冊（宮內廳書陵部所藏）、《海曲蟲語》一冊（宮內廳書陵部所藏）等。亦曾從大窪詩佛、梁川星岩學習漢詩，有詩集《秀餐樓初集》（1829年刊刻）、《溪琴山房集》（又名《溪琴山房詩》、《溪琴山人二集》，1837年刊刻）、《海莊集》（又名《溪琴山人三集》，1849年）等。

首先有必要探討一下垣內保定編輯《遺山先生詩抄》的緣由。關於垣內保定的漢詩，《海莊集》（封面題箋“溪琴山人第三集”上 / 中 / 下）卷二卷首有江戶後期的儒學家和漢詩人廣瀨旭莊（1807-1863）的序文，

和刻本元好問詩詞集的刊行
及其在日本的受容探析

其中云：

夫唐宋之治，遠不及我邦。而其詩人若王孟，若蘇陸，皆能詠歌當代休明，而傳萬古，其功偉矣。顧我邦反乏其人，是為可憾。上有道而下未能詠歌，豈非文士立功之地乎。士固年壯，其業益進，能無遜於唐宋諸人。

又末附廣瀨旭莊之兄、江戶後期的漢詩人廣瀨淡窗（1782-1856）跋文，其中所云如下：

享保於王李，天明於范陸。一時翕然，模仿成風。三唐諸家，固已桃之。若蘇州悠遠柳州清峭，何嘗窺其闔奧乎。菊池子詩，風神氣味，與韋柳肖，而以雄放奇健雜之。蓋其人素有抱負，挖懷於清遠也。昔菅茶山告予云：我邦無學韋柳者，觀子才具，頗為相近，子無意焉乎。然予觀世人或擬其體，流於清弱，乏於骨氣，意欲其真，而不勝其偽，是以不屑為也。今讀此卷，極得我心。

另外《海莊集》卷三卷首有江戶末期幕府昌平贊的儒官安積良齋（1791-1861）的序文，現將部分內容摘錄如下：

故其發於襟詠，別開生面，不以纖巧浮艷為事。上焉者，孤情絕照，神韻冷然，優入韋柳之室。次亦清逸典麗，不失元遺山高青邱家法。方今詩壇中，鮮能現韻頡者。宜乎聲名之隆隆也，嗟賞久之。

由上述可知垣內保定詩風直追唐宋，神韻清遠的同時又雄放奇健不失骨氣，於金元又似元遺山高青邱。由此，垣內保定編著《遺山先生詩抄》亦在情理中。另外，《遺山先生詩抄》卷首有江戶後期的儒者野呂松廬（1791-1843），名隆訓，字翼卿作於乙未孟冬（1835）的序文，其中云：

老而築野史亭，振顯其志。更編中州集，以詩傳人，使人文並存而不朽。可謂其用意厚而苦矣。……逐軌歐蘇，而窺李杜，遂遡漢魏，能一掃金數年之陋習，而警醒後世。

野呂松廬序文後又有江戶後期的儒者、漢詩人仁科白谷（1791-1845），名幹，字禮宗所作序，其中云：

嘗閱遺山集，自拔其菁英數百篇，將命剞劂，其意蓋在矯時弊。予謂唐宋大家，李杜韓蘇邈矣。香山放翁，雖才大體備，要未得為大雅。遺山蛟騰幽並，追李攀杜，將撮勝於蘇陸間。……嗚呼，近世詩道荒穢、牛蛇不啻、怪僻相競、鄙猥交逞，或涵泳月露、或沈溺粉脂，以開天為龜拙。而所尚止於蠢體，軟其面、滑其口，

淫辭媠語，戶費家唱，織靡足以賊人子，凋瑣足以傷風俗，豈不痛乎。

由上述序文可知，垣內保定編輯刊刻《遺山先生詩抄》的主要原因在於法唐宋、正時弊、警後世。而遺山詩直追李攀杜，又法歐蘇陸。而日本漢文學家松下忠云：“從其海莊集中引用的詩人可看出，海莊較傾向於重視格調派、神韻派的詩人們”²⁰，也即垣內保定的詩傾向於以李白、杜甫、蘇軾、陸游、高啓為代表的格調派，和以王維、孟浩然、韋應物、柳宗元為首的神韻派。對於元好問的詩，垣內保定在《安政三十二家絕句》的《論詩二十首》中云元遺山詩：“長白山前風似刀，金源社稷亦悲號。文章難帶烟霞色，蒼鶻摩天秋氣高”²¹。言元遺山經歷亡國之痛，文章多慷慨蒼涼，又言其文章烟霞色不足，氣格蒼勁有力。

元遺山的詩，另有明治時期的外交官、漢學家竹添光鴻（1842-1917），字漸卿，號井井選錄的詩集《元遺山先生詩選》。竹添另有《元遺山文選》七卷補一卷傳世。

三 日本漢詩人對元好問的受容

前文已言及元好問所編著《中州集》五山覆元版的刊行以及明宣德年間建安葉景達廣勤書堂刊本的延寶二年翻刻本。元好問自身的詩文亦以文選或詩選的形式被刊行。又如收錄元好問作品的《佩文齋詠物詩選》、《墨林奇標》、《箋註宋元明詩選》在日本亦得出版流傳。如清朱梓、冷昌言編輯，華黼臣箋注《宋元明詩約抄三百首》二卷，近藤元粹就曾此本進行評訂，近藤在《箋註宋元明詩選》的《序言》中云：

唐賢詩集刻已成。繼及宋元明詩選，勢當然也。而古人選宋元明詩者至少，余以為遺憾。頃日適得清人朱梅溪冷諫庵所合選宋元明詩約鈔二卷。華綱齋稱揚以為篇簡體該，課蒙善本，加之箋註，訂其魯魚亥豕，刻以問世。今閱讀之，音韻鏗鏘，首首皆金玉，其選甚精。綱齋之言，洵不誣也。近日詩風一變，世爭學清人險怪艱澀之體，以為有得，而不復問唐宋元明詩之為何物，頗與往時世徒模仿李王而仇敵視宋人者相似。蓋未知其善解詩中之妙乎否。亦不免為痲癖矣。余於是依華氏箋註本，漫加批評，校訂一過，分為四卷，改命（名）曰宋元明詩選²²。

由上述可知，近藤元粹將宋元明詩析為四冊四卷，對其中的詩又進

和刻本元好問詩詞集的刊行
及其在日本的受容探析

行了評訂。而近藤評訂清人所選宋元明詩，最直接的原因是宋元明詩之選集不常見，其次的目的在於通對前人作品的推重，以此來糾正當時的詩風走向，意圖摒除清人險怪艱澀之傾向。這點與前文野呂松廬序文中所指摘“近世詩道荒穢、牛蛇不啻、怪僻相競、鄙猥交逞，或涵泳月露、或沈溺粉脂，以開天為龜拙”相一致。

近藤元粹對元遺山及其作品的評訂，如華綱齋在第一冊第五葉《凡例》中有：“元遺山、高蒙城，俱係金人。原刻列入元詩，失其真矣”云云。對此，上欄載近藤元粹的評語：“列元遺山入元詩中 / 者前人選中往往見 / 之可怪也”。先將各卷所選元好問詩及上欄所載近藤元粹的評語移錄如下：

第一冊十二葉《爵里小傳》

原文：“元好問字裕之。太原秀容人。仕至行尚書省左司員外郎。金亡，守志不仕。建野史亭於家，著書其上。有遺山詩集”。

近藤評語：“金虜中獨推遺山腥 / 羶群出是偉人可謂 / 奇矣”。

第一冊卷一《五言古詩》第五葉收元好問《憑亭》

原詩句：“人生要適情，無榮復何辱。乾坤如望眼，容我謝羈束”。

近藤評語：“妙句如為我設者”。

第二冊卷二《七言古詩》第十二葉收元好問《游黃華山》

原詩句：“雪氣凜凜隨陰風，懸流千丈忽當眼。芥蒂一洗平生胸，雷公怒激散飛雹”。

近藤評語：“黃華山詳於劉祁 / 遊林慮西山記載元 / 遺山詩集箋注可參 / 看”。

近藤評語：“劉記敘懸泉狀最 / 詳此詩以數句敘之 / 亦妙絕使人想像不 / 已”。

卷二第十二，十三葉收元好問《湧金亭示同遊諸君》。

原詩句：“太行元氣老不死，上與左界分山河。有如如鰲昂頭西入海，突兀已過餘坡陀。我從汾晉山來，山之面目腹背皆經過”。

近藤評語：“奇氣洋溢青蓮復生 / 字句長短錯綜得 / 盛唐之神髓原評以 / 為青蓮再生洵不誣 / 也”。

原詩句：“北望長空哦，今朝一洗眾峰出。千鬢萬髻高峨峨，空青斷石壁，微茫散煙羅。”

近藤評語：“余曾等富士嶽時 / 已踰口柄嶺入山淹 / 留三日頗有此

詩所 / 叙之狀”。

原詩句：“長安城頭烏尾訛，并州少年夜枕戈”。

近藤評語：“杜甫詩日暮風亦 / 起，城頭烏尾訛是詩 / 據此”。

第三冊卷三《七言律詩》二十三葉收元好問《橫波亭為青口帥賦》。

原詩句：“孤亭突兀插飛流，氣壓元龍百尺樓。萬里風濤接瀛海，千年豪傑壯山丘”。

近藤評語：“壯語奇恣”，“百尺樓則宣德非 / 元龍而古來以元龍 / 百尺樓為熟典可怪 / 也”。

第四冊卷四《五言絕句》十一葉收元好問《山居雜詩》。

原詩句：“瘦竹藤斜挂，叢花草亂生。林高風有態，苔滑水無聲”。

近藤評語：“對句成詩亦自一 / 體”。

第四冊卷四《七言絕句》十九葉收元好問《同兒輩賦未開海棠》。

原詩句：“枝間新綠一重重，小蕾深藏數點紅。愛惜芳心莫輕吐，且教桃李鬧春風”。

近藤評語：“有身份”，“寓意託深”。

由上述可見，收錄順序近藤元粹對元好問的五言七言古詩、七律、五絕、七絕都進行了評訂。評語從詩作的遣詞到作品整體的氣象和寓意，對部分作品，近藤與自身的心境和經歷相關進行評訂。就以上整理的評語全體而言，近藤對元好問作品的評價比較高。由此也反映出近藤本身亦推重宋元明詩的詩觀和傾向。

還有一種情況，即元好問的作品集舶來日本後並未以和刻本的形式出版，但依然有不少文人或研讀或作次韻詩。接下來以具體作品進行探討。

江戶末期至明治中期的勤王漢學家、廣瀨淡窗的門生長三洲（1833-1895），名芑，字世章，號三洲、蝶生、韻華、秋史等，著有《三洲居士集》五冊十一卷（1909年刊刻）。其中卷一有詩《秋懷依元遺山韻》，內容如下：

繞枕葉聲非雨聲，一林明月夜簾清。

人如秋樹寒同瘦，愁共燈花剔又生。

碧落妖星猶未滅，紫溟惡浪莫相驚。

詩人不與廟堂事，惻惻何心坐到明。

檢《遺山先生集》卷八七言律詩《秋懷·崧山中作》，原詩內容如下：

和刻本元好問詩詞集的刊行
及其在日本的受容探析

涼葉蕭蕭散雨聲，虛堂淅淅掩霜清。
黃華自與西風約，白髮先從遠客生。
吟似候蟲秋更苦，夢和寒鵲夜頻驚。
何時石嶺關頭路，一望家山眼暫明。

筆者寓目為早稻田大學所藏元遺山撰、張德輝編《元遺山先生集》光緒八年（1882），翰文齋書坊本。十六冊四十卷，附元《遺山先生年譜》（凌廷堪編），《元遺山先生年譜》（翁方綱編），《元遺山先生年譜》（施国祁訂），《遺山先生新樂府》（華希閔校），《統夷堅志》（元好問纂）。此本為靈石楊氏原刻本的重印本，柱刻“陽泉山莊”。有藏書印“槐南 / 詩料”，“森 / 宝書”，“窠莊館 / 森川氏 / 藏書記”，“鬢 / 絲禪侶”。此藏書印分別指明治時期漢詩壇的第一人森槐南（1880-1991），名公泰，字大來，號秋波禪侶、菊如澹人，以及明治大正期的漢詩人森川竹磾（1871-1919），名鍵（又名鍵藏），字雲卿，別號鬢絲禪侶。因早稻田所藏本第十五冊所收為“遺山新樂府 詞”，而森槐南、森川竹磾兩者又與詞密切相關，因此筆者著眼於詞。

《元遺山集》附錄四，封面右肩題“遺山新樂府 詞”，正文為“遺山先生新樂府卷第幾”。樂府四卷，上欄有朱墨筆批注，施注者應是森川竹磾或森槐南，從筆跡來判斷，森川竹磾的可能性更大。

又清代朱孝臧《疆村叢書》八收錄《元好問遺山樂府三卷》上中下，所用底本為高麗刊本。初刻本不傳，弘治五年（朝鮮成宗二十三年）木刻出版。朝鮮文人李宗準在《遺山樂府詩跋文》中所云如下：

於是就舊本考校殘文誤字，謄寫淨本，遂屬晉州慶牧、使任繡梓。
時弘治紀元之五年壬子重陽後一日。都事月城李宗準仲鈞識²³。

同書魯耀翰老師《朝鮮前期元好問〈遺山樂府〉의 受容에 대하여 : 金時習의 예를 중심으로》《朝鮮前期元好問〈遺山樂府〉的受容—以金時習為中心》中有詳細論述。

現以朝鮮本校早稻田所藏本元遺山樂府上欄批注，具體內容整理如下表：

卷數	詞牌 小序 / 首句	該當詞句	朱批	《疆村叢書》本詞句
卷一	摸魚兒 笑青山不解留客	朝來蒼暮 去紫	蒼紫二字 恐衍文	卷上 朝來暮去

卷一	滿庭芳 天上殷韓	常記 遇仙樓	樓 韓本作遊	卷中 常記遇仙遊
卷一	賀新郎 為良佐親賦	更傷心聽 得江 南曲、羯鼓 催紅燭	羯上 脫一字 韓本 有呼字	卷上 呼羯鼓催紅燭
卷二	行香子 浙江上作	是處紅過	紅 恐當作經	卷中 是處經過
卷三	婆羅門 素蟾散彩	留著三五 盈盈	三五盈盈 當作盈盈 三五	卷中 留著三五盈盈
卷三	梅花引 牆頭紅杏粉光均	全詞	泰和中西 州士人家 女(略) 韓本 有氏引	卷中 同文
卷四	木蘭花慢二	瑤□秀轉 春暉	□ 韓本作圃	卷上 瑤圃秀轉春暉

由上述表中比對內容可知，朱批所云韓本所指即朝鮮本。即朱批所參照底本是《疆村叢書》本所用朝鮮刻本《遺山樂府》。又據萩原正樹老師著作《森川竹磬〈詞律大成〉本文和解題》(風間書房，2016年)《〈詞律大成〉〈詞律〉詞牌對照表》，《江城梅花引》，《詞律》中收康與之、洪皓、陳允平、吳文英的詞。而森川竹磬又補入張汝茷、周密、陳允平(補體)、李獻能、元好問的詞體。對於上表所示卷三的好問《江城梅花引》“牆頭紅杏粉光勻”“又一体”，森川竹磬有如下批語：

單用平韻，後段起句不押韻。第二句作七字，比前詞，離魂句平仄異。腸斷下，唯有下，各九字，一氣串下，不必拘。○以上二詞，俱屬變格，故字數雖少，列之於後。

森川竹磬對元好問的詞從格律上進行了嚴密細緻的闡述。從另外一個角度來看，也即明治時期朝鮮本《遺山樂府》就已經傳入日本，並被精於詞學或對詞產生興趣的日本人所閱讀或用作參考。上述森川竹磬就是這一例證。

結語

本稿主要就元好問所編著的《中州集》版本在中國大陸台灣以及日本藏書機構的收藏情況進行了調查整理，又對元好問自身的作品《元遺山先生集》所收的詩在日本的流傳、接受情況，以及以元遺山的詞在朝鮮的刊刻進行了探討。現存最早的《中州集》為日本五山刻本“乙卯新刊本”，因其文獻價值極大，以楊守敬為首的中國著名藏書家的著述中均有言及。後又有元至大三年本和歷來不被研究者注目的台灣所藏元延祐乙卯刊元建安廣勤書堂本。元延祐乙卯刊本的內容與至大本無較大出入，但在版本流傳上具有非常重要的價值，不容被忽視。而且筆者發現元延祐本中鈐有“京都五山”之一相國寺的藏書印，通過調查得相國寺僧人曾在抄物《詩學大成抄》中提及《中州集》，也證明此集曾經在學僧間流傳。明代清代又有多部版本刊刻流傳。明代刊本有宣德年間的建安葉景達刻廣勤書堂本雖未廣汎流佈，但日本延寶年間所刻和刻本田中理兵衛刊本所據底本則為宣德本。可以說早期《中州集》傳入日本後，學人們對此本抑或元好問本身的關注一直存在。

其次，元好問自身的詩詞集也在日本刊行和抄錄，部分甚至留有日本漢詩人的批注。此部分主要探討了和刻本元好問的詩詞集的刊刻和抄錄情況。筆者舉垣內保定編輯《遺山先生詩抄》，探討其內因為，垣內保定的詩風直追唐宋，神韻清遠的同時又雄放奇健不失骨氣，於金元又似元遺山。也即垣內較傾向於重視格調派、神韻派的詩人。而外因在於通過法唐宋來達到糾正時弊、警醒後世的目的。由此得知垣內保定編著《遺山先生詩抄》的必然性。

最後筆者考察了元好問的詩詞集在日本的流傳和接受狀況。元好問作品的通過《佩文齋詠物詩選》、《墨林奇標》等在日本亦得出版流傳。近藤元粹就曾評訂《箋註宋元明詩選》，在評語中對元好問進行了高度評價，而評訂刊刻此本的目的也在於通對前人作品的推重，以此來糾正當時的詩風走向，意圖摒除清人險怪艱澀之傾向。除此之外分別舉江戶末至大正時期的著名漢詩人長三洲、森槐南和森川竹礪對元好問的詩詞的受容情況，並得知明治期朝鮮本《遺山樂府》就已經傳入日本，並被精於詞學或對詞產生興趣的日本文人所閱讀或用作參考。

除《中州集》外，《遺山樂府》傳入日本和流回中國的漢籍流傳之例，為我們瞭解同屬漢字文化圈的中日韓間的漢籍交流和文化交流提供了重要資料佐證。期待今後能通過更多的發現，在傳承文化的同時，也期待能進一步促進漢字文化圈的文化的不斷發展。

（拙文日文版收錄於拙著《中國・日本の詩と詞—〈燕喜詞〉研究と日本人の詩詞受容》第二部第三章，內容稍有修正。朋友書店，2023年3月）

注

- 1 據鈴木修次《元好問》（《漢文大系》第二十，集英社1965年。第17頁。），元好問詩集有：華氏本《元遺山全集》四十卷，有康熙四十六年（1707）序，刊行時間為康熙四十九年（1710）。又張穆編《元遺山先生全集》（筆者注：四十卷），有道光三十年（1850）自序。又有郭元鈞《御撰全金詩》（筆者注：七十二卷），康熙五十年（1711）刊。詩選有：顧奎光《金詩選》（筆者注：四卷），有乾隆十六年（1751）序。有江戶時期龜田鵬齋序，文化四年（1807）刻印行世。年譜有：凌廷堪《元遺山先生年譜》二卷，有嘉慶元年（1796）序。翁方綱《元遺山先生年譜》三卷，有嘉慶五年（1800）序。又有李光廷《廣元遺山年譜》二卷，有同治五年（1866）自序。箋註有：施国祁《元遺山詩集箋注》。
- 2 大窪行、堤鴻佐點，趙翼《甌北詩話》卷八。刊行年不詳，卷首有文政戊子（一一年，1828）宮澤雉序文，文政十年（1827）堤鴻佐題辭。長澤規矩也《和刻本漢籍分類目錄 增補補正版》（汲古書院，2006年版，第219頁）的《詩文評類》中錄文政一一年刊本，抑或此本。另參照霍松林、胡主佑較點《甌北詩話》，人民文學出版社1963年。第117頁。還有《古今詩話叢編》八，廣文書局，1971年。
- 3 鈴木修次《元好問》，《漢文大系》第二十卷，集英社1965年。第18頁。
- 4 元好問編《唐詩鼓吹》十卷和刻本，長澤規矩也《和刻本漢籍分類目錄 增補補正版》（汲古書院，2006年版，第193頁）記載元祿二年（1689）刊玉樹堂唐本屋吉左衛門本及寶永七年（1710）刊藤屋古川三郎兵衛門本及後印本。《唐詩注解》十卷，長澤規矩也同書中記載有延享四年（1747）刊本。
- 5 據內閣文庫藏五山版覆元本《中州集》卷末附庚戌（1250）張德輝序：“己酉秋，得真定提學龍山趙侯國寶資藉之，始鋟木以傳”。

和刻本元好問詩詞集的刊行
及其在日本的受容探析

- 6 張靜《〈中州集〉版本及流傳考述》，《江蘇大學學報》（社會科學版），2013年第十五卷第六期。
- 7 傅增湘《藏園群書經眼錄》卷十八集部七，中華書局，1983年。1534-1535頁。
- 8 張靜《〈中州集〉版本及流傳考述》，《江蘇大學學報》（社會科學版），2013年第十五卷第六期。同《金詩在元代的留存與傳播考述》，《遼寧工程技術大學學報》（社會科學版），2015年第十七卷第二期。
- 9 土屋紀義《古典籍の目錄記述の難しさをめぐって——〈書林清話〉補正一斑》（研究筆記），《大阪學院大學國際學論集》第二十二卷第一號，2011年6月。43-55頁。
- 10 國家圖書館特藏組編《國家圖書館善本書志初稿》集部總集類，臺北國家圖書館，1996年。66頁。
- 11 瑞溪周風著、惟高妙安抄錄《臥雲日件錄》，東京大學史料編輯所編纂《大日本古記錄》《臥雲日件錄拔尤》，岩波書店，1961年。
- 12 《大倉文化財團漢籍善本目錄》，財團法人大倉文化財團共立社，1964年。
- 13 朱孝臧《疆村叢書》（一）《中州樂府》一卷，廣文書局，1970年。148頁。
- 14 國家圖書館特藏組編《國家圖書館善本書志初稿》集部總集類，臺北國家圖書館，1996年。66頁。
- 15 國家圖書館特藏組編《國家圖書館善本書志初稿》集部總集類，臺北國家圖書館，1996年。68頁。
- 16 早稻田大學圖書館藏元好問編、郭元鈞補輯《御訂全金詩增補中州集》七十二卷二十冊。每卷首鈐“西疇艸廬 / 藏書之記”，“省軒圖 / 書之記”。前者為明治大正昭和時期活躍的漢詩人喜多橘園，後者為龜谷省軒。
- 17 長澤規矩也《和刻本漢詩集成》總集編第四輯，古典研究會，1974, 1975年。
- 18 芳村弘道《近代大阪漢文學の泰斗 近藤南州の編著について》，大阪藝能懇話會，2007年7月。承蒙芳村師雅教並惠賜此文及《南州先生詩文鈔》三冊，感謝之至。
- 19 長澤規矩也《和刻本漢詩集成》補篇第十七輯，古典研究會，1977年。
- 20 松下忠《江戸時代の詩風詩論—明・清の詩論とその摂取》，明治書院，1969年。803頁。

- 21 《安政三十二家絶句》上中下，須原屋茂兵衛，1857年。
- 22 清朱梓、冷昌言編輯，華黼臣箋注，近藤元粹評訂《箋註宋元明詩選》，青木嵩山堂，1901年版。1899年初版。
- 23 姚奠中主編、李正民增訂《元好問全集》下，《遺山樂府李宗準序》。山西古籍出版社，2004年。973-974頁。

Ci Poetry in Japan, China and Korea: Studies on Huajianji to Kondo Gensui

한중일사학논문집: 화간집에서 곤도 겐스이까지

ONLINE ISBN 978-4-910550-04-6

PRINT ISBN 978-4-910550-05-3

Asia-Japan Research Institute, Ritsumeikan University